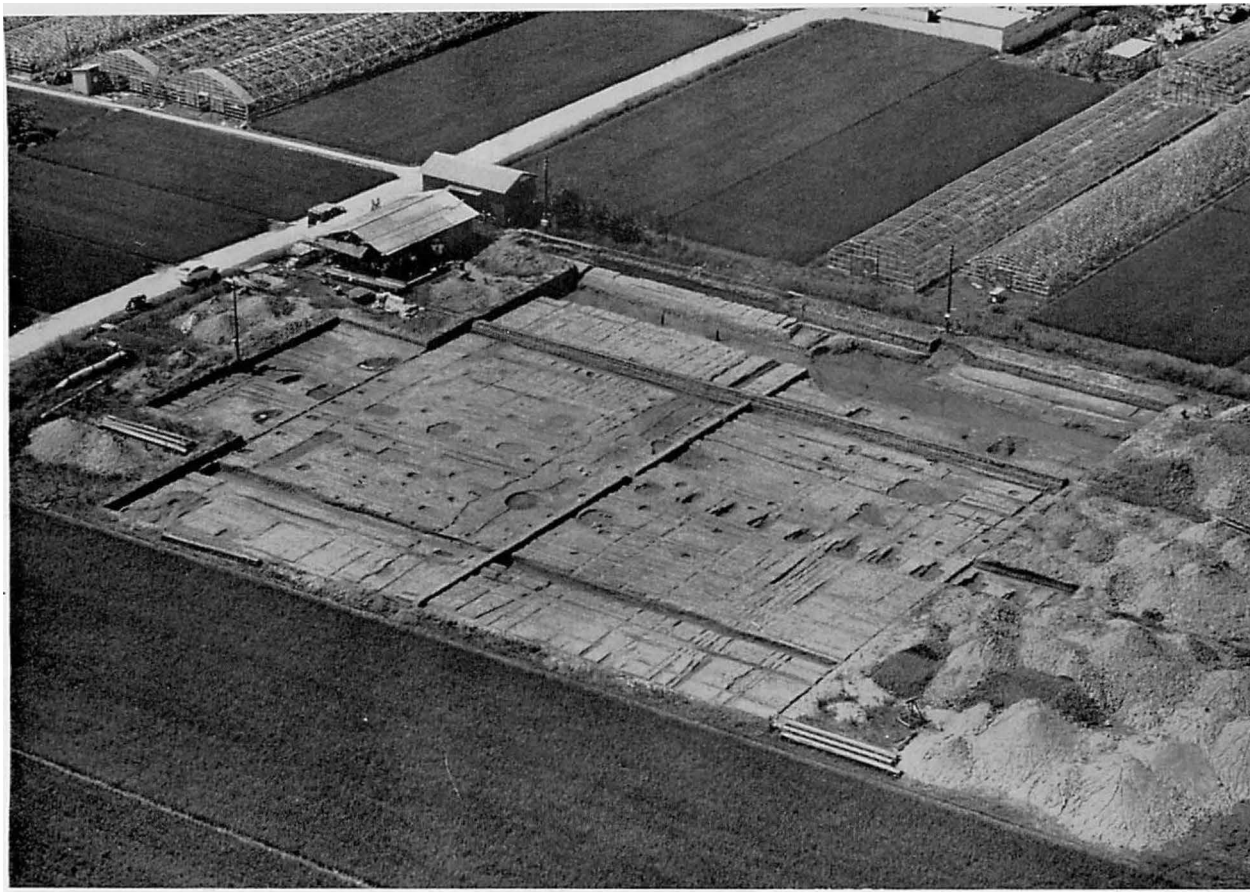
奈良国立文化財研究所年報

1976

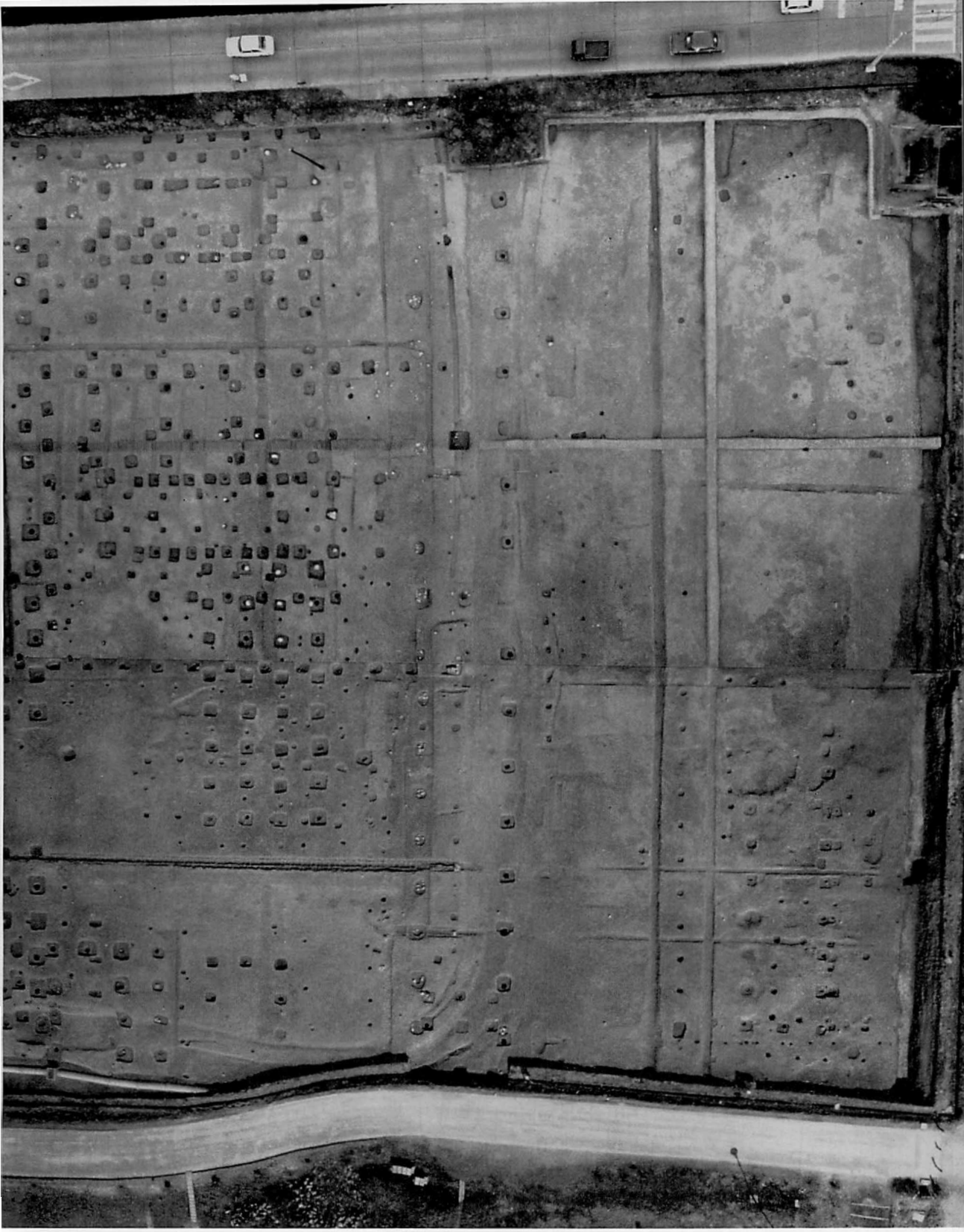
奈良国立文化財研究所

8　吉備媛王墓猿石の模型



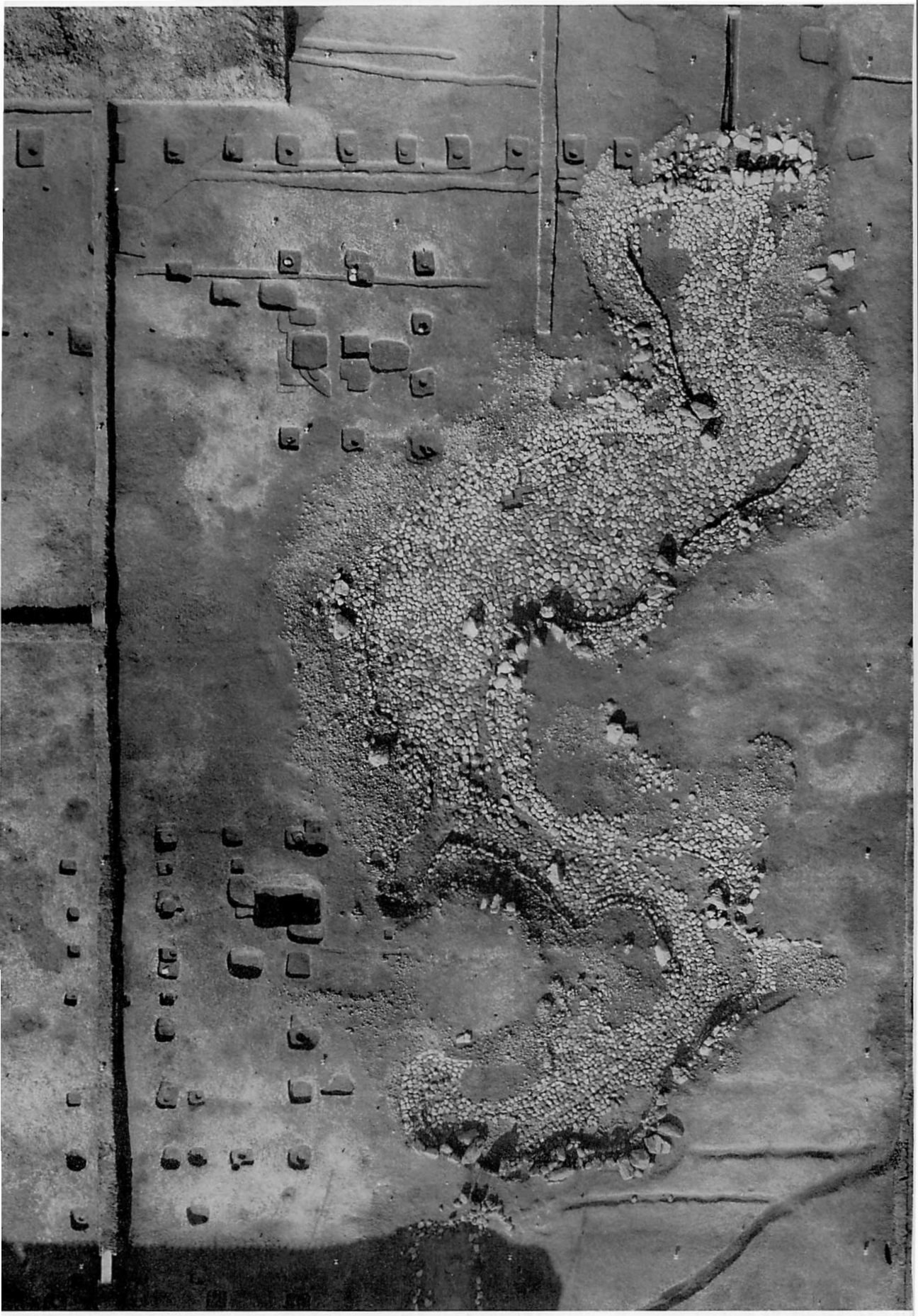
7　藤原宮北面中門（上、南から）　　大官大寺中門（下、北から）

6　1975年度出土藤原宮木簡



5　平城宮跡推定第１次内裏東半遺構

4　旧米谷家住宅　竣工（上）　修理前（下）



1　平城京左京三条二坊庭園遺構

目　　次

口　絵
1　平城京左京三条二坊庭園遺構
2　新薬師寺薬師如来像納入品
3　新薬師寺本堂内陣
4　旧米谷家住宅
5　平城宮跡推定第1次内裏東半遺構
6　1975年度出土藤原宮木簡
7　藤原宮北面中門・大官大寺中門
8　吉備媛王墓猿石の模型

はじめに……1
新薬師寺総合調査……2
1975年度木簡研究集会……11
伝統的建造物群の調査……12
　異人館を中心とした神戸北野・山本地区，五条の町並
旧米谷家住宅の修理……16
平城宮跡と平城京跡の発掘調査……18
　推定第1次内裏東半，左京八条三坊，左京三条二坊六坪，その他
平城宮跡発見の殿堂雛形部材……36
平城宮跡の整備(6)……38
平城宮跡第3収蔵庫の建設……40
飛鳥・藤原宮跡の発掘調査……42
　藤原宮北面中門，大官大寺中門，和田廃寺，その他
1975年度発見の藤原宮木簡……51
藤原宮跡の整備(1)……53
和田廃寺出土鴟尾の復原修理……54
吉備媛王墓猿石の模型製作……56
遺跡判読のための空中写真の撮影条件について……58
埋蔵文化財発掘技術者研修の現状……60
大和条里の計測（続）……61
在外研修成果報告―ドイツと北欧をめぐる―……62
公開講演会要旨……63
調査研究彙報……64
奈良国立文化財研究所要項……69

奈良国立文化財研究所年報　1976
発行日　1976年11月6日　編集・発行　奈良国立文化財研究所　担当　町田章　加藤優　印刷　共同精版印刷株式会社

はじめに

1975年度の年次報告として，当研究所の研究調査活動等の概要をここに公表する。

この年度において，平城宮跡発掘調査部は相当の精力を平城京各地の緊急調査にそそぐ結果となったが，1975年末には左京三条二坊の発掘で8世紀のほぼ完全な園池を発見するという画期的な事があった。飛鳥藤原宮跡発掘調査部では藤原宮北面中門の跡を確認，多量の木簡を発見する等の成果をあげ，また藤原京条坊の姿も漸く明らかになりつつある。

美術工芸・建造物・歴史の各研究室では，専門を同じくする所員が一体となり，社寺や民家等の共同調査を精力的に進めた。

飛鳥資料館は開館以来1年余を経過し，観覧者は10万人を超え，相当の評価を得ている。発足2年目を迎えた埋蔵文化財センターは，部制の設置・遺物処理研究室の新設があり，研修課程も増加し，各地方公共団体への指導も充実しつつある。

平城宮跡の整備も一段と進み，また新たに第3収蔵庫が完成し，収蔵施設が増加したほか，遺物の整理や保存処理のための施設が整い，また発掘作業員の控室を設けることができた。

このほか，学報等の刊行も漸く軌道にのるなど，当所の事業は一応順調に進んでいるが，事業量に比し人員や施設設備の充実が急務であり，各方面の暖い御支援を願ってやまない。

1976年9月

奈良国立文化財研究所長

小　川　修　三

新薬師寺総合調査

美術工芸研究室・歴史研究室・建造物研究室

新薬師寺は天平19年(747)に聖武天皇の病気平癒を祈って光明皇后が建立されたといい（東大寺要録），一説に天平17年（続日本紀）とも伝えられている。本寺の本尊木造薬師如来坐像，本堂については制作年代等についての定説がなく，本格的調査も行われていなかった。こうしたことから本尊については1975年12月，文化庁美術工芸課，奈良国立博物館および当研究所美術工芸研究室の手で調査が行われた。その際本尊像の像内から発見された納入経は歴史研究室が調査を担当することとなり，これと並行して本尊像と密接な関連が予想される本堂の調査も建造物研究室によって行われた。今回の調査は各部門とも今迄になく詳細かつ本格的なものであって，その結果は不明の点の多かった新薬師寺の歴史，文化財について解明するところも少なくないと考えられる。なお，建造物研究室では本堂とともに地蔵堂等の調査も行っており，あわせて報告する（口絵2，3）。

1　木造薬師如来坐像

今回の調査は修理調査が主目的であり，2mに近い巨像を台座から下す大がかりなものとなった。坐像の構造や技法については，1975年6月に奈良国立博物館と協同で行った予備調査の結果がほぼ裏付けされた。

像は螺髪を植付け，耳朶環状，三道を彫出し，身には大衣を偏袒右肩にまとい，各屈臂して左手を膝上に置き，手首をわずかに内側に向け，掌を仰いで第2・3・4指を軽くまげて薬壺をとり，右手は前方に出し手首をやや外に傾け第3指をわずかにまげて掌を開いて立て，左足を外に結跏趺坐する。材質は榧材，頭体根幹部は両手上膊内側部，脚部正面の一部までを含めて一材から彫成，後頭部と背面に分けてそれぞれ内刳を施し，像のほぼ中央に籠められた木芯の部分を取去り，後頭部は植付けた螺髪の下に横長の蓋板を，体部は襟下から地付に至る長方形の背板を当てている。なお頭頂の部分と頭体の内刳の境の部分（頸部），即ち木芯が取除かれなかった部分は後世に何らかの衝撃をうけたためか欠失し，現状では，内刳が地付から頭頂まで貫通し，頭頂には銅板（後補）を当てて蓋をしている。この根幹材に左袖外側部，右手上膊外側部に各別材を矧付け，左手首，右手肘付近をさらに矧付けている。両脚部は10数材の縦木を上体の木目に合わせるように揃えて体部材を組入れるように矧付けている。裳先は後補。

光背は二重円相光。頭光は中心に蓮花八葉（十一方二遍切付），その外に放射光をあらわし，二重の紐でくくった連珠文帯の覆輪をめぐらし，外圏は四花と宝相華蔓文を配し，外縁に覆輪（内圏分に花弁繋を加えたもの）をめぐらす。身光は内圏無文，外圏は光脚先端から伸びた宝相華蔓草と荷葉を配し，頭光と同様にそれぞれ覆輪をめぐらす。頭・身光共外圏左右に化仏を付す（頭光分2軀—後補，身光分4軀）。化仏はそれぞれ本尊像と同形で，光背は二重円相光（周縁部欠失），台座は荷葉座で，下方から伸びた宝相華の茎上にのる。周縁部は宝相華葉及び火焔をめぐ

らし，頂上に火焔付の宝珠を付す。光脚は五頭形荷葉，下辺に蓮弁を並べた受座を付す。以上光背は桧材製，漆箔（後補）。二重円相，周縁部光脚など主要部は縦3材矧で，化仏の光背もこれらの材から彫出している。これに頂上の宝珠，火焔，化仏を受ける宝相華等を矧足し，以上を光脚の受座に嵌込み，台座上に固定し，台座上框から立てる八角の支柱で支えている。化仏はいずれも桧材・漆箔，右中段像のみ背刳を行っているが他は荷葉座までを含み丸彫とし，膝頭や荷葉の一部などを矧足している。各像は背面に打たれた鉄又は銅の環3個で光背に付すL字型金具にかける。

第1図　薬師如来像，像底の矧合図

台座は宣字形裳懸座。上框正面及び左右前半に裳を垂らし，受花（複弁），腰部は四隅に柱を立て，その間に鏡板を当て，柱を挟んで飾板を当て鏡板を格狭間形に残す。反花（複弁）下框（方形）2段からなる。いずれも桧材製で，上框は四方矧寄，中央部は5枚の横材を張る。受花，反花，下框第1段，同第2段はいずれも四方矧寄，腰部は柱，格狭間形飾板各一材製，この内側に4本の補強柱と各2枚の化粧束を立て，その間に横材の鏡板（前後及び右側分各1材，左側分2材）を当てる。垂裳は前面縦4材矧，両側分2材矧（前方縦材，後方横材），なお台座内部に松材の補強架構（後補）がある。垂裳は漆箔（後補），腰部の柱，化粧束を古色とする他，素地のままとする。

今回の調査で特に注目されたのは本体の木寄である。この像は従来からはほぼ全容を桧の一材から彫出したものといわれていたが，予備調査の際に，榧材であること，両脚部に不整の矧材のあること，内刳が施され背板を当てていること，両手が矧付けであることなどが確認され，その後，像を移動した結果，前述のような詳細が判明した。一木といわれていたのは，両脚部や右腕の矧材にいずれも縦材を使用し，あたかも一材から彫出したように木目を意識的に揃えて矧合せていたためである。この像の場合，このような構造から推定すると，元来全容を一木から彫出するのが目的であったが，像高191.5cm，膝張154.0cmに及ぶ像を彫出する原材が得られなかったため両脚部等を矧足したものと考えられる。飛鳥時代の木彫像が構造や技法の面から金銅像をそのまま木彫に移した感があるのに対し，本像の場合は木彫としての意識を十分に認めることができる。しかも像のほぼ中心部を通る木芯を取除いて内刳を施すのは，木材の保存上の性質を作者が理解していたためであろう。

次に様式的な特色である。幅と奥行を十分にとった頭・体部に眼鼻立ちをはっきりと刻んで，

測　点	法　量
本体像高	191.5cm
髪際―顎	38.3
面　　幅	39.2
耳　　張	51.7
面　　奥	51.3
肘　　張	152.2
胸　　厚	61.5
腹　　厚	75.0
膝　　張	154.0
膝　　奥	126.1
膝 高 各	31.2
光背総高	319.5
最 大 張	262.5
化仏全高	43.4～49.0
台座総高	104.5

第1表
薬師如来像法量

特にまぶたの輪郭や衣の縁などは鋭角に喰込むように刻んでいる。頬や胸などは肉を十分残しくびれもはっきりと深くあらわし，見事な刀の冴えが感じられる。こうした特色は唐招提寺に伝わる木彫群（天平時代後半）との関連も想起されるが，むしろ中国唐時代の檀像彫刻が様式上からも技法面からも基となっているのではないかと想像される。なお光背の意匠は独特のものであるが，強いて類例を求めると京都勝持寺薬師如来坐像（像高9.1cm）があげられる。この像は桧材の丸彫（光背，台座も共彫）で，いわゆる檀像彫刻と呼ばれており，本体の表現にも共通点が認められる。

新薬師寺の本尊像は様式的に本寺が再興された延暦12年(793)頃の制作と考えられているが確たる証拠はなく，むしろ今回の調査で判明した構成や技法，或は本堂との因果関係などから今後の研究によってその位置づけがなされるであろう。

なお，後述の納入品は像内内刳部，像底から約30cm高の位置に前後に渡された2本の桟（後補）の上に置かれた杉箱に納められていたもので，このうち法華経8巻は本像と相前後する頃のものと認められるが，像内の内刳の状態や納入情況から，当初の納入品であるか，追納入であるかは断定し難い。（田中義恭）

2　薬師如来像内納入品

像内より発見された納入品は法華経（8巻），手錫杖（1柄），法螺貝（1口），納入品奉籠箱（1合，今回取出されたのは蓋のみ），明治年間納入願文等である。ここでは紙数の都合上，法華経ならびに納入品奉籠箱蓋についてのみ述べることにする。

法華経　8巻　　巻子本，料紙黄穀紙，墨界線，原表紙（褐麻紙），原軸（黒漆朱頂棒軸），1行17字，白点（仮名，ヲコト点），縦27.5cm

本文・外題ともに全8巻すべて同筆で，1人の手により書写されたものである。その書法を見ると，奈良時代後期の写経に通ずるものが認められる一方で，それが崩れ筆者自身の筆癖が顕著に現れた個所が各所に入り交っている。これは写経に際して利用した藍本の書法に強く影響されながらも，時に個性が表に出て来たことによるものであろう。筆者の個性が現れた個所の書法には平安時代初期のものに一脈相通ずるところも認められる。したがって，奥書はなく正確な書写年代は不明であるが，本経の書写は奈良時代末期乃至平安時代極初期（8世紀末乃至9世紀初頭）頃と推定しうる。なお書法の統一性に欠けることにより，この筆者は写経生のように写経に慣れた人ではなく，したがって写経所で書写された経ではないであろう。

8巻全体にわたって白点（仮名・ヲコト点）が付せられており，またその白点の上に重ねて朱句点が打たれている。白点・朱点の剥落状況より，白点が先で朱句点は後と見られる。朱句点の打ち方は疎であり，文章の大きな段落を示すために付けられたものである。このヲコト点は

現在知られているヲコト点の系統とは大きく異なっており，特殊点と呼ばれているものの部類に属する。また星点（・）が主で，それ以外の線点（|,一等）の種類は極めて少く，また星点の形も乱雑で細長く，線点との区別が紛らわしい形のものも少くない。これらの現象はヲコト点発達史上極初期のものに多く見られるところである。また仮名字体は万葉仮名本位で，漢字の画の一部を省略して作られた省画体仮名が少い。さらにその字形は大形で，後世の漢文の振仮名・送仮名のような小字ではなく，本文の漢字に匹敵する程の大字のものも数多く見られることが注目される。

現在，加点年代を明らかにしうる最古の訓点資料は『成実論』天長5年（828）点（聖語蔵・東大寺）である。この天長5年点は西墓点・仁都波迦点系の第一群点に属し，星点の他に線点も多種類用いられ，ヲコト点としてはかなり整備されたものとなっている。またその仮名字体も万葉仮名は少く，省画体仮名本位となっており，その字形も小さくなっている。

第2図　法華経部分

このように，この法華経と成実論の白点を比較してみると大きな相違点があり，この法華経古点は『成実論』天長5年点よりも古体を示している。したがって法華経古点の加点年代は天長5年よりも溯ることが推測される。しかし現在では天長5年以前の加点年代を明示する資料としては，延暦年間に句切点・返点を加点したことが知られるものがあるのみで，ヲコト点・仮名については明確に年代を示すものは存在しない。したがって国語学上はこの法華経古点は弘仁年間を降らない平安時代極初期頃の加点ということができるに過ぎない。しかしその時期は書風による書写の時期と大きく隔たるものではなく，加点は書写後間もない頃と考えられよう。

朱句点の加点年代は未詳であるが，その朱はやや褐色を帯びていることにより，平安時代初期乃至はそれに近い頃といえる。その打ち方より，文章の大きな段落を示すために白点の補助として用いられたと考えられ，白点とほぼ同時であったとして差支えなかろう。

後述の奉籠箱蓋銘によれば，本経は元禄11年(1698)７月，本尊修理の際に細字法華経・金剛般若経・薬師本願経とともに像内より発見されたもので，本法華経のみが再度像内に納められたため今に存することができた。この法華経の納入時期については本尊造立当時またはそれより後の或時期の二つの考え方が成り立つ。しかし本経発見時には表紙は埃による若干の汚れはあったが，手擦れによる汚れは認められなかった。これは書写加点より納入までの期間があまり長くなかったことを示すものである。また像内納入経の現存例を見る限りでは，願主もしくは関係者が自身で書写するかまたは新刷せしめた写経・版経，もしくはとくに関係の深い本，或は二親・先師と因縁の濃い本を納入するのが通例である。したがって本法華経も，かなり後代になってからたまたま手元にある経を奉納したとするよりは，薬師如来像造立直後に納入されたと考える方が妥当なのではなかろうか。本像造立が一般に推定されているように延暦12年(793)頃とするならば，本経の書写ならびに加点はそれをやや溯る頃と推定される。

奈良～平安時代初期頃書写の法華経は数多く現存しているが，当初のままの姿で１部８巻具備して伝存している例は極めて稀で，その点でも注目すべきものである。またもしその納入時期が造立当初とすれば，本経白点の加点年代もかなり限定され，国語史資料としても極めて貴重なものとなる。また像内への仏舎利・経典・願文納入の現存例としては最古のものとして大きな問題を投げかける。なお白点については築島裕・小林芳規氏の御教示によった。ここに記してあつく御礼申し上げる。

納入品奉籠箱蓋　１口　杉材，覆蓋造，縦38.5㎝，横22.4㎝，高さ4.5㎝

蓋内面には右掲のような墨書銘が記されている。材色より見て元禄12年に新材をもって作ったものではなく，古材を利用したものと見られる。この銘文と，元禄13年７月にかの有名な護持院隆光によって作られた『新薬師寺縁起』とによって元禄年間の修理の状況を知ることができる。

（田中　稔）

（蓋裏墨書銘）
于時元禄十一壬寅年秋七月従将軍綱吉公母堂桂昌院殿
蒙本尊修覆之仰取去臺座本尊御腹内奉納御経覚
法華経細字全部一巻金剛般若経一巻薬師本願経一巻
右三通爲後験令惑得蔵宝蔵又法華経全部八巻如右奉
納畢是経モ御腹内有之経也其外薬師経理趣経并
如意宝一形内佛舎利三粒法ヲ奉納畢
于時元禄十二己卯年四月佛生日　　佛子舜清敬白

第３図　奉籠箱蓋墨書

3　本　堂　付地蔵堂

現在の新薬師寺は春日山麓の西と南に開けた低い丘陵の末端上に立地する。天平勝宝 8 歳（756）の「東大寺山堺四至図」には東大寺法華堂の真南に当るところに「新薬師寺堂」が描かれている。これが七仏薬師像を本尊としてまつった創建当初の金堂とすれば，現寺地よりも西方にあり，現在の本薬師町あたりに推定される。

現在の本堂の建立年代は様式上，天平時代の建立と認められているが，その由緒は明らかでない。応和 2 年（962）の大風で金堂が倒れるまでは，本堂と金堂は共存していたようである。応和の災害以後，金堂を再建したかどうかは明らかでないが，平安時代末頃には現本堂が寺院の中心となっていたと考えられる。現在の寺地が当初から寺域に含まれていたとすれば，その東北隅にあたる位置にあり，創建伽藍とは別個の別院的な存在であったと思われる。

現在，境内には本堂（国宝）を中心として，その前方東に鐘楼（重文），西に地蔵堂（重文）があり，本堂の正面に南門（重文），東に東門（重文）を開く。これらの建物の建設年代は，本堂は天平時代末期，東門は鎌倉時代初頭を降らず，鐘楼は鎌倉時代初期，南門は鎌倉時代末期と推定され，地蔵堂は棟木墨書銘により文永 3 年(1266)と確定した。このように，鎌倉時代を通して現在の寺地は整備されたようであるが，『奈良坊目拙解』（享保20年・1735），『大和名所図会』（寛政 3 年・1791），寺蔵古図（明治 2 年）によると江戸時代にはこれらの建物のほか釈迦堂，大日堂などの小堂があった。現在の地蔵堂はもと鐘楼の西に近接して建っていた西正面の建物で，現在の地蔵堂あたりには釈迦堂，南門外の東脇に大日堂（明治 2 年古図には地蔵堂と記す）があり，明治前半期に釈迦堂，大日堂を廃して地蔵堂を現在地に移していることが判明した。

以下は調査した各建物のうち，本堂と特に新しい知見を得た地蔵堂についてのべる。

本堂　入母屋造，本瓦葺で，基壇上に建ち，内部は土間，天井は化粧屋根裏である。内陣中央の円形須弥壇に本尊木造薬師如来坐像と，その廻りに十二神将立像をまつっている。

建立後の経過については古材を分類すると，平安時代中頃に柱の取替えに及ぶ修理があり，更に平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて，軸部，組物，構架等の全般にわたる大修理が認められる。鎌倉時代初期頃には内陣に天井を張っている。『新薬師寺縁起』によると延慶 3 年(1310)には正面に礼堂を設けている（天井と礼堂はともに明治修理に際して撤去された）。また，繋虹梁や肘木等に松材を用いた中世材があり，後世の大修理も再三にわたって行われている。元禄 12 年（1699）の本尊木造薬師如来坐像の修理に際して，本堂にも修理を加えたと思われるが明らかでない。内陣正面の柱絵はこの頃のものと考えられる。柱に残る痕跡や古図等によると，側面や背面の庇の随所に間仕切や中二階を設けており，参籠等にあてられていた。

明治30年 6 月古社寺保存法が制定されると，同年12月に特別保護建造物に指定され，この間に解体修理が行われて，建立当初の姿に復原された。

平面規模は母屋が桁行 5 間，梁間 3 間であり，周囲に庇をめぐらす。柱間寸法は桁行中の間 4.772m（天平尺16尺）で特に広く，その他は桁行，梁間ともに2.983m（天平尺10尺）である。

第4図 修 理 前 の 本 堂

第6図 本 堂 断 面 図

基壇は花崗岩壇上積で，正面3間，両側面中央1間に石階を設けている。この基壇は延慶3年に礼堂を取付けた際のものと考えられ，明治修理に際して礼堂を撤去したために正面基壇を縮めて整備されている。

柱は丸柱で，柱頭に丸味を付け，柱径は上下の差がなく膨らみはない。柱頭には頭貫を通し，側柱，入側柱とも大斗肘木を置き，柱間に間斗束を立てて断面円形の桁を受ける。側柱の大斗肘木には繋虹梁をかみ合わせて入側柱とつなぎ，内部は中央に4通りの大虹梁を架けている。肘木と虹梁は相欠きに組合わせて大斗に切込んで納める。

妻飾りは豕叉首，内部大虹梁の上は合掌を組み，入側桁と棟木の中間に母屋桁を通している。

第5図 現 在 の 本 堂

妻の豕叉首は側面の入側桁に直接叉首束と叉首棹を立てる。軒は二軒繁垂木で，1支1尺に割付けている。地垂木には断面円形の当初材を残すが，飛檐の角垂木はすべて中世以降の後補材である。

屋瓦は蟇羽瓦に興福寺の鎌倉再建食堂と同形式の軒先瓦が多く残り，また大棟の西鬼瓦と降棟の2つの鬼瓦は興福寺北円堂（承元4年・1210）と同形式とみとめられる。

第7図 本 堂 平 面 図

柱間装置は正面中央3間，背面中の間，両側面中の間を扉口とし，他は土壁とする。扉口には内法長押を打ち，地覆，方立，楣，辺付，唐居敷を組み，小脇壁は土壁とし，板扉を内開きに吊込む，辺付に大きく唐戸面を取るのは珍らしい。東側の扉板は当初のもので，珍らしい工法のものである。

この本堂の各部の形式，手法をみると，造営尺や虹梁の形式，桁や垂木の断面が円形で，柱天の丸味の大きいこと等は天平時代の手法をよく表わしている。しかし，肘木と大斗の納まりや，扉口辺付の唐戸面等に新しい手法が用いられ，地垂木勾配もやや緩くなり，これらの特色

を総合すると天平時代の末を中心とする頃に，その建立年代を推定することができよう。また正面中央間を特に広く取り，母屋の梁間を3間としていることは，仏像の安置と密接な関係が考えられ，当初から仏堂であったことは疑いなく，簡素な古代仏堂の好例と云えよう。今回の調査によってこの堂の性格と沿革を一層明らかにすることが出来た。

地蔵堂　桁行1間，梁間1間，入母屋造，本瓦葺，妻入の小堂である。建立年代は，慶長15年(1610)修理時の棟木の墨書銘に文永3年(1266)とあって，様式上も同年の建築と認められる。

軸部は円柱，側背面三方に腰長押，四方内外に内法長押を打ち，柱上頭貫に大仏様木鼻を付ける。四方に後補の飛貫を通し，側面は塗込める。正面は連子欄間下を格子戸引違いとし，他の三方は土壁とする。組物は平三斗組，中備えは正側面が本蟇股で，背面は間斗束である。軒は二軒で地垂木を繁垂木とし，飛檐垂木は地垂木1本あきの疎垂木で，中央のみ吹寄せとする。屋根は入母屋造の本瓦葺で，妻飾は豕叉首である。

軸部，軒，小屋，妻飾りともに当初部材をよく残すが，後世の改変も著しい。

正面の連子欄間は当初の扉構えの楣と三方幣軸を利用したもので，上幣軸には扉の軸釣金具当りがあり，縦幣軸の外側に沿って大面取の方立柱仕口がある。また両側面でも内法長押下面に正面とほぼ同寸の幣軸痕跡があり，三方が扉であったことが分る。また，柱には四方に半長押痕跡と縁をめぐらせた跡があり，堂内は床張りであったことがわかる。

軒は当初の隅木によると，飛檐も繁垂木で，現状の軒の出は地垂木，飛檐垂木ともに一支ずつ切り縮められている。

小屋構造は隅木に四天束を立てて叉首台を受け，叉首台両端に母屋桁を架け渡し，棟木は豕叉首上の斗で受けている。化粧隅木尻は現在側桁上に架けた井桁状の梁で支えられているが，もとは中央で4本組合わせて栓で止めていた仕口が残る。棟木は慶長修理の取替え材で，棟束，桔木も後補である。

建立後のかなり早い時期に背面に鴨居を入れて引分戸とし，軒の出を縮小して両側面の扉口を壁に改めたと思われる。更にのち，四方に飛貫を入れ，床，縁を撤去し，正面の幣軸を切って鴨居を入れ，上に盲連子を嵌め入んでいる。この時期も明らかでないが，慶長修理の頃と思われる。方1間の小堂であるが，当初から本瓦葺であったようで，三方を扉口とする独特の形式であり，建立年代及び後世の修理の状況も明らかになった。鎌倉時代中期の特異な遺構と認められ，細部，手法もすぐれている。

（岡田英男・宮本長二郎）

第6図　地蔵堂復原立面図

1975年度木簡研究集会

歴史研究室

木簡研究集会は，1976年1月13・14日の両日にわたって，平城宮跡発掘調査部資料館会議室において，日本史・考古学・東洋史の関係諸分野から41名の研究者の参加を得て開催された。この研究集会は，1961年の平城宮跡における木簡出土以来，全国各地の遺跡から木簡の出土が相次いでいる現況にかんがみ，関係諸分野の協力に基づく，木簡の基本的・総合的な研究を目的としたものである。

第1日目は，全国各地における木簡出土の現況を明らかにするため，飛鳥地方遺跡（報告者網干善教），藤原宮跡（和田萃・鬼頭清明），平城宮跡（横田拓実），多賀城跡（平川南），大宰府跡（倉住靖彦），伊場遺跡（東野治之）などの木簡出土の主要遺跡からの報告，ならびに正倉院の伝世木簡の報告（柳雄太郎）がなされた。各遺跡の出土木簡については，木簡の出土状況の概要，木簡の内容，木簡と遺跡・遺構との関係などの問題を中心として報告され，正倉院の木簡については，新史料を含め木簡の内容の紹介，伝来過程について報告された。

第2日目は，木簡の諸問題に関する3つの報告があり，その後，質疑討論が行われた。

大庭脩報告「中国出土の簡牘について」は，中国簡牘について，その発見の経過，簡牘の形態と名称，研究史，今後の研究課題についての報告である。

狩野久報告「木簡の形態・用途について」は，考課関係木簡，帳簿様木簡など木簡の種々の形態の問題，また用途については，宮内における門通行のための通行証的な性格の木簡，大粮申請の際の紙の文書と木簡の使いわけの問題などを通して，紙の文書に対する木簡の，木の材質を生かした独自の使い方を明らかにしたものである。

岸俊男報告「木簡研究の課題」では，木簡の出土・発掘調査に関する問題点，保存処理上の問題点，また形態・用途の問題について，日本における冊書の存否，また書籍書写の際の紙と木簡の使いわけの問題，更に，日・中簡の比較による日本の木簡使用の開始時期の問題などが報告された。

質疑討論は，日本における木簡使用の開始の時期，木簡と紙の文書との関係の2点を中心に行われた。木簡使用の開始時期については，日・中簡の付札の形状の異同，簡の材質（竹か木か），中国における簡牘使用の終末時期の問題などから論じられた。木簡と紙の文書の関係については，紙の文書に対する木簡の独自の機能という見解に対して，賛否の意見が寄せられた。

今回の研究集会は初めての試みでもあり，また問題の性質上簡単に結論は出ず，残された課題は多いが，関係諸分野の研究者が一堂に会し，実物に即して，これまであまり考えられなかった木簡に関する基礎的な問題について討議した意義は大きく，今後の木簡研究の進展が期待される。なお，今回は主として歴史学的見地に限られたが，今後なお問題を広げて続行する予定である。また，1976年度において，『木簡研究集会記録』を作成した。

伝統的建造物群の調査

建造物研究室

1　異人館を中心とした神戸北野・山本地区

1975年度に，神戸市に協力し，同市生田区北野町・山本通一帯の異人館をはじめとする都市住宅群について，伝統的建造物群としての保存に関する基礎調査を実施した。

1868年1月1日，兵庫開港以来，北野町・山本通など六甲山系を背に負う山手は住宅地として開発され，多くの外国人住宅が建設された。これらの住宅は異人館・西洋館などと愛称される洋風住宅であり，外国人ばかりでなく，明治末以降日本人の住宅にも影響を及ぼした。

この地区も他と同様，第2次世界大戦による戦災を大きく受けたが，それでも昭和30年代までは，洋風住宅が数多く，またこれらをとりかこむ樹木の緑も多く，異国情緒が豊かで良好な住環境をつくっていた。しかし，都心から至近距離に立地するという条件に恵まれているため，経済の高度成長とともに，昭和40年代には風俗営業のホテル，マンションが乱立し，特色ある伝統的な住環境が著しく破壊されだした。

調査内容の概略は次のとおりである。

1　北野町・山本通一帯の約45haについて建築の現況の把握。

2　敷地と道路関係，および樹木，塀・門など住環境を構成している要素の把握。

3　写真測量を応用した各種実測図の作成，および略測による実測図の作成。

4　調査地区の主要建築約150棟について調書の作成，および記録としての写真撮影。

調査の結果，調査地区内では住宅以外の建築が増えてきたが，以前は住宅が大部分をしめ，他にわずかの宗教建築があった。現在，全件数のうち第2次世界大戦以前の洋館は10%（約100件），和風住宅・民家が20%，宗教建築が1%であり，これらがこの地区の伝統的な建造物群をつくっている。しかし，最近では伝統的な形式でない建築が多くなってきている。木造モルタル仕上げの住宅がほぼ半数，マンションなど鉄筋コンクリート造の中層共同住宅その他が20%ほどあり，これらは数・量ともに洋館・和風住宅を圧到している。しかし，洋館の数は少いが敷地や建

A　明治・大正・昭和前期（様式建築）			B　昭和後期（非様式建築）	
洋館	Ⅰ類（明治～大正初，異人館）	和風住宅	Ⅰ類（明治末～，大邸宅）	低層住宅　洋館Ⅳ類（戦後の洋館）
	Ⅰ′類（大正）		Ⅰ′類（明治末～，洋館部を付属する和風住宅）	民家Ⅲ類（木造モルタル仕上げの住宅ほか）
	Ⅱ類（明治末～大正）		Ⅱ類（明治～，中小規模和風住宅）	
	Ⅲ類（昭和前期）			
		民家	Ⅰ類（～明治，農家）	中層共同住宅（鉄筋コンクリート造）
			Ⅱ類（町家・町家風住宅）	その他

第1表　北野・山本地区住宅の分類

第1図　北野・山本地区の洋館　1・2Ⅰ類，3Ⅰ′類，4Ⅱ類，5Ⅲ類

物の規模が比較的大きく，デザインが優れ，彩色が鮮かであるので目立った存在となっている。いっぽう洋館とともに，和風住宅もこの地区の良好な住環境と景観をつくる重要な建築である。

この地区の住宅建築は復原的に第1表のように分類できる。この分類によって，建築の特徴とその変遷をより明確に把握できる。

主屋やこれに付属する台所などのほか，道路と敷地の境界近くにたつ門，煉瓦塀・モルタル仕上げの塀，木造の塀，鉄柵もこの地域の環境形成にとって重視すべきものである。また，急斜面を切盛して造成した敷地では石垣を高く積み，広い道路に面するものは，地下に車庫をつくることが多く，正面にペジメントをつけたものがしばしば見受けられ，この地区の特徴となっている。また，建物とともにこの環境を良好にしているのは，比較的敷地の広い家が多く，樹木に恵まれていること，六甲山系の山を背に負い，前方に広く海と港を臨むことができ展望が優れていることなどによる。

今回の調査地区は，近代都市の都心近くに位置する点に最大の特色がある。その保存にあたっては，まずこれまで1世紀にわたって蓄積されてきた優れた都市の遺産を受けついでいくことであり，神戸らしい町づくりをつねに指向する必要があり，住宅地としての環境整備も考えられなければならない。地区保存の一方法として，比較的広い範囲を対象地区にとりいれ，法規制はゆるいものにし，その地区内にある特に重要な遺産については積極的な保存の措置を講ずることから除々に進めることが考えられる。また，住宅等の新築・改築にあたっては，行政的にデザインに関する相談や指導が行われる道を開いておくことも望まれる。なお，神戸市教育委員会『異人館のあるまち神戸』(1976年3月）に調査の概要をまとめた。　（宮沢智士）

2　五条の町並

奈良県五条市は1975年度の国庫補助金を受けて町並調査を行い，建造物研究室と奈良県文化財保存課が共同で調査を実施した。

調査地区は旧五条町と新町および二見の一部にかかる東西約1㎞程の旧街道筋で，町の南側は吉野川に面し，吉野川に流入する3本の小河川が町筋を横断している。

調査地区内の全戸数は176戸・135棟で，このうち戦後に改築を受けた9棟，および未調査2棟を除く，124棟についてはすべて調査した。

調査内容は町並全体については建物配置と屋根伏図を作成し，町並立面図は五条1丁目，本

第2図　五条町並立面図(1)

町２丁目の延長約500ｍの写真測量を行い，その他の部分は軒高・庇高を実測して立面図作成に備えた。また，町家の種別分布図として，年代別・構造別・階層別・用途別分布図を作成し都市施設の位置を地図におとした。さらに，道路の幅員や高低差の実測もあわせて行った。

124棟の町家については，現状平面図・配置図・正面細部の分類等に関する調書をとり，痕跡や旧状間取りによる復原調査を行った。そのほか，６棟については断面図を作成し，５棟については正面柱間装置詳細図を作成した。

五条の町並について特記すべきことは，建設年代の古い民家がとくに多いことであろう。年代の明らかな日本最古の民家である栗山正一家（1607年，棟札）をはじめとして，江戸中期（17・18世紀）の町屋は22棟を数え，これらを含めて調査棟数の64％にあたる79棟が江戸時代の建物と推定される。さらに明治時代の家が23棟あり，両者を合わせると全体の80％以上を占める家が伝統様式を保っている。これら伝統様式の建物はすべて平入りで，瓦葺きの大屋根と庇屋根が軒先を連ね，低いつし二階壁面は大壁としている。庇前面は現状では殆んど改造されているが，復原するとシトミ・スリアゲ戸となり，幕末・明治頃に格子に改造されている家が多い。

間取りは通り庭形式で母屋に前後２室とるのが原則で，さらに部屋を背面にとってツノヤとする例が多い。これは一般的に敷地の間口が狭く，上屋梁間が限定されたためであろう。間口は２間台から８間半まであるが，６間台以下が80％をしめる。また梁間は殆んど４間以下である。

間取は桁行に１列と２列の２通りがあり，これにツノ座敷を加えて，部屋数を２室から５室とするのが普通である。しかし，とくに大きい２棟では６室にしている。このほか，大型の家に小型の家をつけた子持長屋（４棟），二間取の二軒長屋（23棟），三軒長屋（２棟）などの長屋がある。とくに新町１丁目の吉野川に面した南側の町並では，13棟の２軒長屋が集中して，特徴的である。これに対し，街道東寄りの五条・本町２丁目では大型の家が多いことが目立っている。

現状の町並は吉野川の氾濫による度々の被害をこうむり，屋内や正面が改造されている家が多いけれども，江戸時代の伝統様式を伝える建物の本体は極めて良く残存する。とくに江戸時代中期に建築された建物が多く残っているのは，全国的にみても類例がなく歴史的価値は極めて高いといえよう。しかし，古い家が空家のまま放置されたり，取壊して新築する家も出はじめており，町並保存の対策を早急に進めなければならない。調査の概要は，五条市教育委員会『奈良県五條の町並』（1976年３月）にまとめた。　（宮本長二郎）

第２図　五条町並立面図(2)

旧米谷家住宅の修理

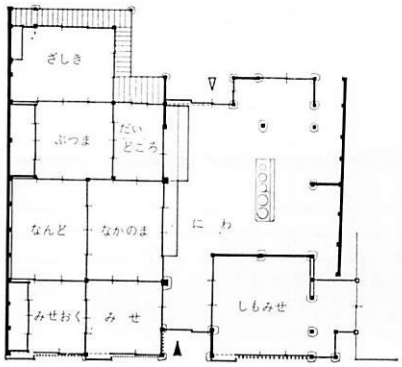
建造物研究室

国（文部省）所有の重要文化財旧米谷家の修理工事は，1974・75年度の２ケ年にわたって行い，今回その工を竣えた。工事は当研究所が文化庁より支出委任をうけ，一括請負工事とし，解体にともなう諸調査と工事監理とは建造物研究室が主としてこれにあたった。

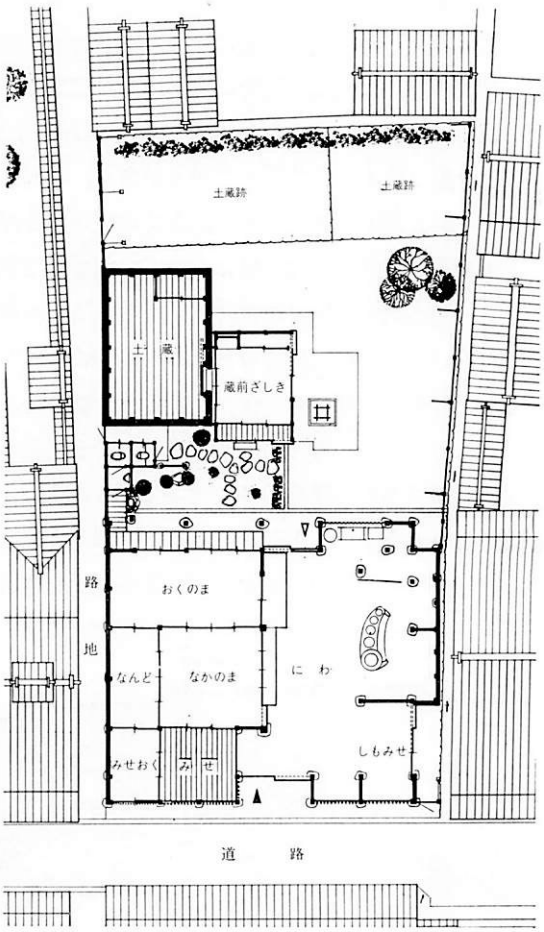
橿原市今井町は中世以来の伝統をもつ古い町で，先に指定・修理された今西家住宅（慶安3年・1650）はじめ，江戸時代各期にわたる民家がよく残っており，いわゆる伝統的建物群として全国的にみてもその価値は非常に高い。旧米谷家住宅はその中にあって18世紀中頃の上級商家の様相を保ち，町並景観を形成する一要素をなしている。

米谷家は代々「米忠」の名で肥料や金物をあつかっていた商家である。いつから現地に住みついたか明らかでないが，江戸末から明治にかけての５代目忠五郎代に最も繁栄していたらしく，主屋の改造，土蔵の新築をはじめ，東隣や向側を付属屋とするなど大規模な普請をこのときに行っている。1956年家屋が税の代納対象になり，その後家屋の荒廃が進んで無住のまま倒壊寸前に至ったが，1972年５月，主屋と土蔵とが国の重要文化財に指定され，同年10月文部省の所管（当研究所管理）に移り，今回の修理をむかえた（口絵４）。

主屋　柱の不同沈下や傾斜，屋根瓦の脱落など破損がはなはだしかったため，全解体工事として実施した。工事中の調



第１図　修理前平面図



第２図　竣工平面および配置図

査によって江戸末期（土蔵を新築した嘉永前後）に大改造をうけ，さらに大正年間にも一部改装されていることが判明し，かつ当初形式もほぼつかみえたので，所定の手続を経て次のような現状変更を行った。

1　背面の角座敷を撤去した。
2　東側隣家との取付き通路を撤去して，東側半間通りを背間から3間分の庇に改めた。
3　正面入口1間幅を1.5間幅に，背面入口を25cm，それぞれ広げた。
4　しもみせを縮小して，正面側に柱を復した。
5　みせ・みせおく，なかのま・なんど間の間仕切りを半間西へ送り柱を復した。
6　だいどころ・ぶつま間の間仕切りを撤去し長九帖の1室とした。
7　みせおく，ぶつまの押入を撤去した。
8　正面格子を古形式に改めた。
9　各建具を板戸あるいは障子に改めた。
10　くどを整備した。

以上のように復原した結果，土間が正面入口のふみ込み部分で広くなること，みせおく通りが1間幅と狭く，逆になかのまが8帖間と広くなること，おくのまが一室になり座敷としての機能がなくなることなど，江戸末期の町屋にはみられない平面形式をもち，少なくとも18世紀中頃は降らないものであることがわかる。また，解体の結果，梁・桁等から当初の柱番付が発見され復原の際の有力な資料となった。

土蔵　一部壁の脱落による軸部の腐朽がめだち，かつ蟻害もうけていた。しかし，全解体の必要はないと認められたので，木工事は一階床を主とする部分補修にとどめ，その他，屋根瓦の葺替と壁の補修と仕上げとを行った。

入口は東面し，蔵前座敷（指定外）より出入りする。一階の北側に押入があり，また一階二階とも壁面にそって2段あるいは3段の棚を設けていた痕跡を残す。建立時期を示すつぎのような棟木銘がある。「上棟　嘉永貳㊀酉歳六月十五日吉辰」五代目忠五良　年三拾九歳建之」大工吉右ヱ門」卯之輔」小手間　久兵衛」

その他　指定外の建物として，蔵前座敷・便所・塀などがある。付帯工事としてこれらの修理および整備を行った。蔵前座敷は土蔵建立直後に建てられたもので，今回は全解体の上別途格納し，主屋工事完了後旧状通り組立てた。便所・塀は年代も新しく，かつ破損が大であったので，一部旧材を再利用しつつ，西の路地側は桟瓦葺高塀形式に，東の溝側は板塀に整備した。

主屋の解体後に東西方向にトレンチを入れ，土盛等の地盤に関する調査を行った。その結果，現地表より約40cm下につき固めた面があり，東石様の玉石も見出し，旧生活面が明らかになった。西方にある豊田家住宅（重文 1662年）でもこれに似た状態が認められ，今井町全体が或る時期土盛造成された可能性も推測される。今井町の成立過程をみきわめる上で，環濠や土居とともに今後の調査に期待したい。

（細見啓三）

平城宮跡と平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では，1975年度において第１表に示す発掘調査を行った。宮内の調査では，２回にわたる第87次調査をもって推定第１次内裏の東半部の発掘が完了し，この地域を復原する資料がおおむね出揃ったことになる。

現状変更などによって行った小規模発掘のうち，第95—10次調査でえた平城宮西面外濠（西一坊大路東側溝）の知見によって，西一坊大路の幅員が明らかになった。

今年度も京内２ヶ所で大規模な発掘を行った。第94次調査は，1974年度にひきつづき奈良県営住宅建設予定地において実施した。この調査では平城京以前の瓦当文を出す寺院跡と東市周辺の居住地を発掘したのであるが，寺院跡の一部が保存されることになった。第96次調査は奈良郵便局移転予定地の事前調査であった。１坪のほぼ全域を発掘し，完全な形をとどめる庭園跡および殿舎を明らかにした。その遺存状況は，従来の発掘においても例のない良好なもので，各界から保存が強く要請された。その後，郵政省と文化庁との協議によって，保存の方向が打出されつつあるのは喜ばしい。薬師寺八幡院における調査では，六条大路南側溝を検出し，これによって六条大路の幅員が判明することになった。県に協力して行った大安寺の調査では，北面僧房の後方に位置する中房を検出した。

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
6ABP・BC	平城宮 第87次（北）	75. 7. 2～10. 2	34.0 a	推定第１次内裏東半北部
6ABP・BC	平城宮 第87次（南）	76. 1. 6～ 3.25	28.3	推定第１次内裏東半南部
6AHJ	平城京 第94次	75. 4. 4～ 6.16	25.0	左京八条三坊十・十五坪
6AFI	平城京 第96次	75. 5.30～ 7. 9 75.10.13～12.23	42.0	左京三条二坊六坪
6BFK	法華寺 第95—１次	75. 4. 4～ 6.16	1.8	
6BKA	海竜王寺 第95—２次	75. 5. 7～ 5.17	1.61	
6ALB	平城宮 第95—３次	75. 7.17～ 7.19	0.23	東面大垣
6AFK	法華寺 第95—４次	75. 7.21～ 7.24	0.26	
6AFK	法華寺 第95—５次	75. 8.19～ 8.21	0.22	
6ABO	平城宮 第95—６次	75. 8.25～ 8.26	0.12	推定第２次内裏北方
6BFK	法華寺 第95—７次	75. 9. 3～ 9. 6	0.48	
6BFK	法華寺 第95—８次	75. 9. 8～ 9.13	0.24	
6BSD	西大寺 第95—９次	75.10.27～10.30	0.33	
6ADA	平城宮 第95—10次	76. 1.20	0.4	西面大垣外濠西一坊大路
6AAN	平城宮 第95—11次	76. 1.27～ 1.30	0.58	北面大垣壇地
6BYS	薬師寺	75. 9.10～10. 1	2.5	食堂北方
6BYS	薬師寺	75. 9.25～ 9.29	0.27	北門南方
6AIF	平城京	76. 3.25～ 4. 2	1.2	薬師寺八幡院・六条大路南側溝
6BDA	大安寺	75.12. 6～12,23	1.92	北僧房
6BDA	大安寺	75.12.11～12.17	0.75	東僧房東方

第１表　1975年度発掘調査状況

このように，本年度の調査によっても宮と京の骨格は次第に解明されつつあるが，一方では京内諸遺跡の開発による破壊は休止することはなく，依然として大半が無処置のまま進んでおり，何らかの調査保存対策の立案が焦眉の問題になっている。

1　平城宮跡の発掘

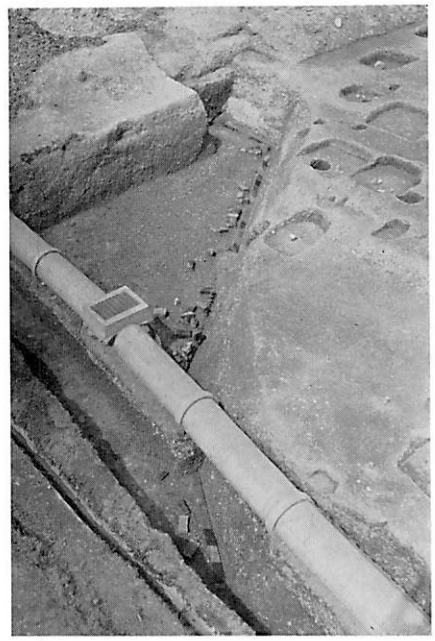
推定第１次内裏東半地区の調査（第87次）　推定第１次内裏は朱雀門中軸線上の北方に位置し，北半は宮内で最も高い台地の好所を占める。調査地は高台の東南縁にあたり，北は通称一条通，東は歌姫街道に接するおよそ6,230㎡の地区である。調査地の西側は第69次・72次調査として，また一条通の北側は第７次・81次調査としてすでに発掘されている。なお，推定第１次内裏東北地区については，今回の調査を含めて７次にわたる調査が実施され，全地域のおよそ60％の面積が調査されたことになる。これまでの知見では，奈良時代から平安時代にかけての間に４回の大造営がなされていることが認められている。

今回の調査地は，推定第１次内裏の東辺およびその外郭にあたる。検出した主な遺構には，建物17棟・門３棟・築地回廊３棟・築地１条・塀７条・溝14条・暗渠４条があり，ほかに多数の土壙があった（口絵５）。

建物・塀・門は一部を除いて掘立柱によって構築されている。これらの遺構は，重複関係や配置状況などから４時期に区分することができる（第２表）。ここでは，年代の古い順にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ期とし，各期の主要な遺構についてのあらましをのべることにする。

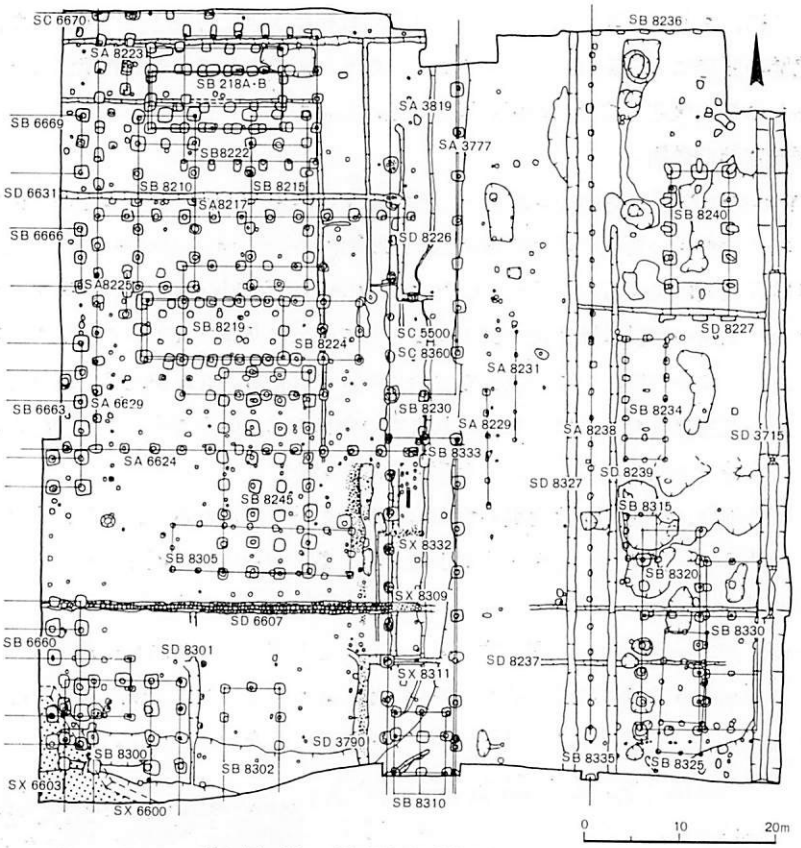
Ａ期　推定第１次内裏の東辺は築地回廊あるいは掘立柱塀で区画され，北方に一段高い壇を造成する。壇の前面は塼を積みあげ，南方の広場には砂利を敷きつめている。築地回廊の東外方は，南流する基幹排水路が東を画する外郭になり，二三の建物がたつ。

塼積壁ＳＸ6600は，第69次調査の東延長部分を検出した。南に向ってゆるやかに下がる丘陵の南端を切りとって造成した壇の前面に，平積の塼で化粧を施したものである。塼の残りは悪く，最高２段を残すのみであった。壇の高さは現状でおよそ1.7ｍである。壇の前縁は調査地西南隅で南南東に折れ，しばらくして再びわずかに北寄りに向きをかえ東へのびる。壇の下では，厚さ12cmほどのバラス敷面となる。この壇の上においては，Ａ期に属する建物は検出されていない。



第１図　塼積壁（Ａ期）

壇の東面を画する施設が塀ＳＡ3777であり，これは第27・41次調査で確認されたものの北方部分にあ



第2図　第87次発掘調査遺構図

時期	遺構平面形	時期	遺構平面形	時期	遺構平面形
A	SC5500 東築地回廊	B	SB8245 南北棟 7間×3間	C	SA6624 東西塀 12間以上
	SB8315 南北棟 3間×2間		SB8302 南北棟 2間以上×2間		SA6629 南北塀 16間
	SB8330 南北棟 6間×2間		SB8320 南北棟 7間×2間		SA8217 東西塀 11間
	SB8333 門 1間		SD3715 南北溝		SA8223 南北塀 2間
	SA3777 南北塀 14間以上		SD6618 東西溝		SA8225 南北塀 2間
	SA8229 南北塀 5間		SD8211 南北溝		SD3715 南北溝
	SA8231 南北塀 4間		SD8214 東西溝		SD6607 東西溝
	SD3715 南北溝		SD8216 南北溝		SD6631 東西溝
	SD3790 南北溝	C	SA3819 東面築地		SD8226 南北溝
	SD8237 東西溝		SB8218A 東西棟 5間×2間		SD8227 東西溝
	SX6600 塼積壁		SB8218B 東西棟 5間×2間		SD8301 南北溝
	SX8311 暗渠		SB8219 東西棟 5間×2間		SX8309 暗渠
B	SC8360 東築地回廊 16間以上		SB8222 東西棟 7間×4間	D	SB8234 南北棟 6間×2間
	SC6670 北築地回廊 3間以上		SB8224 東西棟 6間×4間		SB8335 門
	SB8210 南北棟 6間×2間		SB8300 南北棟 3間以上×4間		SA8238 南北塀 26間以上
	SB8215 南北棟 6間×2間		SB8305 東西棟 7間×2間		SD8327 南北溝
	SB8230 門 1間×2間		SB8310 門 3間×2間		SD8239 南北溝
	SB8240 南北棟 5間×2間		SB8325 南北棟 7間×2間		

第2表　第87次調査遺構時期別表

たる。今回は16間分を検出した。柱間はおよそ15.5尺等間だが，北から8番目の柱穴がなく，ここでは31尺の柱間となる。出入口にあたるのであろう。柱掘形は一辺約1.2mの方形で，一辺約40cmの正方形の柱痕跡をとどめるものもあった。塀SA3777の東に5間の塀SA8231が平行するが，塀SA3777の出入口に面しており，目隠塀と推定される。

塀SA3777との時期関係は判然としないが，壇の東面を画するもう一つの施設として築地回廊SC5500がある。側柱の痕跡は削平されているが，発掘区の中央南端にある溝SD3790は回廊西側の雨落溝である。底にバラスを敷きつめ，南端から約11mの部分では両岸をとどめ，その北方約10mの間は底のバラス敷のみが残り，それ以北では雨落溝の痕跡はない。発掘区の南部で検出した暗渠SX8311は，西端をSD3790に結び木樋で築地回廊を横断したようである。東外郭では開渠SD8237となって基幹排水路SD3715に注いでいる。溝SD8237は塀SA3777の柱掘形に重複することになるが，削平されているため前後関係が不明である。暗渠SX8311の北方約8mのところにある盲暗渠SX8309もこの時期に属する。これは築地回廊を横断するV字溝を掘り，バラスを詰めたものである。ただ，ここでは盲暗渠が雨落溝SD3790の延長線上までのびていないことが注目される。

発掘区内での築地回廊SC5500のほぼ中央に，門SB8333がある。柱間は1間（10尺）で，築地の一部を切欠いた簡単な門であろう。この東側に目隠塀SA8229をともなっている。

発掘区の東端で検出した溝SD3715は，宮内を北から南へ流れる基幹排水路である。同時に推定第1次内裏地区と推定第2次内裏地区とを区画する溝でもある。素掘りの大溝で，平城宮の全期間を通じて存続している。建物SB8330は，溝SD3715の西岸に位置する南北棟の建物である。東側柱穴の大部分は，溝SD3715の改修時に削りとられていた。建物SB8330の西北にある建物SB8315は南北棟の小建物で，南の妻柱筋をSB8330の北妻柱筋に揃えるのでこの時期にはいる。

以上のように，A期は最低2小期に細分されるのであるが，現段階ではただちに前後関係を定め難く，今後の検討にまちたい。

B期　A期の壇を南方へ移す。東面の築地回廊はA期と同位置で新たに建設され，壇上には10尺方眼を基準とする整然とした建物配置がみられる。東外郭には溝SD3715が存続し，2棟の南北棟建物がある。

発掘区の北辺で検出した4個の礎石抜取跡は，西方におけるこれまでの調査で確認されている北面築地回廊SC6670の南側柱列の遺構である。

東面築地回廊SC8360は，側柱の礎石の根石をとどめており，西側柱では16間分，東側柱では1間分を検出した。その規模は桁行13.3尺等間，梁間が2間で12尺等間と推定される。築地の本体は削平をうけているので不明である。A期の塀SA3777の門とほぼ同位置に，桁行1間（15尺），梁間2間（12尺等間）の門SB8230を開いている。北面築地回廊SC6670にともなう雨落溝が溝SD8214であり，東面築地回廊SC8360にともなうのが溝SD8216である。2条の雨

落溝は回廊の東北入隅部分で合流し，東方へ流れ出る。

築地回廊の内側には建物が林立する。発掘区の西南辺では，すでに存在を確認している東西棟建物ＳＢ6660の東妻を検出し，身舎の幅で階段がとりつくことがわかった。

今回は４棟の建物を新たに検出した。建物はすべて南北棟で，柱間は桁行・梁間ともに10尺等間である。各建物は相互に柱筋をそろえ，整然と配置されている。

北方で東西にならぶ２棟の建物（ＳＢ8210・ＳＢ8215）はともに桁行６間・梁間２間であり北から２番目の柱筋にも柱を立てる。建物ＳＢ8215の南に建物ＳＢ8245がある。この建物は４棟のうちでもっとも大きく，桁行７間，梁間３間の総柱建物である。これら３棟の建物の外側を囲む形で，溝ＳＤ6618と溝ＳＤ8211とがＬ字形にめぐっている。建物ＳＢ8245の南40尺のところに建物ＳＢ8302がある。梁間は２間であるが，南半が削平されて桁行は不明である。

東外郭には溝ＳＤ3715が存続し，西岸に２棟の南北棟建物がある。北方の建物ＳＢ8240は桁行５間，梁間２間で，柱間は10尺等間である。建物ＳＢ8320は桁行７間，梁間２間で，柱間は10尺等間であり，北から４番目の柱筋に間仕切りの柱をたてる。

Ｃ期　この時期では，築地回廊ＳＣ8360が築地に改修される。築地の内郭も全面的な改修を受けている。すなわち，内部を塀や溝で小さく仕切って建物を配置するのである。

築地ＳＡ3819は東面を画する築地であり，Ｂ期の築地回廊本体の位置を踏襲しているようである。築地本体の幅は不明だが，西側雨落溝ＳＤ8226を検出した。発掘区の南端で門ＳＢ8310をたてている。柱間寸法は桁行北端で８尺，北から２間目で13尺，梁間は９尺等間である。門の南部分は未発掘だが，このことから，桁行３間・梁間２間の八脚門が推定できる。東面にひらく主要な門であろう。なお，北面築地は確認していないが，Ｂ期の築地回廊位置を踏襲するならば，一条通の下に想定できる。

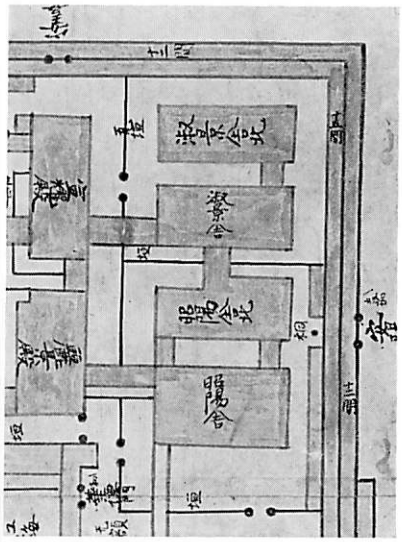
築地内の東北部を塀ＳＡ6624・ＳＡ6629・ＳＡ8217で囲む。これらはいずれも10尺等間の柱間である。塀ＳＡ6629は南北方向にのび，西側を限っている。北端はおそらく北面築地にとりつくのであろう。16間南へのびたのち南側を画する塀ＳＡ6624となる。この塀は東へ11間のびて東面築地にとりつく。塀ＳＡ8217は，塀ＳＡ6624と北面築地との間を２等分する塀で，両端は塀と築地にとりついている。この南北の区画内にそれぞれ１棟の東西棟建物がある。

南の建物ＳＢ8219は桁行５間・梁間２間の建物で，柱間は10尺等間である。この建物は区画の南北中央に位置し，側柱筋を西側の塀ＳＡ6629にそろえている。北の建物ＳＢ8218Ａは桁行５間・梁間２間であり，柱間は桁行が9.5尺等間，梁間が10尺等間である。この建物は後になって同規模の建物ＳＢ8218Ｂに建替えている。その後，再び両区画内の建物は廂をもつ東西棟建物に改築される。

改築後の南の建物ＳＢ8224は，桁行５間（10尺等間），梁間２間（10尺等間）の身舎の四面に12尺幅の隅欠廂を付した建物で，身舎の東から３間目と４間目の間に間仕切りを設ける。この建物もやはり区画の中央に位置している。北の建物ＳＢ8222は桁行５間（9.5尺等間）・梁間２間

（10尺等間）の身舎の南・北・西３面に12尺幅の隅欠廂をつけている。２棟の建物の西北に接して，目隠塀ＳＡ8225・ＳＡ8223が設けられている。ＳＡ6629の目隠塀に対応する部分の柱間がひらかれて両区画への出入口になるのであろう。

塀ＳＡ6624の南側には２棟の建物ＳＢ8305・ＳＢ8300がある。塀ＳＡ6624のすぐ南にある東西棟建物ＳＢ8305は桁行７間（9.5尺等間），梁間２間（８尺等間）で，この建物は柱掘形が小さく軸線がやや振れており，仮設的なものであろう。建物ＳＢ8300は発掘区の西南隅で検出した南北棟の建物で，東西に廂をもつ。北半の桁行３間分を検出したが，南半は発掘区外にのびる。梁間は４間で，柱間は桁行・梁間ともに10尺等間である。その東側柱に沿って雨落溝ＳＤ8301がある。



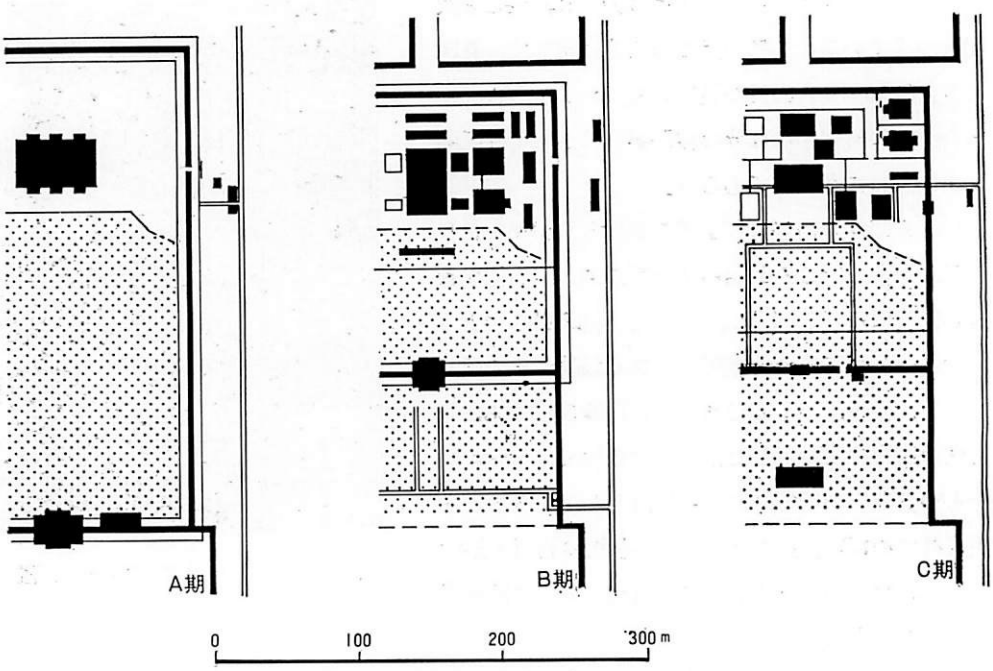
第３図　平安宮内裏東北部の建物配置

築地内の排水は西から東へ流れる２条の溝ＳＤ6607・ＳＤ6631によって処理されている。溝ＳＤ6607は建物ＳＢ8300の北側を流れる。幅約１ｍの掘形に玉石を積んで構築したものらしく，両肩と底部に玉石の抜取り痕跡がある。築地ＳＡ3819の基壇下において，木樋を設けたらしい暗渠SX8309でぬけ，東方では再び開渠となって基幹排水路ＳＤ3715に注いでいる。溝ＳＤ6631は塀ＳＡ8217の北側に沿って流れ，東面築地の西側雨落溝ＳＤ8226に流れこむ。築地に沿って南へ約10ｍ流れたのち，暗渠で築地基壇をぬけ，東方では再び開渠となって溝ＳＤ3715に注ぐ。暗渠は凝灰岩切石を組んだ堅牢なものであった。

この時期の東外郭には１棟の建物がある。建物ＳＢ8325は発掘区の東南隅に存在しており，溝 SD 3715に沿って建てられる南北棟建物である。桁行３間・梁間２間の身舎の南北妻側に幅10尺の廂をつけた建物で，身舎の柱間は桁行・梁間ともに７尺等間である。建物の軸線は北で東にやや振れている。

Ｄ期　Ｃ期の東面築地ＳＡ3819と基幹排水路ＳＤ3715のちょうど中央に位置して南北に通る塀ＳＡ8238と，これにともなう２条の溝ＳＤ8327とＳＤ8329が設けられる。塀ＳＡ8238の東側にはこれと平行に南北に細長い建物ＳＢ8234が建てられる。塀の西方ではこの時期に相当する建物を検出していない。

塀ＳＡ8238は発掘区内で26間分（柱間約９尺等間）を検出し，さらに南北にのびている。発掘区の南端にあたる個所に門ＳＢ8335がある。これはやや大きめの柱掘形一対で，およそ18尺程度の柱間となろう。なお，この門はＣ期の東面築地の門ＳＢ8310に対応している。塀ＳＡ8238をはさんで両側に溝ＳＤ8327と溝ＳＤ8239が平行する。溝の心々距離は約4.5ｍである。周辺の



第４図　推定第１次内裏地区遺構変遷図

調査地区でこの塀に関連するものを探すと，南方の第27次調査で検出した塀ＳＡ3740があり，この塀はさらに南方へのびる可能性がつよい。北方の状況は不明であるが，塀ＳＡ8238はＣ期のある時期に，築地の外郭を囲む施設として新設した可能性も出てくる。

建物ＳＢ8234は塀ＳＡ8238の東に接して建つ。桁行６間（８尺等間），梁間２間の南北棟建物で，棟通りの南から２列目の柱筋に柱を立てる。

遺物　今回の発掘により出土した遺物は瓦・塼・土器・金属器がある。遺物については現在整理中であり，ここではとくに調査中に気のついた範囲の記述にとどめる。

軒瓦のうち型式の判明したものは，調査部の編年でいう第Ⅲ期（天平18年～天平宝字初頭）にあたる奈良時代中頃の瓦が比較的多く，その多くはＢ，Ｃ期の遺構から発見された。塼のほとんどはＡ期の塼積壁ＳＸ6600の前面から崩壊した状況で出土した。このなかに方形の塼が含まれていたことは注目される。この種の塼は塼積壁の上縁に用いられたか，あるいは壇の上面の舗装に使用したものと考えられる。

土器の多くは溝ＳＤ3715から出土したもので，土師器・須恵器のほかに，灰釉・緑釉陶器がみられる。ほかに土馬３点が出土している。全般的に見ると奈良時代の末期における埋没の最終時と考えられる土器が多い。また，三彩を施した鉄鉢形陶器の破片が東面築地回廊付近で出土した。塼積壁ＳＸ6600を埋立てたときの整地土中からは，ＳＫ219の遺物と同時期とみられる土師器，杯Ａの破片が出土している。金属器では刀子・飾鋲・鉄釘・銅釘・鉄針と万年通宝１点が出土している。

まとめ　まずA期については，この地域の北寄りに造成された壇上敷地が東西両翼に袖をもつ空間であったことが想定しうるようになった。しかし，袖の部分が東面築地回廊にどのようにおさまるかという点については，今後の課題となった。

つぎに，B期の壇上に建つ建物については，すでに中心部分の配置が明らかになっており，10尺方眼を基準とする整然とした配置と柱間寸法の計画がなされていることが判明している。今回の調査においても，このことを確認した。また，今回の調査において東面築地回廊の柱間寸法を明らかにしえた。しかし，築地回廊についてはA期の築地回廊と掘立柱塀との関係や北面築地回廊の位置など，今後さらに検討を深める必要がある。

C期についても，塀による仕切りの多用，広廂建物の出現，礎石による補修など，中心部でえた所見と同様の性格をもつ遺構の存在が明らかになった。中でも築地東北入隅部における建物配置は，古図にみえる平安宮内裏東北部分の昭陽舎・淑景舎の配置と類似しており，C期遺構を理解するための有力な手懸りとなろう。

最後に各時期の年代であるが，今回の調査においても，従来の成果と矛盾するところがなかった。すなわち，A期を奈良時代前半，B期を奈良時代後半，C期を奈良時代末から平安時代初期にかけての時期に比定する。

北面大垣の調査（第95—11次）　平城宮北面大垣の近接地において，宅地造成にともなう事前の調査を行った。調査地は平城宮北面大垣が土塁状に良好にのこる史跡指定地に北接しており，平城天皇陵の前身である市庭古墳の後円部にあたる。

現状は畠地であり，その南辺と北寄りに東西に長い2本のトレンチを設定した。北のトレンチでは墳丘にかかわる痕跡はなく，地山上に厚さ10cm内外のバラスがおおい，そのなかに奈良時代の瓦や土器片をふくんでいた。少し南方へ掘りひろげたところでは，厚さ約20mで東西にのびる黄色粘土の盛土を検出した。発掘区が狭く確言はできないが，この盛土は北面大垣壇地にともなうものであり，外方のバラス敷は京極大路に関するものとみられる。北方のトレンチでは，西方に向って下降する地山を検出するにとどまり，葺石など古墳の痕跡をとどめない。しかし，地山の状況から直径150m程度の後円部を復原する手懸りをえた。

西面大垣外濠の調査（第95—10次）　京極大路に近い西面大垣の西方で宅地造成が行われることになり，事前の調査を実施した。調査地は南北に長い水田であり，その南と北に東西方向のトレンチを設定した。両トレンチで検出した遺構はほぼ同じで，トレンチの西部の幅約4mの部分では，水田下の床土を除去すると暗褐色砂質土の地山があらわれ，平城京西一坊大路路面敷と考えられた。東部は幅約1.4m，深さ約40cmの溝で，灰色粘質土，青灰色砂質土が堆積しており，下層の砂質土から少量の土器片が発見された。この溝は西一坊大路東側溝にあたる。ただ調査地内では幅員の全体を検出しておらず，東岸はさらに東にあると考えられ，約3m内外の溝が想定できる。さきに近接地での調査（第82—4次）で西側溝を検出しており，今回の発掘所見とあわせて，西一坊大路の幅員が約24m（80尺）であることが判明した。

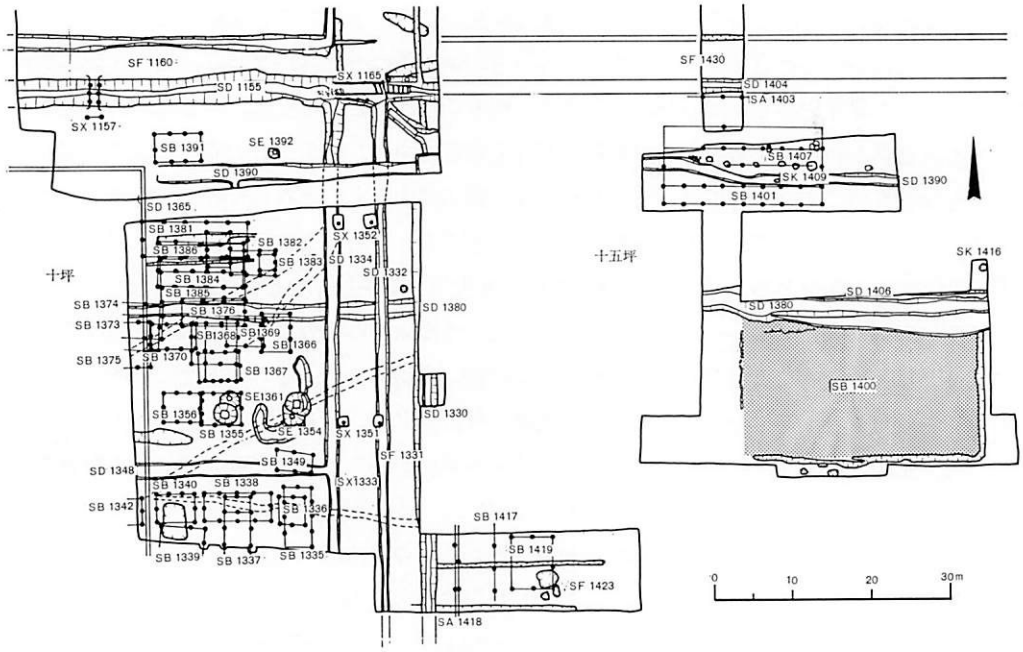
推定第２次内裏北方官衙の調査（第95―６次）　第95―６次は第２次内裏北方の外郭官衙地区の北東部にあたり，農小屋を車庫に改築する事前調査として約12㎡を発掘した。この地は従来の調査から市庭古墳の周濠を埋立て，官衙を造営したことが確認されている。今回もこの埋立てによる整地土をあらわし，さらに東西に走る築地南縁部を検出した。この築地の本体は発掘区に北接する現道路下にあり，外郭官衙の北辺を限る築地塀と思われる。但しその築地に伴う側溝などは今回の調査では発見されなかった。

２　平城京跡の発掘調査

左京八条三坊の調査（第94次）　本調査は奈良県住宅供給公社が奈良市東九条町姫寺に計画した県営住宅姫寺団地建設に伴う事前調査である。敷地の北半部分については，1974年度に第93次調査として発掘調査を実施し，堀河，坪境いの小路，建物，井戸など多数の遺構を検出した。1975年度は，第94次調査として敷地の南半部にあたる十，十五坪の主要部を調査した。両次にわたる調査の成果は『平城京左京八条三坊発掘調査概報――東市周辺東北地域の調査』（奈良県1976年３月）として既に発表されている。

第94次調査で検出した遺構には弥生時代と奈良時代のものがある。

弥生時代の遺構　壺棺墓１，溝，小ピット群を検出した。壺棺墓ＳＫ1409は十五坪の僧房の位置で検出した。直径60cm，深さ23cmの円形土壙に口縁を上にして壺形土器を納める。溝は十坪で３条を検出した。いずれも自然の流路と考えられ堆積土に第Ⅴ様式の土器片を含む。



第４図　左京八条三坊十・十五坪遺構配置図

時期	遺構平面形		
Ⅰ	SB1391	東西棟	3間×2間
	SB1381	東西棟	5間×2間
	SB1383	南北棟	1間×1間
	SB1370	東西棟	3間×2間
	SB1340	東西棟	3間×2間
Ⅱ	SB1385	東西棟	4間×4間
	SB1366	南北棟	3間×2間
	SB1356	東西棟	3間×2間
	SB1338	東西棟	4間×2間
Ⅲ	SB1384	東西棟	5間×3間
	SB1369	東西棟	2間×2間
	SB1355	東西棟	3間×2間
	SB1337	南北棟	3間以上×2間
Ⅳ	SB1368	南北棟	4間×3間
	SB1382	東西棟	3間×2間
	SB1335	南北棟	4間×2間
Ⅴ	SB1386	南北棟	2間×1間
	SB1376	東西棟	3間×2間
	SB1367	東西棟	3間×2間
	SB1336	南北棟	2間×2間

第3表　左京八条三坊十坪の時期別建物

奈良時代の遺構　主な遺構に寺院，小路，掘立柱建物，井戸，溝がある。

条坊遺構　小路SF1331は十，十五坪境の南北道路で，両側に北流する側溝を伴う。両側溝間の心々距離は6m（2丈）で，これまでの調査例と同じだが，東側溝SD1330は幅2m，深さ0.6m，西側溝SD1332は幅1m，深さ0.3mほどで，一方の側溝を広くする点は従来の知見と異なる。西側溝の西側には九坪の場合と同じく幅6mの道路状遺構SX1333がある。

十坪の遺構　坪の東北隅にあたる東西25m，南北55mの範囲を調査し，掘立柱建物26棟，井戸5基などを検出した。発掘区西端に建物群と井戸のある地域の西を限る南北溝SD1365がある。この溝は坪の中央を南北に貫流する堀河と小路との中間にあり，小路西側溝から100尺の位置にあたる。したがってこの溝は十坪を縦に¼に区画する地割の溝であった可能性が強い。建物はこの区画の全般に分布するが，相互の重複関係から5期にわたる建替・変遷が知られた。いずれの時期にあっても，主屋と考えられる桁行4～5間の廂付き東西棟を北寄りに配し，その南に桁行3～4間の規模の小さな付属屋を数棟ならべ，さらに中央部に1基の井戸を伴うという，共通した構成が認められる。しかし，時期が降るにつれ，各建物の規模は縮小する傾向を示している（第3表）。

文献上から十坪は東市の一部と推定されているが，今回の調査で検出した遺構・遺物からはこの坪を東市内と決定する手がかりは得られなかった。しかしながら，十坪の北を画する小路南側溝から多種多様の遺物が大量に出土したことや木簡のなかに物品の売買を示すものが含まれていることなどは，この地域が市と深く関連する場所であることを示しているといえよう。

十五坪の遺構　坪のほぼ中央に東西40m，南北30m，比高2mほどの敷地をもつ天神社がある。この土壇の北側に接して推定講堂基壇，その西北方に僧房，さらに寺域の北・西を限る塀などを検出した。講堂基壇SB1400の規模は東西29.5m（100尺），南北16m（54尺）である。基壇は地山上に直接土盛りして築いたもののようであるが，礎石痕跡は残存せず，建物の平面規模は判らない。僧房SB1401は桁行8間，梁間4間の南北廂付東西棟掘立柱建物で，柱間寸法は7.5尺等間である。講堂の中軸線の対称位置に東僧房の存在が推測されるが，今回は調査が及ばなかった。SB1402はSB1401の廃絶後に重複してつくられた礎石建物で，礎石および礎石抜取痕跡を10個所検出したが，規模や形式は明らかでない。僧房が礎石建物に変ったのは奈良時代後半頃とみられる。僧房の北側には東西小路南側溝沿いに寺域の北を限る塀SA1403があり，南

北小路東側溝に沿って西面を限る塀ＳＡ1418がある。いずれも８尺等間で各２間分を検出した。

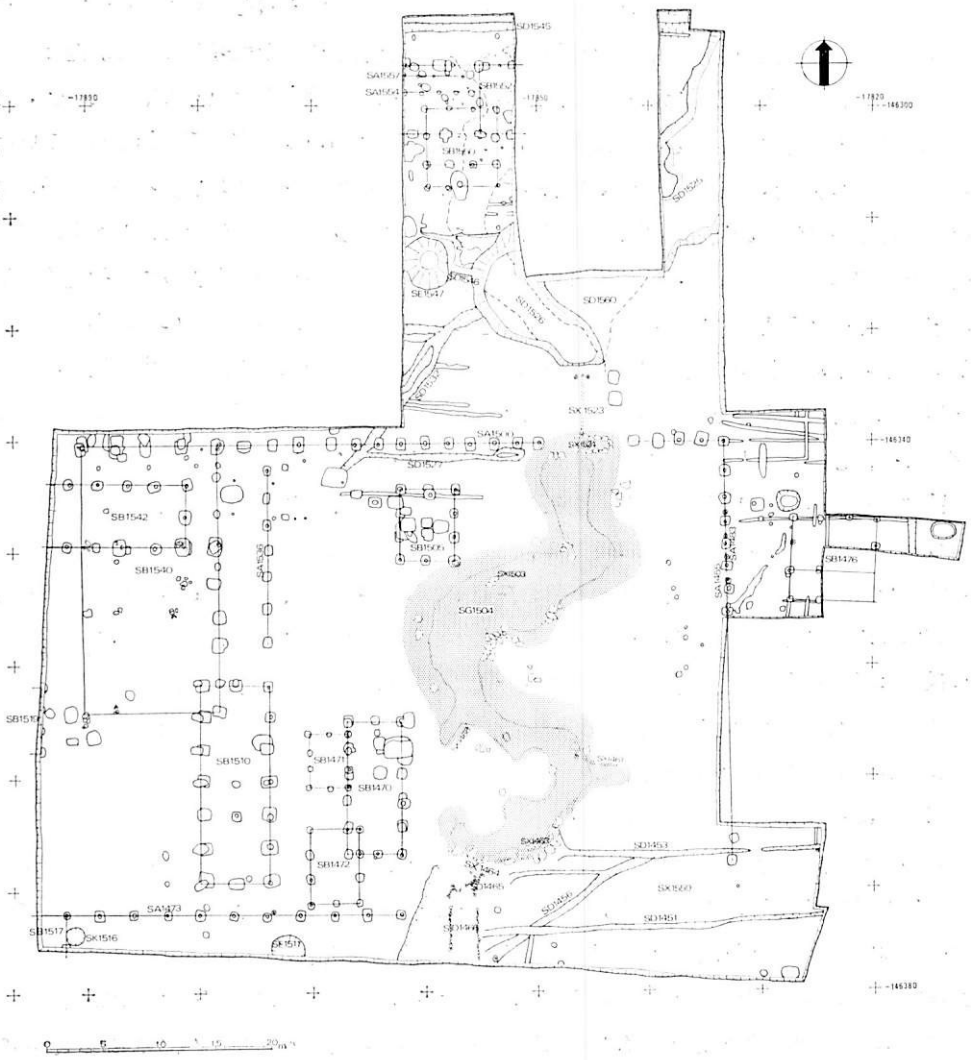
この寺院は，出土瓦からみて，白鳳期に遡るものとみられるが，今回発見した諸堂の位置関係および天神社土壇を金堂跡とみれば，条坊制の一町内にぴったりあてはまる伽藍配置が想定でき，条坊設定時に別な場所から移建されたものと考える方が妥当であろう。条坊遺構に先立つものとして十，十五坪にまたがる東西溝ＳＤ1380があるが，この溝は平城京南辺条里の南端から1,325ｍの位置にあたり，京造営前の先行地割に関連した遺構とみられる。講堂基壇はこの溝を埋めたてた後につくられており，移建説に有利である。本寺の廃絶期は，講堂と僧房の雨落溝から出土した10世紀後半の土器や，少量ながら出土した鎌倉時代の瓦が目安となろう。また，13世紀末の『西大寺田園目録』にみえる「ヒナタウ」は，その頃まで堂舎の一部が存在したことを示している。寺の名称に関して，東西小路南側溝から出土した「土寺」という墨書銘のある土器が注目される。土寺は土師氏との関連を考えるべきであろう。一方，近世の平安京絵図には，東市の近くに市姫金光寺（あるいは市堂・市姫祠）があるが，『金光寺縁起』によればそれは市の守護神としてまつられたという。今回の調査地辺には字名として「姫寺」が残り平城京においても東市の近くに市の守護のための寺社の存在したことを想定させる。今回発見した寺院跡と関連して考える必要があろう。

遺物　第93次調査においては，堀河ＳＤ1900および東西小路南側溝ＳＤ1155を中心として，多種多量の遺物の出土をみたが，第94次調査で出土した遺物は瓦・土器類に限られ，量的にも少い。特記すべき遺物としては十五坪の寺院跡から出土した瓦がある。大半は７世紀後半のもので，この寺の創建の時期を示しており，横井廃寺・海竜王寺・興福寺と同笵関係にある。

左京三条二坊六坪の調査（第96次）　今回の調査は奈良郵便局庁舎移転計画用地（奈良市尼ケ辻ゴトサ甲669―1）において行った事前調査である。調査地は左京三条二坊六坪のほぼ中央部にあたり，坪内の遺構の状況を解明する上で貴重な資料を提供するものと考えられた。調査はまず遺構の残存状況を確かめるため，予備調査（1975年５月30日～７月９日）として用地内の南端に東西トレンチ（70×５ｍ），東端に南北トレンチ（90×５ｍ）を設定し，800㎡について発掘した。その結果，敷地中央部で園池の一部とそれに伴うとみられる建物や塀などを検出した。こうした所見にもとづき，全面的な本調査（同年10月13日～12月23日）を実施し，約3400㎡について発掘した。今回の調査で奈良時代の園池の全貌がはじめて明らかになり，園池を中心とした建物配置や地割なども解明できた。庭園史上画期的な遺跡である。なお，調査概要については『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』（1976年３月）を刊行している。

検出した主な遺構は園池１，建物２棟，塀７条，旧河川３条，井戸２基などである。遺構はＡ・Ｂの２期に分れるが，園池は２期にわたって存続する。

園池　坪内の中心を南流していた旧河川ＳＤ1560を利用して園池ＳＧ1504が造成された。園池への導水路ＳＤ1525もこの旧河川を利用しており，京造営時に左京三条二坊の坊間路沿いに堀河として改修した菰川から給水していたと考えられる。菰川と導水路の接点には水量調節を



第５図　左京三条二坊六坪遺構配置図

行う堰のような施設があったのであろうが，今回の発掘ではその地点まで及ばなかった。池への導水はこの導水路から直接園池に水を引かずに，園池の手前でいったん貯水して，木樋暗渠ＳＸ1523により園池へ導水する。木樋は５ｍの一木（巾12㎝・深さ10㎝）を凹型にくり抜き，上に木蓋をのせる。木樋の導水口は蓋をくり抜き上面から注ぎ入れる構造になっている。取入口には木樋の両脇に１ｍの間隔で２本の小角柱（一辺15㎝）が検出された。導水のための関連施設であろうが構造の詳細は知りえない。木樋より流入した水は園池北端の立石で囲んだ石組遺構ＳＸ1524（６ｍ×１ｍ）に滞水し，浄化した後清水を池へ注ぐ。

園池ＳＧ1504は南北に長く蛇行しており，平均幅15ｍ，延長55ｍである。池全体は人頭大の

扁平な玉石を敷きつめている。水際には全体にわたって一列に玉石を立てて据えつけ，岸辺はゆるやかな勾配で玉石を敷く。岸の外側には挙大の礫を敷き地表を保護している。池底は同様に扁平な玉石を敷きつめ，ほぼ水平であるが，池尻の部分は排水を考慮して中央部の底石を一段下げている。導水口と溢水口の高さから推定すると，水面の幅は広い所で約6m，狭い所で約2mで，水深は広い所で最も深く約25cmで，全体に浅い池と考えられる。庭石は水蝕のある褶曲をもつ石英質片磨岩を水辺に，花崗岩に一部安山岩を混えて岸に使用し，しかも汀線が突出したり彎曲する変点に集中して配置している。また，池の中程やや北よりの西岸近くと池尻の東岸近くの2個所に，段違いになった木枠を拵えた旋設ＳＸ1503，ＳＸ1463がある。底板を敷き，その上に側板を2段に組み合せた箱状のもので，その中に土を入れて水生植物の栽培に使用されたものであろう。なお，池の堆積土中には，クロマツの球果，ウメ，モモの核，センダンの核，種子などとともに水生・水辺植物の遺体が検出されている。

園池南辺の池尻には壁状に一列の立石があり，その後に溢流部がある。池から溢流した水は南の階段状の石組の溝ＳＤ1465に流れる。さらにその水は幅2.1mの両側を玉石で護岸した排水溝ＳＤ1466に流れこむ。溢流部の石組の溝の下には，池尻と排水溝を結ぶ長さ25mの木樋ＳＸ1464（外法寸法20×20cm）が貫通している。木樋の構造は取入口と同様，池尻側の蓋先端部に径12cmの円穴を穿っている。木樋は池の水を抜く際に用いたものであろう。

前述した如く，園池の形状,水深の浅さなどから判断すると観賞と同時に曲水宴などの行事,雅宴に利用できる実用面をあわせもつものと考えられる。

園池に併存する建物はＡ・Ｂの2期に区分できる。

Ａ期　園地，建物7棟，塀6条,井戸2基,溝2条がこの時期に属する。Ａ期は平城京造営当初から天平勝宝年間に比定できる。すなわち，上限は園池導水路ＳＤ1525から出土した和銅年紀の木簡により，下限は柱穴から出土した平城宮第Ⅲ期の軒瓦や土師器の年代を根拠とする。建物は坪の中心線を基準として計画的に配置されている。すなわち，坪の中心部に園池ＳＧ1504を配し，これを囲む形で軸線から70尺の等間隔で，東西南北に塀ＳＡ1455・ＳＡ1536・ＳＡ1473・ＳＡ1500を設けている。2間×6間の南北棟建物ＳＢ1510，東西棟建物ＳＢ1519はともに北側柱を坪の東西中軸線に揃え，南北中軸線から西へ70尺・140尺に位置する。東西棟建物SB1542は西側柱が発掘区外となり確認できないが,桁行5間と推定すると南北中軸線より140尺に位置する。また2間×3間南廂の東西棟建物ＳＢ1550の東側柱は南北中軸線上に位置する。2間×3間の南北棟建物ＳＢ1505と2間×5間の南北棟建物ＳＢ1470は西側柱と東側柱を揃えて配置され，この延長線上から塀ＳＡ1473がはじまる。南北中軸線より西30尺にあたる。北側にある東西溝ＳＤ1545（幅約80cm）は三条条間路に面する築地内側の溝に比定できる。建物配置は10尺と7尺の基準方眼で計画されておりＡ期内でも2期の増改築が考えられる。こうした配置計画は建物，塀にかぎらず溝ＳＤ1451・1453・1456，井戸ＳＥ1511・1547にも適用される。また塀で囲まれた園池の西側の3棟の南北棟ＳＢ1505・1470・1510は，彼方の東山を借景に園池

を鑑賞するためのものであろう。特にＳＢ1505は池岸の石敷部に東南隅柱を立て，池台や池亭のような性格をもつものかも知れない。

Ｂ期　建物５棟，塀１条，溝２条がこの時期に属する。Ｂ期の下限は園池の埋土から出土した遺物により奈良時代末と考えられる。この時期も園池を中心にしたＡ期の計画的な配置を踏襲している。北塀ＳＡ1500の柱通りに北妻柱を揃えて４間×８間の礎石南北棟建物ＳＢ1540を配置する。東側柱は南北中軸線から西84尺にあたる。また，２間×３間の南北棟建物ＳＢ1471，ＳＢ1472は西側柱を揃えて配し，南北中軸線から西56尺の位置にある。また，東91尺の位置に西柱を揃えた２間×３間の南廂をもつ東西棟建物ＳＢ1476があり，目隠し塀ＳＡ1483を伴う。この時期の建物配置をみると，今回検出した建物のうち最大規模のＳＢ1540を主殿として，園池が広く見渡せるようその前面を広い空間地としている。

第６図　園池跡出土木簡

遺物　今回出土した遺物は発掘区全体から出土しているが，量的には多くない。土器類では二彩釉，緑釉，灰釉などの施釉陶器や土師器，須恵器が出土した。導水路からは木簡と共に奈良時代前半の土師器が出土したほか，園池の埋土からは園池の下限を示す奈良時代末の土師器杯や須恵器大型甕が出土した。

瓦類では約100点の軒瓦が出土した。軒瓦は平城宮内使用瓦と同笵のもが多い。このことは最近の京内調査で京内特有の瓦が認められた傾向とは異り，宮との深い関係を示すといえよう。また，年代的にみると平城宮の瓦編年によるⅡ期（養老５年～天平17年），Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）に属するものが多く，それ以前の藤原宮式軒瓦も若干ではあるが出土している。

木製品は排水路から人形・削り掛け，導水路の埋土から黒漆塗の容器蓋，人形，糸巻きの横木，鋤の把手，匙，曲物の蓋・底板が出土したが，あまり多くない。

木簡は64点出土した。出土遺構は菰川より園池ＳＧ1504への導水路ＳＤ1525で，予備調査ではその中間地点の青灰色粘質土から（14点），本調査では末端の屈曲部，木樋SX1523の水取入れ口付近から西へ南壁に沿って発見された（50点）。木簡が出土したのは旧河川の砂層上に貯水のとき堆積したと思われる暗灰色砂混り粘質土からで、多量の加工木片とともにあった。和銅５，７年の年紀のあるものが３点あり，地名表記等（長郡，額田部里など）からみても，木簡はほぼこの時期のものと考えられるが，園池造作に関連するか，上流より流れ込んだものか明らかでない。木簡の内訳は文書様木簡８，付札類９，習書４，削屑６，その他である。貢進物

の付札には，若狭（調塩　和銅5年），阿波のものがあるほか，里名・人名のみのものが多い。

この庭園遺構を考える資料となる重要な木簡として，つぎのものがある（第6図）。

（表）鴨郡□　　（裏）北宮俵□

某国鴨郡より北宮への用物（米か）貢進の付札であるが，北宮は和銅5年の長屋王願経（大般若経）の跋語や，神亀3年山背国愛宕郡出雲郷雲下里計帳にみえる。長屋王願経では文武天皇追善のための写経を北宮（文武天皇旧居といわれる）で行ったごとくであるから，跋語の北宮は藤原京所在であろう。しかし上掲計帳により北宮が平城京でも存在したことは明らかであり，この木簡は文武崩御ののち，その妹で長屋王室の吉備内親王にうけつがれ，平城京内に造営された北宮を指すものと考えてよいだろう。そのように考えると当庭園遺跡がその規模からみて北宮であった可能性は充分考えられよう。

上記の写経に関連するかと思われる木簡としてつぎのようなものがある。

（表）　五百冊二　　（裏）二百七十
　　一校授

木屑様の木片にかかれてはいるが，この大般若経の巻数を示すと思われる数字は写経風な文字であり，大般若経書写とのなんらかの関連を偲ばせる。

つぎの木簡はこの地域の居住者の性格を推測する手懸りとなる。

（表）御坏物直米二升充奉　（裏）受古女　九月三日椋垣忌寸

この木簡にみえる「御坏物」が天皇の御杯に盛った食物の意であることは，『播磨国風土記』賀古郡条から知られ，この園池遺構と天皇やその近親者との関係を示していよう。

その他に，官職名のみえる「中務省少録〔正七位カ〕□□□□」や，習書ではあるが「椋部智麻呂　高椅善麻呂」の人名のみえるものがある。

まとめ　左京三条二坊六坪の中心に園池を造成し，その西方には園池彼方の東山を借景に見る数棟の南北棟建物を配置し，四周を塀で囲んだこの一郭は，庭園遺構の機能をよくそなえている。こうした奈良時代の庭園遺構の発見は，日本庭園史研究上画期的なことであり，古代庭園の再評価を含めて，園池の意匠や作庭技法の基礎的資料を提供したといえよう。

つぎに左京三坊二条六坪の遺構の性格にふれてみたい。出土遺物からみると，土器などの日常生活に必要な生活用具が少ないこと，軒瓦がいずれも平城宮使用のものと同型式であり，邸宅への瓦葺き奨励（神亀元年）以前に瓦が使用されている点，また木簡に北宮に関連したものや「御坏」などと記したものが出土していることから，宮廷的な施設の要素がうかがえる。また，園池の形状や構造が公的儀式である曲水宴に適していることも，宮廷ないしはこれに準じる性格をより強く示しているといえよう。

以上のような遺構や遺物のあり方から判断して，この遺跡は2町ないし4町の規模をもち，平城宮と密接な関係を持つ公的施設，あるいは天皇や皇族の宮に関係した園池である可能性がきわめて高い。

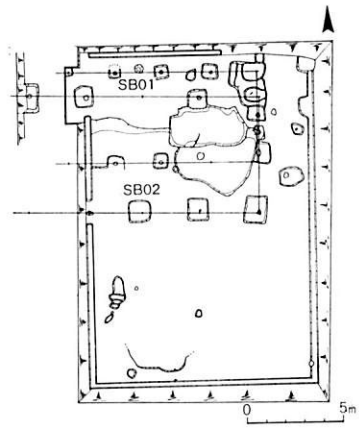
薬師寺食堂北方地域の調査　調査地は，薬師寺の北口参道をへだてた東側にあたり，すでに発掘されている食堂基壇北辺から約30m北方の地点にあたる。

発見遺構は，赤褐色粘質土面で大小6個の土壙，暗灰色粘質土面で奈良時代と考える東西棟掘立柱建物2棟および土壙1などを発見した。赤褐色土面で検出した土壙は，全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土，遺物から2群に分けられる。1群は，発掘区北寄りに並ぶ2個の土壙で，平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦，瓦器を包含した鎌倉時代の土壙であり，もう1群は南部にある3個の土壙で，大量の瓦，平安時代の緑釉・灰釉陶器を出土し，平安時代に瓦類を廃棄した土壙と考えられる。もう1個の土壙は北端東寄りにある。

暗灰色粘質土面の掘立柱建物2棟は，発掘区北部に重複して検出した。2棟とも2間×4間以上の東西棟建物と考えられ，北寄りのＳＢ01は柱間寸法8.5尺，南寄りのＳＢ02は10尺，柱穴の切合い関係からＳＢ01がＳＢ02より古い。ちなみに，検出した遺構面を付近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると，今回の発掘区の遺構面が標高59.9～60.0m，西北方にあたる1965年9月の高天商店の調査，西南方の1974年10月西僧房食堂調査の食堂西北角の遺構面がともに60.3mである。後2者は，旧地表をほぼ残していると考えられ，今回の発掘区遺構面とは0.3～0.4mの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴2，南端中央付近に柱根2，ＳＢ02内に土壙1を検出したが，それらは今回の発掘区内では建物にまとまらなかった。

遺物の大部分は赤褐色粘質土面の土壙から出土し，暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は南方の3個の土壙から特に多く出土している。軒瓦の大部分は，本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦，同式偏行唐草文軒平瓦で，ほかに片岡王寺式複弁華蓮文軒丸瓦，本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦，橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各1点があり，平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦，鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。土器は土壙から出土したものが多い。南方の3個の土壙からは主に奈良末～平安初の土師器・須恵器，ほかに平安初期の緑釉花文線刻皿，平安中期の灰釉壺各1点出土した。北寄りの2個の土壙からは瓦器が出土している。このほか，南方の西側の土壙から，奈良時代の緑釉陶の建物模型の勾欄部分の断片やガラス片が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが，一応つぎのように考えておきたい。時期は，建物の規模，柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから，両者とも奈良時代と考える。性格については，2棟が東妻を揃えておりＳＢ02がＳＢ01を建て替えた建物と考えられること，食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから，ともに大炊屋などに関係する建物と考える。



第7図　薬師寺食堂北方遺構図

右京七条二坊の調査　調査地は薬師寺八幡宮北側で，平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の土壙２を検出した。大路南側溝の幅は約4.0ｍ，深さ約1.7ｍである。南岸には径10cmほどの丸太杭を30cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝の堆積土から奈良時代の須恵器，土師器，瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約34.0ｍであり，六条大路の幅員を明らかにしえた。

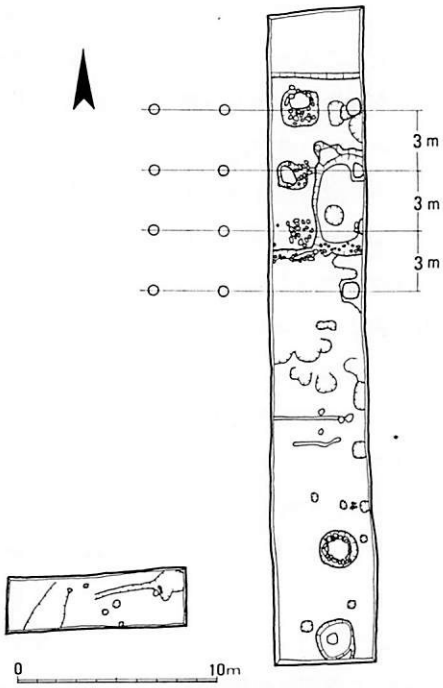
大安寺僧房の調査　本調査は駐車場建設および家屋改築に伴う事前調査として，奈良市大安寺町1117番地において実施したものである。当該地は大安寺伽藍復原図によると，北面僧房の東端，すなわち三面僧房の東北隅近くにあたる。

調査の結果，後世の攪乱が著しく，発掘区北側で中房の一部を検出したが，南半部はすでに削平されていて大房は確認できず，わずかに鎌倉時代初頭とみられる井戸１基を検出したにとどまった。

北面中房の梁間通りの礎石および根石列を２列検出した。１列の柱通りに４つの礎石がある梁間３間の総柱建物である。梁間の柱間寸法は10尺等間であり，『大安寺資財帳』の中房の記載寸法や1966年度調査の西面僧房中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸間については，礎石が動いているため正確な数値は求められないが12～13尺と推定された。残存する礎石は西列で２個，東列で４個の計６個であるが，いずれも原位置を移動している。西列では人頭大の根石をもった据付け痕跡が，削平された南の柱位置をのぞいて検出されたが，東列礎石には据付け痕跡が認められず，礎石は原位置から西へ動いていると考えられる。礎石は東列南の逆截頭方錐形の凝灰岩製礎石のほかは，自然石を用いている。遺構面は梁間北側柱心から約１.６ｍ北で一段低くなり基壇状となっている。

井戸は発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い，その上方は軒瓦・丸平瓦・塼・凝灰岩切石を積み重ねて強化している。出土した瓦器により鎌倉時代初頭のものと考えられる。

瓦類は軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・塼などがある。大半は奈良時代の大安寺式とよばれるものであるが，若干，大官大寺式や平安・鎌倉時代のものが混じる。土器は少なく，奈良時代中葉から鎌倉時代のものが混在する。土師器・須恵器のほか瓦器・施釉陶器が出土した。



第８図　大安寺北僧房遺構図

また，この調査と併行して，東面僧房の外側

にあたる地点についても発掘した。東面僧房の外側を区画しているとみられるところの南北溝（幅4m,深さ0.9m）と東西棟建物の一部を検出した。

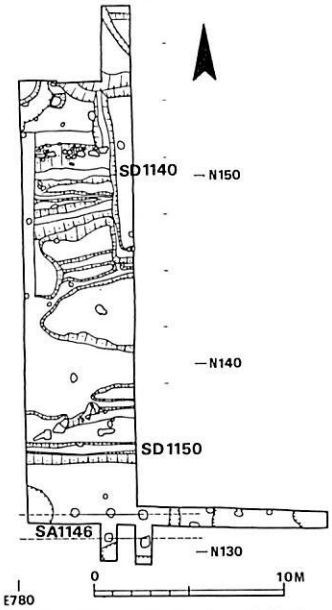
法華寺旧境内の調査　法華寺旧境内における発掘調査を5件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり，発掘面積も限られている。しかも後世の攪乱が著しく，顕著な遺構はわずかであった。第95—4次調査は法華寺旧境内南半，中軸線に近く，位置的に南門が想定できる場所での調査で，建物1棟，東西溝1条を検出した。今回の調査で検出した建物は，発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず，その性格を明らかにすることができなかった。

第95—8次調査は，既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが，当該地は現法華寺南門前の道路であり，『大和名所図会』では南門両脇の築地塀に沿って巨大な礎石が数個配列されており，従来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため，攪乱されていない土層は切れぎれにしか断面に現われない結果となったが，東西に10尺間隔で並ぶ5間分の掘立柱痕跡を検出した。これを中軸線で折返すと7間の建物になると推定され，法華寺講堂もしくはその前身の建物遺構に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり，食堂跡と推定されている。南門付近の今後の調査が望まれる。

海竜王寺北方の調査　駐車場造成にともなう調査。調査地は海竜王寺現境内の北に接する水田で，金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地1条と溝2条である。

築地ＳＡ1146は発掘区南端を東西にはしるが，攪乱のため寄柱2間分しか確認できなかった。基底幅は6尺，柱間寸法は6尺等間である。溝ＳＤ1150は築地ＳＡ1146の北2.8mの位置を東西にはしる幅約1.6mの素掘りの溝である。南岸の遺存状況は良好だが，北岸は削平を受けている。溝の推積土は2層にわかれ，下層を奈良時代，上層を平安時代初期に比定できる。溝ＳＤ1140は築地ＳＡ1146の北雨落溝ＳＤ1150の北15mの位置を東西にはしる幅1.9m，深さ1.2mの溝で，大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが，南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで石敷等の化粧はない。瓦類，土器類，貨幣，木簡などが出土しており，奈良時代に比定できる。この築地SA1146，東西溝SD1150はともに，現在までに確認されている平城京条坊区画のいずれとも明確な関連性を示さないが，築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ，両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく，今後の調査をまちたい。

（山本忠尚・岡本東三・綾村　宏・中村雅治）



第9図　海竜王寺北方遺構図

平城宮跡発見の殿堂雛形部材

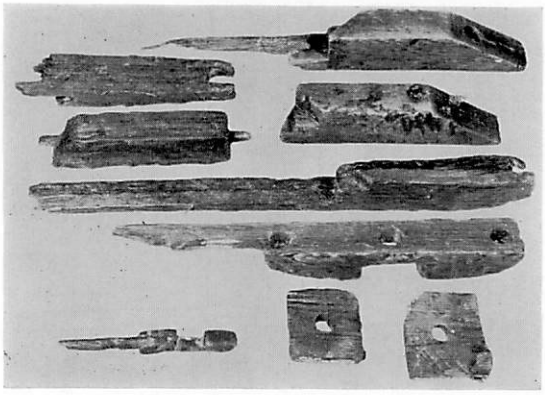
平城宮跡発掘調査部

推定第１次内裏の南面を画する築地回廊の東寄りにある楼風建物ＳＢ7802は，1973年に発掘した。今回，この掘立柱抜取穴から出土した木製品を調査整理する過程で，建築模型の斗栱の部材が含まれていることを確認した。

部材　部材は何れも桧材で，側通り肘木１丁，通肘木１丁，尾垂木を受ける肘木２丁，巻斗１個，方斗１個，入側束１丁，同断片１丁，軒天井組子断片１丁，土居桁らしいもの１丁でその他にも同じ模型に属するらしい部材の木口部分等があった。

側通りの肘木は現存全長23.3cm，丈３cm，幅2.5cm，肘木長さ14.8cm，両端の太枘穴心々は12.6cm，相欠上木の仕口を持ち，一方の木口に長いつなぎが作り出されている。他方は折損したらしい。このつなぎの長さからみて，柱間寸法が23.3cmを越える側通りの肘木であることがわかる。通肘木は先端を二手先を受ける肘木に作り出し，相欠下木で，上端に隅行の肘木の仕口を持つので，側通りの通肘木である。側柱通り相欠心から太枘心迄12cm，丈3.1cm，幅2.3cm，現存全長30.5cmである。先端に巻斗の丸太枘があるが，中間に太枘穴がない。先端の斗で隅の柱通り尾垂木受け肘木を支える。尾垂木を受ける力肘木は２丁あり，２丁とも丈3.3cm幅2.5cmで先端を斜めに作り，ここに尾垂木を止める丸太枘を立てる。先端の勾配は２丁でやや異なり，１丁は約5.2/10，他は約６/10となる。側通りからの出は２丁とも大差ない。この２丁は使われた層が異なるかもしれない。

斗には大斗がないが，巻斗と方斗が１個づつある。何れも完形ではない。巻斗は長さ4.1cm，幅4.0cm，斗尻は現在斜めになる。斗尻の一端は残り，斗繰の丈が1.4cmあり，かなり高い。全体の丈は不明であるが，長さの３/４位と見ると3.2cm程となる。方斗は上端に丸桁の組手を受けたらしい含みの底が残り，三手先の隅の方斗に当る。巻斗より大きく作られ，長さ4.9cm，幅4.5cmある。隅二重尾垂木の上にのると考えられ，斗繰はほとんど残っていない。

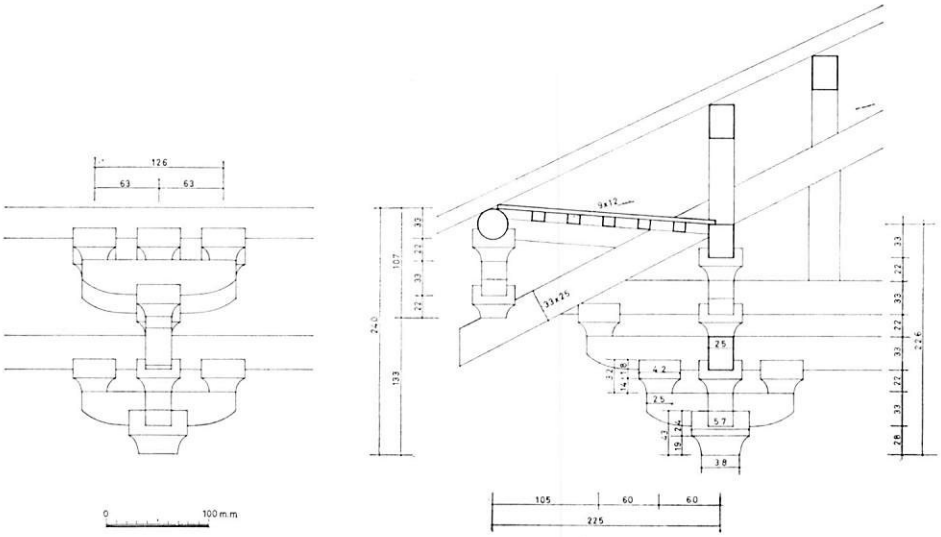


第１図　雛　形　部　材

入側束は上端を斜に作り，上下に丸枘があり，内部で力肘木の上に立って直接尾垂木下端を受けていた。他にこれと同種材の断片が１丁ある。

軒天井組子は全長9.8cm，丈0.7cm，幅1.2cmあり，組子相欠きが２個所残存し，１支寸法は3.5cmある。幅はもとのままであるが，丈の方ははぎとられた痕があり，もう少し大きかったことがわかる。

土居桁は現存幅3.6cm，丈1.7cm，両端



第2図　三手先斗栱の復原

は折損するが，心々12cmの丸太枘穴がある。柱盤や台輪としては部材が細いので，内部の束受けと考えられる。

復原　これらの部材からもとの構成を第2図のように復原した。大斗の大きさが不明でありまた三手先の出も明らかでないが，軒天井の納まり，並びに薬師寺東塔・海竜王寺五重小塔の出を勘案して推定した。二手先にのびる肘木の中間に巻斗の太枘がなく，尾垂木を受ける力肘木には二手先の肘木と組合う仕口がない。従って軒支輪がなく，軒天井だけであったと考えられ，薬師寺東塔に近い古式の三手先斗栱であり，現存例として薬師寺に続く海竜王寺五重小塔よりも古式のものと考えられる。

海竜王寺五重小塔と同じく奈良時代の製作になる元興寺極楽坊五重小塔は，肘木長さ14.2cm，巻斗太枘心々11.8cm，丈3cm，幅2.4cmで発見部材とほぼ一致する。海竜王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm，丈2.5cm，幅2.3cmでやや小さいが，巻斗幅は4.2cmあってほぼ等しい。

この発見部材がどのような建造物の模型であったか明らかでないが，実物の1/10を意識して作られている。三手先斗栱は斗栱のうちでも，古代にあっては最も複雑な構成であり，寺院であれば金堂・塔・二重門等の重要な堂塔にのみ用いられる。

現存する奈良時代の小建築が，前記の海竜王寺五重小塔・元興寺極楽坊五重小塔・正倉院の紫檀塔残欠等何れも塔に限定されていることを考えると，この部材も塔に用いた可能性も少なくない。

部材を発見した楼風建物SB7802は，神亀頃の建立と推定され，柱抜取穴の埋土からは天平勝宝5年(753)の年紀をもつ木簡が出土しており，この模型の廃棄された時期もほぼこの頃とみてよかろう。部材の数は少ないが，平城宮跡からこのような部材が発見されたのは初めてのことであり，しかも古式の三手先斗栱であることはきわめて興味のあることといえよう。

（細見啓三・岡田英男）

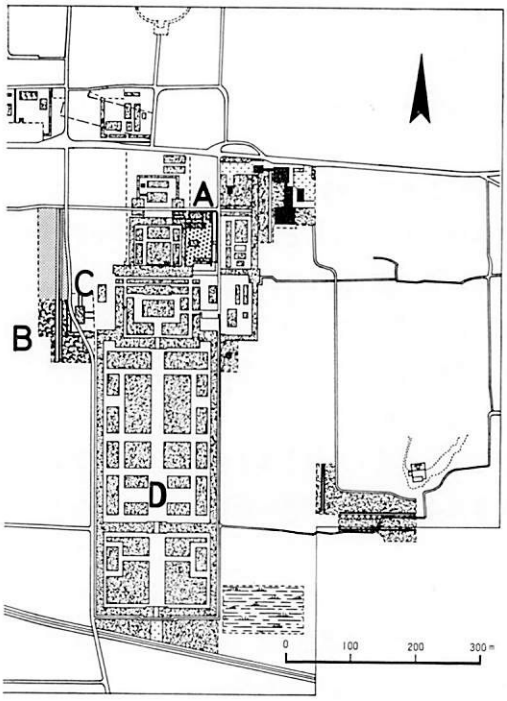
平 城 宮 跡 の 整 備 (6)

平城宮跡発掘調査部

1975年度の宮跡整備は，第２次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備，第２次内裏外郭整備，緑陰帯造成，灌水施設，案内板，照明灯の設置を行った。

第２次内裏内郭築地回廊基壇復原整備　1974年度に東楼をふくむ築地回廊東南隅部を復原整備したが，今年度はこれに接続する東面回廊を延長し，北へ78.5m分施工した。発掘次数でいえば第３・70・73次にあたり，門２ヶ所（ＳＢ7951，ＳＢ6900）を含む桁行20間分である。この部分では築地心より 2.5m 以東は，南北に通る市道と大正時代に整備した側溝のために遺構が確認できず今回も施工していない。

復原にあたっては遺構を保護することを第一義とし，かつ往時の姿を再現しようとするところから，1 遺構面より一定寸法のレベルアップをする。2 遺構での多少の施工むらは除き，基準方位・基準寸法を設定するという方針をとった。1 に関しては，既施工の東南隅部で採用した70㎝高が，次年度予定している東面中央部での井戸跡現寸遺構模形据付けのためにも支障がないことを確認したのでこの数値をとった。一方勾配はこの２点を直線で結ぶ南から北へ昇る 1.25/1000 の勾配とした。2 に関しては次年度以降の施工のこともあり，現在までにほぼ完掘している東面築地回廊全長にわたっての検討が必要であった。遺構上で方位がひろえるのは次の４条であり，それぞれ平城宮実測方位より北で西に振れる傾向がある。



第１図　平城宮跡整備図

イ，築地東寄柱心―東面全長で５個の礎石が残存しており，それを結ぶ線は 4.35/1000西偏。

ロ，築地西寄柱心―62m隔たった２個の礎石で3.10/1000西偏。

ハ，西側柱心―井戸位置での２個の礎石では3.54/1000西偏。

ニ，西雨落溝―比較的残存状況の良い６地点で4.19/1000西偏。

この４つの数値のうち，ハが発見した礎石およびその周辺遺構の残存状況が他に比し良好であること，４条の平均的な数値であること，北面築地回廊との関係とも矛盾しないことなどから最も妥当なものと考

え，今回はこれを採用した。

この結果，北面築地回廊との角度は90°12′10″の鈍角となった。現在までの発掘で南面は北面と平行であることが認められるから，築地回廊一郭は正方形とはならず，平行四辺形，あるいは台形であることが考えられる。また，この角度が東面築地回廊全長（南北築地回廊心々）185.96mに対し実長として66cmとなりその数値が比較的僅少であるところから，当時の施工誤差とも考えられる。平城京の条坊方眼も東西方位に対し，南北方位の振れが大きいとみられるから，これとの関連においてさらに検討を加える必要があろう。いずれにしても西面築地回廊が未発掘である現時点ではいずれともきめがたい。

ちなみに平城宮跡の発掘調査で使用している方位は，この北面築地回廊の北雨落溝の東西線を基準にしたもので，国土方眼よりも0°07′47″西で南偏する。

柱間寸法については，東面での3個所の門も他の間と同一寸法であるから，全長を総柱間数48で除すと1間が3.874mとなり，13尺（1尺は29.8cm）の整数を得る。梁間寸法も桁行と同様に13尺である。

なお，今年度施工区では築地回廊のほかに，掘立柱建物5棟および内裏掘立柱回廊東北部などの盛土，張芝による遺構表示を行った（第1図A）。

緑陰帯造成　1974年度から始めた緑陰帯造成を，今年度は南へ約105m（5100㎡）延長した。遺構表示として，前年同様第2次内裏外郭築地の西側を流れる南北大溝（SD3715）を和泉砂岩割石で護岸し表示した。植栽については，西側からの大極殿や東山等の眺望をさまたげないよう1本/250㎡程度の密度におさえた疎林とした（第1図B）。

内裏外郭整備　第91次発掘調査により確認された第2次内裏外郭築地西南隅の門と築地塀，および礎石建物1棟を含む約3000㎡について整備した。これら建物遺構は，宮跡中央を南北に走る市道によって分断されているため，一部表示出来なかった。門および築地塀は平均70cm，礎石建物は平均40cm盛土してその規模を表示し，表面は張芝とした（第1図C）。

その他　第2次朝堂院・朝集殿地区に灌水施設として自動散水装置（スプリンクラー80基，散水栓2基，第1図D），照明設備（水銀灯4基）案内板（遺構名称板8基）を設置した。

（渡辺康史・細見啓三）

第2図　第2次内裏西外郭の整備

平城宮跡第3収蔵庫の建設

平城宮跡発掘調査部

1968・1969年度に資料館と第1・第2収蔵庫を建設して再出発した調査部における施設整備の第2段階として，このたび北接位置に第3収蔵庫を増設した。

これは増加する一方の出土遺物の収蔵のほか，仮設プレハブで行っていた遺物の清掃整理や保存科学的処理の作業環境を改善すると同時に，長い間の懸案であった発掘作業員の着替所を設けることを目的としている。いわば，調査部の発掘作業と出土遺物の処理に密着した部門を統合したものである。

建物は宮跡内であることから，遺構に影響をあたえないこと，環境を著しく損わない意匠であること，将来撤去可能であることなど，資料館建設当初の基本計画にもとずき設計された。

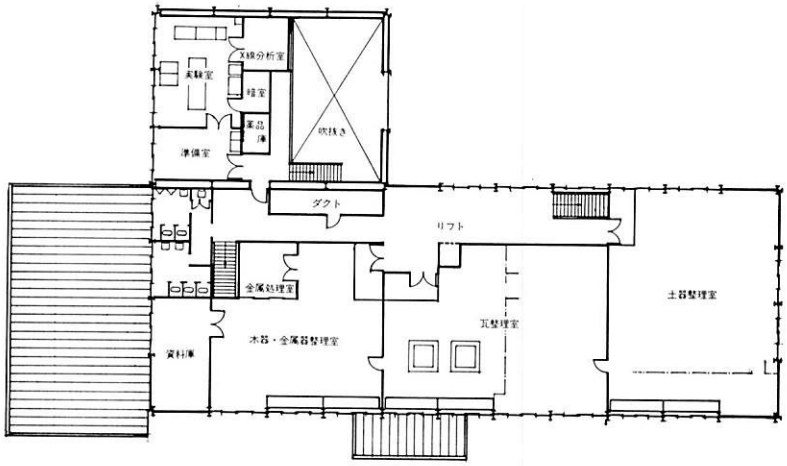
東西棟の1階は収蔵庫と警備室にあてる（一部を間仕切って仮に埋蔵文化財センターの事務及び研究室として使用）。収蔵庫は保存処理をほどこした木器の収納棚，処理前の木器をいれる水槽，真空凍結乾燥処理をほどこした木簡などをいれる空気調整装置をつけた特別保存庫からなる。2階は遺物整理関係の作業室であり，各室に水洗場をそなえる。木器，金属整理室には金属の整形過程に生じる粉塵を吸収するための装置をつけた。瓦整理室には，土ぼこりを吸収するダクトをつけた作業台を設置した。なお，階下からの遺物の運搬にはリフトを使用する。

北面の張出部は，保存科学部門を収容する。1階のP.E.G.含浸処理室は，木製品に対してポリエチレン・グリコールを含浸する。大型の柱材にも対応しうるよう全長6mの含浸タンク2機をそなえる。大型遺物の移動を円滑にするためホイストをもうける。室内が高温多湿になることを配慮して天井に大型排気装置をつけた。樹脂含浸室は，金属遺物にアクリルエマルジョン等の合成樹脂を含浸するための部屋である。真空含浸装置を中心とする器材をおき，有機溶剤による公害対策として，室外に活性炭による濾過装置をおく。凍結乾燥機室では，凍結乾燥によって木簡などの木器を保存する。乾燥機のほかT.B.A.による前処理装置や簡易防爆装置をそなえる。戸外には柱根などの大型木器を一時的に保管する水槽を設けている。

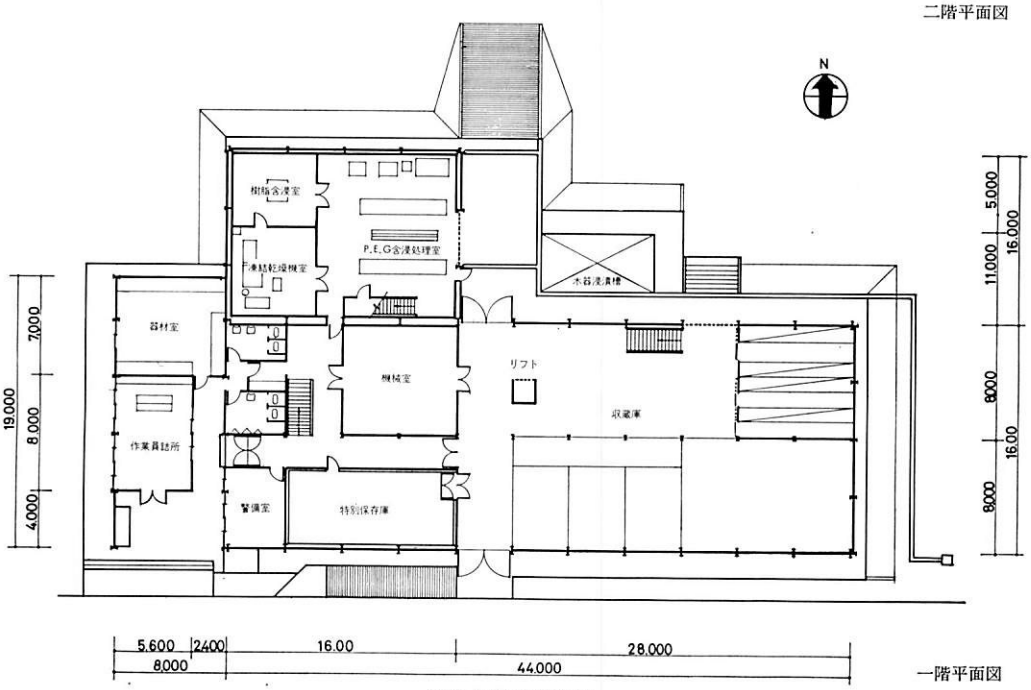
2階の実験室では，木簡削片の保存処理，ならびに保存処理に関する基礎実験，材質分析等を行う。このため，木簡削片プレパラート製作機，実験台，ドラフト，恒温恒湿機，X線回析，螢光X線分析装置等をおく。X線分析室では，銹などで隠れた形や文様をレントゲンで透視し修理などの処理にそなえる。装置は100KVと160KVの2種あり，使用目的に応じて使いわける。このほか2階には準備室・暗室・薬品庫などを設けている。

基本設計は入江・三宅設計事務所が行い，実施設計および工事監理は建設省近畿地方建設局があたった。施工は株式会社森組である。なお，次年度以降，同規模の施設をこの北側に増設し，全体を東向きのコ字形にまとめて，資料館を中心とする発掘調査用施設整備は一応完了することになる。

（細見啓三・町田　章）



二階平面図



一階平面図

第3収蔵庫平面図

建築概要

建築面積　1,061.9㎡

延面積　1階：1,061.9㎡，2階826.3㎡，合計1,888.2㎡

構造および仕上げ　主体部，鉄骨造。屋根，コルテン鋼山型プレート葺。外壁，A・L・C版，一部C・B積み，色モルタル吹付け。内部床モルタルコテ押さえ，一部フローリング張り。内壁，A・L・C版，C・Bあらわし，西北保存科学一郭のみA・L・C版張り間仕切り壁，C・Bまたはアスベストラックス。天井，軽量鉄骨下地フレキシブルボードまたはプラスターボード打上げ。屋根鋼板下，断熱材吹付け。

飛鳥・藤原宮跡の発掘調査

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

飛鳥藤原宮跡発掘調査部では，1975年度の調査として藤原宮跡で，藤原宮北面中門を調査。藤原京跡で右京七条一坊，八条大路と西三坊大路の交差点付近等を調査し，藤原京条坊復原に貴重な資料を得た。また飛鳥地区では大官大寺の中門・南門地区を，和田廃寺では塔周辺をそれぞれ調査した。主な調査地域とその期間，面積などについては第１表のとおりである。

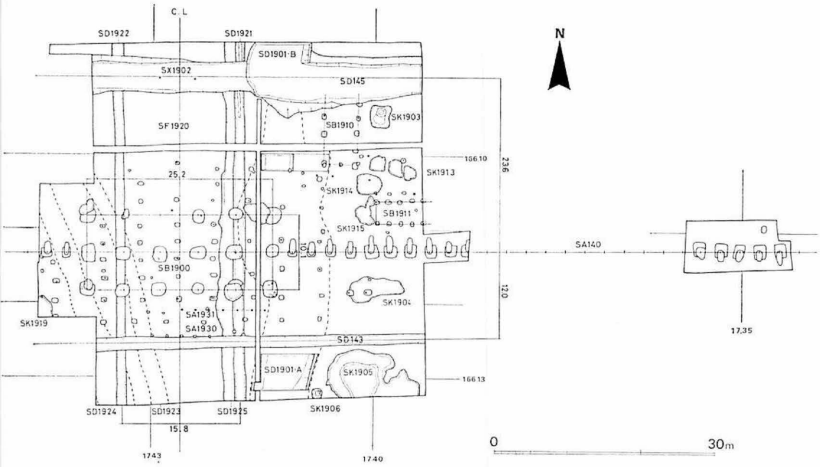
藤原宮北面中門　この調査は現在までの調査成果から推定される藤原宮の北面中門を検出して，その位置および規模・構造を確めること，またその成果と第１次調査として実施した宮南面中門の調査成果とあわせて現在なお不明確なままになっている藤原宮の中軸線を確定すること，以上の２点を主要な目的として実施した（ロ絵７）。

検出遺構は，藤原宮造営前（A期），藤原宮期（B期），その他にわかれる。

北面中門ＳＢ1900は桁行５間（総長25.2m），梁間２間（総長10.1m），柱間17尺（5.04m）等間の平面規模をもつ大規模な礎石建物であり，その規模は平城宮朱雀門にほぼ一致する。後世の削平のため，基壇土や礎石据えつけ痕跡は全く検出されなかったが，礎石位置に限定された掘込地形の痕跡からその規模を知りえた。ＳＢ1900に伴う基壇やそれをめぐる雨落溝などの痕跡は全く遺存しなかったが，外濠ＳＤ145より凝灰岩切石片が出土しているから，基壇化粧は凝灰岩切石で行ったものであろう。北門ＳＢ1900に伴う足場ＳＸ1899は，方60㎝前後の掘形から成るもので，ＳＢ1900の柱位置の間にほぼその柱筋を揃えるものと，ＳＢ1900の外周をめぐる１列を検出した。柱穴には柱痕跡を残す例があり，また抜き取痕が全く認められないことから，基壇上面の化粧前にその上半部を切り落したものと考えられる。北面大垣ＳＡ140 は北面

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	面積	備考
６ＡＪＨ	藤原宮第17次	75. 4. 3～ 6.14 10. 1～11. 4	26.2a	右京七条一坊
６ＡＪＥ	藤原宮第18次	75. 6. 3～ 76. 1.12	26.0	藤原宮北面中門
６ＡＪＥ	藤原宮第18－１次	75. 5. 2～ 5.10	1.2	
６ＡＪＦ	藤原宮第18－２次	75. 6. 4	0.3	
６ＡＪＥ	藤原宮第18－３次	75. 5.30～ 6. 2	2.2	
６ＡＪＣ	藤原宮第18－４次	75. 7. 3～ 7. 7	0.18	
６ＡＪＧ	藤原宮第18－５次	75. 8.11～ 9.17	1.5	
６ＡＪＦ	藤原宮第18－６次	76. 1. 8	0.3	
６ＡＪＣ	藤原宮第18－７次	76. 2.25～ 2.26	0.03	
６ＢＭＹ	本薬師寺	76. 1.22～ 2,27	4.5	本薬師寺西南隅，八条大路，西三坊大路の交叉点
６ＢＴＫ	大官大寺第２次	75. 5. 6～ 76. 1.30	28.0	中門・南面回廊
５ＢＷＤ	和田廃寺第２次	75. 10.20～ 76. 4. 3	28.6	塔跡
５ＡＴＮ	田中遺跡	76.1.14～ 3.	3.5	右京十一条一坊
６ＢＫＨ	川原寺	76. 1.12～ 1.14	0.4	
６ＢＫＨ	川原寺	76. 1.12	0.1	下層暗渠の延長部

第１表　1975年度発掘調査状況



第1図　藤原宮北面中門遺構図

時期	遺構	内容	時期	遺構	内容
A期	SD1923	SD1922より古	B期	SD1901A	SB1900，SA140より古，瓦・木簡出土
	SD1924	SD1922より古		SA 140	北面大垣
	SD1925	SD1921より古		SD 143	内濠
	SF1920	朱雀大路計画線		SD 145	外濠
	SD1921	SF1920東側溝		SD1901B	
	SD1922	SF1920西側溝		SB1900	北面中門礎石建物5間×2間
	SB1910	南北棟4間以上×2間		SX1899	SB1900の足場
	SB1911	東西棟4間以上×1間		SX1902	橋脚
	SK1913			SK1903	木簡出土
	SK1914			SK1904	
	SK1915			SK1905	

第2表　藤原宮北面中門の遺構

中門以西で2間分，以東で未調査部分を含めて26間分，総長68.6mを検出した。柱間はややばらつきがあるが，平均2.64m（9尺）等間に復原できる。なお調査範囲内では脇門に相当する施設は検出されなかった。内濠SD143はSA140の南12m（40尺）を流れる溝で，幅1.5～2m，埋土から大量の瓦と土器，木簡が出土した。外濠SD145はSA140の北23.6m（80尺）に位置する幅4.5～5.5mの大規模な溝である。北流する南北溝SD1901Bに接続する部分ではSD145南岸が幅20mにわたり削られている。またSD145の北門SB1900の中央に対する位置には，橋脚SX1902があり，方20cm余の角杭を打ち込んでいる。このSD145の埋土からは瓦・土器・木製品と大量の木簡が出土した。3個の土壙のうち，SK1903からは，瓦・土器に混って「馥王」

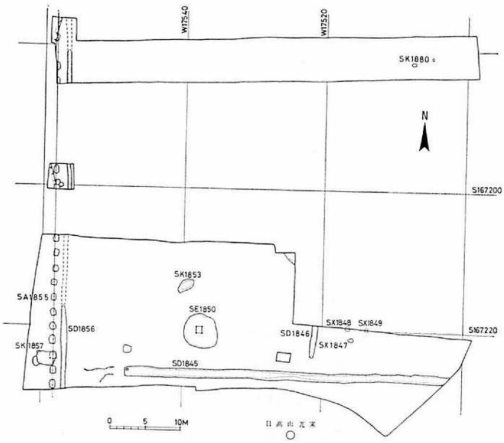
・「猪使門」の二つの門号を記した木簡が出土した。これによって北面中門を猪使門とする有力な知見を得た。

北面中門・大垣・内濠の造営に先立って埋められた南北溝ＳＤ1901Ａは，ごく一部を調査したに止まったが，やや蛇行しながら北流する幅６～８ｍの溝で，厖大な砂堆積からみるとかなりの水量があったらしい。これは宮中心部造営に関する溝と考えられ，下層より磨耗した瓦とともに木簡，手斧の削り屑などが出土した。このＳＤ1901Ａが埋められた時期には後述のＡ期の道路ＳＦ1920の側溝は埋没していたようで，黒褐色の整地土がＳＤ1901Ａの上層とＳＦ1920の東側溝をおおっていた。ただ，ＳＤ1901ＡとＳＦ1920とが一時期併存した可能性は残されている。なおＳＤ1901ＡのＳＤ145以北の部分はＳＤ145の開鑿後もそれに連続する藤原宮の基幹水路の一部として使用されることになった（ＳＤ1901Ｂ）。

北面中門に重複して検出された南北道路ＳＦ1920は，正しく宮中軸線上に位置しており条坊朱雀大路計画線の宮内延長部に当るものと考えられる。東西側溝間の心々距離15.8ｍ，路面の幅員15ｍ前後を測る。このＳＦ1920の設置時期は，藤原宮造営直前の７世紀の第Ⅳ四半期の中にあることが重複する南北溝ＳＤ1925の遺物から判明した。

以上，今回の調査によって得られた知見を記したが，最後に過去の調査成果と合せて宮中軸線について述べる。国土地理院第６座標系による宮南門ＳＢ500の中心位置はＸ＝—167,021.1Ｍ，Ｙ＝—17,419.2Ｍ，北門ＳＢ1900の中心位置はＸ＝—166,113.4Ｍ，Ｙ＝—17,426.3Ｍ，これから求めた宮中軸線は北で西に26′30″の振れをもつ。

藤原京右京七条一坊　この調査は橿原市営住宅建設に伴う事前調査である。調査地は日高山瓦窯のある日高山丘陵に北接する。藤原京条坊の復原によれば，右京七条一坊の地で一部が朱雀大路推定線にかかる。従って調査目標を右京七条一坊の条坊地割と日高山瓦窯に関連した造瓦関係遺構の追求におき，七条一坊を東西に貫く形で東西約260ｍ，南北約６ｍの発掘区と，日高山瓦窯に接する条間・坊間小路の交差する地点にそれぞれ発掘区を設定した。



第２図　藤原京右京七条一坊遺構図

調査の結果，西一坊坊間

小路の一部と坪境の塀，および井戸・溝・鋳造炉跡・土壙等を検出した。なお朱雀大路，西一坊大路の痕跡は見出せなかった。 遺構，時期は藤原宮期に属すものと， それ以降のものにわかれるが，ここでは主体となる藤原宮期の遺構について述べる。

藤原宮期の遺構は，溝ＳＤ1845・1856・塀ＳＡ1855，井戸ＳＥ1850・1860，鋳造炉跡ＳＸ1847・1848・1849などがある。南北溝ＳＤ1856は幅50～70cmの素掘りの溝で，西一坊坊間小路西側溝と推定される。藤原宮第16次調査で検出した道路ＳＦ1732に連なるものである。ただし小路の東側溝は検出できなかった。塀ＳＡ1855はＳＤ1856の西約1.5mに建つ南北塀で，中間未調査部を含めて27間分（59.3m）確認した。おそらく四坪の東限を画する塀であろう。東西溝ＳＤ1845は幅1.2mの素掘りの溝で，七条条間小路南側溝の推定位置に一致する。ただし，対応する北側溝を検出していないこと，後述の井戸ＳＥ1850等が道路敷推定地内にあることからみるとこれを条間小路とすることには問題がある。ただ発掘範囲が限られたこともあり現時点では明確ではない。井戸ＳＥ1850，炉ＳＸ1847～1849は七条条間小路の道路敷推定線上にある。井戸ＳＥ1850は井籠組井戸で，内法が80×90cm，深さ1.5mの井戸枠５段が残っていた。井戸枠内部からは和銅２年の紀年銘のある木簡や忍冬文を型押しした軒平瓦，藤原宮式の瓦片などが出土した。ＳＸ1847～1849は鋳造炉跡で，いずれも径50cm前後，深さ20cm程の土壙である。内面が強く焼け内部及び周辺から銅滓・焼土・木炭を検出した。近くから出土した鎔笵の存在とあわせてこの一帯に鋳造工房があったことをうかがわせる。なお，当初の目的の一つであった造瓦関係遺構は発見されなかったが， 東西溝ＳＤ1845の上層からは焼け歪んだ瓦や窯壁の一部，焼土・木炭等が多量に出土した。この殆んどは日高山瓦窯に近接した部分に集中しているから日高山瓦窯から廃棄されたものの一部であろう。出土遺物のうち日高山瓦窯に関連する瓦類について簡単に述べよう。従来，日高山瓦窯で焼成された軒瓦は6274Ａが知られていたが，これに加えて軒丸瓦6233Ａ・6275Ｉ・6279Ａ，軒平瓦6643Ａが出土した。丸瓦・平瓦はともに粘土紐巻き上げ桶巻作りで成形し，凸面に縄叩き目と刷毛目を残す例が多い。

本薬師寺西南隅の調査　この調査は橿原市営住宅への進入路新設に伴う事前調査として行った。調査地は本薬師寺金堂跡の西南方約100mの水田で， 調査では，藤原京八条大路と西三坊大路を確認し，本薬師寺に関連する遺構を検出した。遺構の時期は藤原宮およびその直前の２期にわけられる。

藤原宮期の遺構　八条大路ＳＦ101の幅員は側溝の心々で，15.9mである。北側溝 ＳＤ104には橋脚の一部とおもわれるＳＸ108がある。 ＳＤ104からは木簡が３点出土し，うち１点は「伊□皮古」と判読される。八条大路ＳＦ101と直交する西三坊大路ＳＦ102の幅員は，側溝心々で15.2mとなる。東側溝

第３図　本薬師寺西南隅遺構図

	測　　点	町	全　　長	1町の長さ	1坊の長さ
東西方向					
A	藤原宮C.L.　～今回調査	6	790.0m	131.7m	263.3m
B	藤原宮C.L.　～藤原宮第7次調査	3	397.6	132.5	265.1
C	藤原宮C.L.　～藤原宮第16次調査	1	136.9	136.9	273.7
D	藤原宮C.L.　～本薬師寺C.L.	5	662.2	132.4	264.9
E	藤原宮C.L.　～大官大寺C.L.	7	933.3	133.3	266.6
F	藤原宮C.L.　～紀寺C.L.	3	411.9	137.3	274.6
G	今回調査　～藤原宮第7次調査	3	392.4	130.8	261.6
H	今回調査　～藤原宮第16次調査	5	653.1	130.6	261.2
I	藤原宮第7次調査～藤原宮第16次調査	2	260.8	130.4	260.8
J	本薬師寺C.L.　～今回調査	1	127.8	127.8	255.6
南北方向					
K	今回調査　～藤原宮第7次調査	7	928.6	132.7	265.3
L	今回調査　～藤原宮第16次調査	9	1,196.3	132.9	265.8
M	藤原宮第7次調査～藤原宮第7次調査	2		133.9	267.7

第2表　藤原京条坊計測表

SD105には2時期にわたる橋SX107A・Bがある。

藤原宮期直前の遺構　南北溝SD110は堆積土のなかに本薬師寺所用瓦をふくみ，その西側の7世紀後半の土器を包含する整地土を切っているが，条坊地割の施工時点ではすでに埋められ，整地されていることが明らかである。また，この溝の東側には地山の上に薄く，黄色土の積土が部分的にみとめられた。これを築地の痕跡とし，溝SD110をその西雨落溝とみることが可能とすれば，本薬師寺の創建は条坊地割の施工に先立つことを意味する。

今回の調査によって，藤原京で初めて大路の存在を確認した。ここで，今回明らかになった西三坊大路心と本薬師寺両塔間中軸線との距離をみると127.8mで，これまでの調査で明らかになっている平均値として得られる半坊の東西長133m前後に比較して約5mも短かく，伽藍中軸線が西三坊の中心（西三坊坊間小路）に一致しない可能性が強い。これは本薬師寺の占地が条坊地割に先行するとみられる点からも十分考えられるが，逆に西三坊坊間小路自体が，本薬師寺伽藍中軸線にあわせてつくられた可能性もあり，今後の調査にその結論をまちたい。

なお，宮の中軸線は方眼北に対して西へ26′30″振れており，仮にこの振れが条坊でも一致するとして，1坊の長さを求めたのが第2表である。多少のばらつきがあるものの，1坊の長さとして265m前後の値が得られ，おそらくこの値が藤原京条坊の1坊の計画寸法を示すのであろう。伽藍中軸線との関係では，本薬師寺は先述の通りであるが，大官大寺の場合は伽藍中軸線が左京四坊坊間小路心に一致するか否かはさらに検討を要する。また藤原宮造営前の紀寺の伽藍中軸線は，条坊地割と無関係である。

最後に第2表に説明を加えておく。町は条坊制1坊の½を示す単位の仮称である。本薬師寺C.L.は両塔心礎の中点，大官大寺C.L.は講堂，紀寺C.L.は南門から求めた。なお，紀寺の資料は，橿原考古学研究所との共同調査の成果による。

大官大寺第2次調査　中門・南面回廊の確認と寺域南限の確定を目的に行った。検出遺構は，中門とこれに取り付く回廊のほか，下層遺構として掘立柱建物，井戸，土壙等がある（口絵7）。

中門　中門SB400は平面が5間×3間，桁行総長23.8m（79尺），梁間総長12.6m（42尺）の巨大な門である。礎石据えつけ穴を割りつけると柱間は桁行中央間が5.1m（17尺），両端間と

梁間の各間が4.2m（14尺）になる。基壇は掘込地形は行わず周囲一帯にわたる整地の後，2層ほど積土し，一部に版築がみられる。礎石は基壇築成の途中で掘形を穿って据え付けている。基壇上には焼けた足場穴SX101がある。さらに焼けた建築部材の落下痕跡SX105がありなかには尾垂木の痕跡(木口34×20cm）や肘木痕跡(木口20×20cm)とみられるものがある。これらのことから中門は三手先の重層建築であったと考えられる。

回廊 回廊SC053は，中門東で6間分検出した。桁行3.9m（13尺），梁間4.2m（14尺）の単廊で中門梁間中央間と柱筋を揃えている。中門との取り付き部は削平され礎石は抜き取られている。これより以東の回廊礎石はほぼ完存していることからみて，この部分は中門に向って登り廊になっていたと考えられる。基壇築成，礎石の据え付けは中門と同様である。

第4図 大官大寺第2次調査遺構配置図

中門・回廊ともに基壇化粧の痕跡が全く無く，雨落溝もみられず，未完成の段階で焼亡したことが明らかである。なお，南門を求めて中門の南方約100mの旧河床SD150までを精査したが検出されなかった。完全に削平されたか，旧河川で流失したか，あるいは中門・回廊が未完成であることから南門は未着工であったことが考えられる。

下層遺構 掘立柱建物2，塀2，井戸2，土壙3などがある。いずれも7世紀後半の土器を伴う。これらは全体としていかなる性格の遺構かは不明だが，大官大寺を含めたこの一帯を岡本宮に比定する説もあり，今後の調査の進展が望まれる。

中門・回廊の確認により，回廊南北長は外側柱間で約83m（276尺），回廊東西長は140m程度に復原される。中門心と講堂心とを結ぶ伽藍中軸線は方眼北に対して約16′西偏し，岸俊男氏復原の左京十条四坊の中心線とは正しくは一致しない。最近判明した宮中軸線の西への振れ

26′30″とはかなり異なる値であるが，下ツ道の平城京内での振れ約17′と近似するといったように問題は複雑である。その解決の緒口を握っているのが中ツ道の位置である。

和田廃寺第2次調査　橿原市和田町字トノダの水田中に存在する大野塚は，古くから寺院跡とされ，書紀にみえる大野丘北塔比定説や葛木寺比定説などがある。また藤原京朱雀大路推定線に西接しており，藤原京条坊との関係が問題となっている。1974年度の調査に続き今回は大野塚周辺に伽藍中心部を予想し，この地域を調査した。

調査によって検出した遺構は塔・築地・掘立柱建物・塀・井戸・土壙等があり，大きく4期に大別できる。すなわち，A 塔造営以前の掘立柱建物第Ⅰ期，B 塔の造営から廃絶まで，C 塔廃絶後の掘立柱建物第Ⅱ期，D 掘立柱建物第Ⅲ期である。これらの年代は，Aが7世紀前半，Bが7世紀後半から8世紀後半，Cが8世紀後半から平安時代初期，Dが平安時代前半頃にそれぞれ比定できる。次に塔跡を中心に記述を進める。

塔　調査によって塚上に花崗岩礎石3，根石2，礎石抜取痕跡3を検出し現存の塚は塔の基壇の西半部であることを確認した。基壇規模は基壇化粧の痕跡が残っていないためこの部分を除いて一辺が約12.2m（約41尺）に復原でき，間の柱間は約2.4m（8尺）等間となる。西側柱の2個の礎石はやや西に傾くがほぼ原位置を保つ。表面には円形柱座とその両脇に地覆座を造り出す。心礎は焼いて破砕し抜取られていたが，残存する根石からみて心礎上面高は四天柱及び側柱礎石の上面高とほぼ同一に復原できる。基壇の築成方法は旧地表を約40～50cm掘り込んで掘込地形を行っている。掘り込みの基底部に礫を敷きその上に褐色土・黒褐色土の混った土を約30cm版築し，再び礫を敷きさらに基壇上端まで版築する。塔の東南北は旧地表の削平が著しく，基壇の東面や南面では掘り込み基底部の礫が露出している。掘込地形と基壇の関係は，北面では掘込地形の外側まで基壇積土が延びている。基壇化粧は塔の周囲から延石とみられる凝灰岩切石が出土しているから，凝灰岩を使用していたと考えられる。

築地　塔の南側で東西方向に走る築地SA215を約22.5m検出した。築地の南側には寄柱の礎石据えつけ痕跡とみられる小礫を埋めた径50cm程の穴がある。柱間は3m等間で4間分残っている。寄柱をもとに築地基底幅を考えれば2.1m～2.4mとなる。

第5図　和田廃寺第2次調査遺構図

第3表　和田廃寺の遺構

軸線は方眼東西に対し東で南に約6度偏している。築地の時期は塔に伴う場合と，方位からみて掘立柱第Ⅰ期に伴う場合が考えられる。

掘立柱建物・他　塔，築地の他に掘立柱建物約22棟，塀4条，井戸1基，土壙1カ所などを検出した。これらは塔との関係や柱穴相互の重複関係，建物方位，柱穴の埋土や出土遺物によって3期に大別できる。これらの遺構の詳細は第3表に示したとおりである。

遺物は瓦塼類が大半を占め，他に土器類，陶硯，凝灰岩切石等がある。瓦塼類のうち軒瓦は大半が塔基壇上の攪乱土より出土し，整理途中の概数だが軒丸瓦は10型式161点，軒平瓦は7型式52点ある。

第6図　和田廃寺堪跡（西から）

第7図　和田廃寺塔基壇断面図

軒丸瓦は飛鳥から白鳳様式に及ぶが，全体の7割は山城高麗寺，法起寺出土例と同型式の複弁8弁蓮華文と川原寺創建瓦と同笵の複弁8弁蓮華文瓦で，奈良時代に降る軒瓦はない。軒平瓦は，白鳳様式の瓦は少数で，8割以上は奈良後半期の6702型式が占める。土器は弥生式土器，土師器，須恵器，緑釉・灰釉陶器，青・白磁器，瓦器が出土し，施釉陶器や磁器はいずれも攪乱土中からの出土である。墨書土器には「大寺」と記した7世紀後半の土師器杯がある。

以上述べたように，今回の調査地区内では遺構が複雑に重複している。当初の目的であった和田廃寺の遺構は塔跡を確認し，築地ＳＡ215がこれに伴う可能性を指摘し得るものの明確ではない。この他の伽藍についての手懸りは得られなかったが，軒丸瓦のうち3割は飛鳥末期様式の特徴を示しているから，塔に先立って別個の伽藍が建立されていたことはじゅうぶん考えられるところである。

田中遺跡　本調査は住宅建築工事に伴う事前調査である。調査地は和田廃寺塔跡の北方，約200ｍ，馬立伊勢部田中神社の東方約100ｍの水田である。この付近は舒明天皇田中宮跡があったと想定され，藤原京条坊の推定復原では右京十一条一坊にあたる。調査の結果，掘立柱建物1，塀1，溝1等を検出した。

南北塀ＳＡ50は15間分，約31ｍを検出し，南北とも発掘地区外に続く。柱間は2.1ｍと2.4ｍがある。南北溝ＳＤ055は塀ＳＡ050の西約2.4ｍに位置し，幅約80cmの溝で17.5ｍにわたって検出した。埋土からは7世紀代の土師器・須恵器が出土した。建物ＳＢ051は南北棟建物で桁行3間以上，梁間2間，柱間は桁行・梁間ともに2.1ｍ等間である。以上の塀・溝・建物は同一の軸線方向をとり，また柱間寸法も共通することなどから同時期のものと考えられる。ただし，調査面積が小さかったために遺構の全体配置は不詳である。さらに，今回検出した遺構が田中宮跡に関連するものか否かについては，なお検討を要する。　（金子裕之・千田剛道）

第8図　田中遺跡遺構図

1975年度発見の藤原宮木簡

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1975年度の藤原宮跡及びその付近の発掘調査では総計619点の木簡が出土した。以下その概要を報告する（口絵6）。

藤原宮北面中門付近出土木簡　藤原宮北面中門付近の調査では，外濠他2条の溝と一つの土壙から570点の木簡が発見された。うち，もっとも多量の木簡が発見されたのは北面大垣の外側を東西に流れる外濠ＳＤ145で，551点発見された，外濠は北面中門の東北にあたる付近で北へ流れる溝ＳＤ1901Ｂにつながる（Ｐ.43　第１図）。ＳＤ1901Ｂは発掘面積も少なく，外濠の東半部と同一の流れなので，ここから出土した木簡も外濠出土木簡の中にふくめている。また北辺の外濠は1967年に奈良県教育委員会の行った調査によって東北隅付近が検出され，800点にちかい木簡が出土している。今回の調査で発見され木簡の内容と，以前に発見されている木簡の内容とは，とくに顕著な相違点は認められない。紀年銘木簡は持統５年（691）から大宝３年（703）のものまである。

記載内容でとくに注目すべきものとして，次のようなものがある。文書木簡のうち文書形式の注目されるものとして，１．（表）「卿等前恐々謹解□□□」（裏）「□□（卿カ）受給請欲止申」２．（表）「恐々受賜申大夫前□」，（裏）「暦作一日二赤麻呂」等「大夫の前に申す（解す）」という書き出しをもつものがある。「充先＋前」に申すという書式をもつものは平城宮出土の過所木簡（和銅年間）や奈良県の調査で発見された「弾正台笠吉麻呂請根大夫前桃子一二升奉直丁刀良」の例などが知られるが，公式令にはこのような書式はなく，正倉院文書等でも類例をみない。令制の解や啓の形式が成立する以前の書式の名残りをとどめているのであろうか。また，（表）「□□□符處々塞職等受」と記した木簡は，塞職という他の文献史料にみられない官司名を記している。塞は文字どおりには「とりで」を意味するが，『万葉集』などでは塞を関と同じ意味で使用した例もあるから関司（せきのつかさ）を意味するものかもしれない。

文書木簡

貢進付札の木簡については，奈良県の調査のときと同じく評制記載の木簡が多数発見された。今回の発掘で新たに明らかになった評名は，尾張国知多評・春部評，美濃国各務評，近江国神前評，丹波国与射評，出雲国出雲評，阿波国板野評，伊予国久米評・宇和評，飛弾国（カ）大荒城評等である。これらの貢進付札については，奈良県調査のものもふくめて記載形式において注目すべき点がある。それは「年月日＋国名＋評（郡）名＋里名＋個人名」という形式を原則としているこであって，平城宮木簡の場合がすべて「国名＋郡名＋里名＋個人名＋年月日」という形式をもっていることと対称的である。後者は『令義解』等にみえる養老賦役令調査皆随近条の規定どおりの書式であるが，前者はそれと異る書式である。前者のうちもっとも

新しい年紀をもつものは，今回発見した「大宝三年十一月十二日御野国楡皮十斤」と記したもので，後者のうちもっとも古いものは同じく大宝３年と推定される下毛野国足利郡の贄の付札（後述）である。したがって，書式の変化はほぼ大宝令施行後数年のうちに行われたものと思われる。

また，これまで藤原宮では発見されていなかった「調」と明記した木簡がみつかっている。１．（表）「丁酉年若狭國小丹生評岡田里三家人三成」（裏）「御調塩二斗」，２．「乙未年御調寸松」とある２点がそれであって，浄御原令制下における調の付札としてははじめてのものである。

次に，外濠ＳＤ145の南岸にある土壙ＳＫ1903から12点の木簡が出土している。その中で注目すべきものは次の３点である。１．（表）「於市□（沽カ）遣糸九十斤 榎王 猪使門」（裏）「月三日大属従八位上津史岡万呂」，２．「九月廿六日薗職進大豆卅□」，３．「下毛野国足利郡波自可里鮎大贄一古参年十月廿二日」。１は榎王門（達智門），猪使門（偉鹽門）等の藤原宮の宮城門の門号が見えること，また市の記載のあることなどから，藤原宮宮城門の門号および位置の問題や，藤原京の市の所在地等について興味深い示唆を与えている。２では薗職という令制には見られない官司名がみえる。これは奈良県の調査で発見された木簡にある薗官・薗司等の官司と同一官司である可能性がある。そうであるとすれば同一官司が三様に呼称されたことになり，浄御原令制下では省寮職司という官司の上下関係がまだ未完成であったと推定される。３は贄の付札であるが，末尾の「参年」は年号を省略してもわかるものとすれば大宝３年が考えられる。この他２条の溝（ＳＤ140およびＳＤ1901Ａ）からも木簡は出土したが，釈読できるものはない。

藤原宮東辺外濠出土木簡　藤原宮東辺外濠（ＳＤ170）の北限から南へ約560ｍのところでで農業用納屋の建築にともなう緊急調査を行い，外濠を検出するとともに，木簡計36点を発見した。そのうち顕著なものは「大宮□官奴婢」「大祐務正七位上□」等がある。

藤原京右京七条一坊出土木簡　橿原市日高山住宅建設にともなう事前調査を推定藤原京右京七条一坊の地点で行い，木簡計10点を発見した。そのうち９点は井戸ＳＥ1850から，１点は朱雀大路の西側溝から発見した。そのうちで顕著なものとしては，井戸ＳＥ1850から出土したもので，（表）「第十八 厳敬飛 三慧飛 心持飛 安雲飛」（裏）「尊軆飛 玄耀飛 令蔵飛 頂蔵飛 顕蔵飛 賢□飛（弁カ）」と記した文書木簡がある。僧侶の名を列記したもので，「第十八」としているところをみると某経典の巻18を各僧にわりあて，写経させたことを示すのであろうか。「飛」とある注記を飛鳥寺のこととすれば，僧侶は飛鳥寺のものということになる。貢進付札としては「丹□（波カ）国加佐郡白薬里大贄久己利魚腊一斗五升和銅二年四月」がある。

藤原京右京八条三坊出土木簡　橿原市の道路建設にともなう事前調査を藤原京右京八条三坊（本薬師寺Ｐ.45参照）の西南隅で行い，八条大路の北側溝の中から木簡計３点を発見した。なかには咒符と思われるもの１点があるが，記載内容として顕著なものはなかった。（鬼頭清明）

藤原宮跡の整備(1)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・平城宮跡発掘調査部

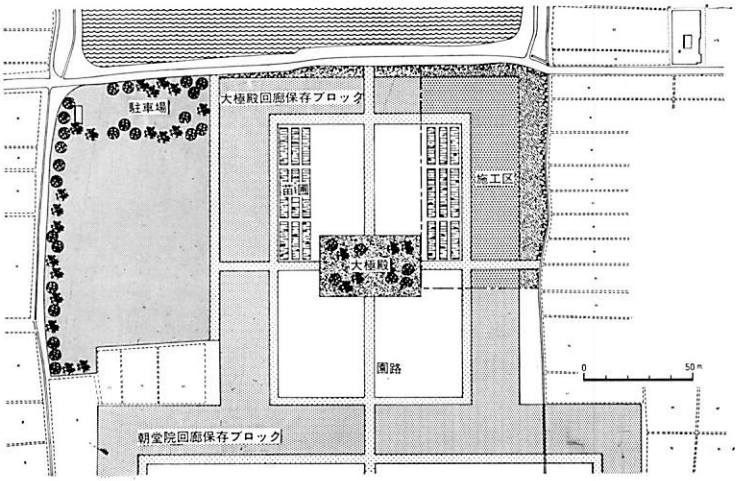
1971年度から始めた藤原宮跡地の買収は1974年までに約70000㎡を終了しており，それらは大極殿北部一帯に比較的まとまっている。大極殿・朝堂院地区については，一部を戦前に日本古文化研究所の発掘調査で確認しているが，その規模や位置などはまだ明確になっておらず，本格的な整備を行うためには今後の発掘調査をまたなければならない状態である。

現在，買収地については草刈り程度の整備をしているが，地元からの強い要望や橿原市の都市計画等に関連して，宮跡の将来図が必要となった。将来図の基本構想に関しては，宮跡が飛鳥・藤原地域をめぐる周遊の起点あるいは終点になるため，アプローチの問題や，大和三山を周辺にもち，平城宮とは異なった風土と景観をもつ地域であること，周辺の水利・発掘調査など多くの問題の検討が必要であるが，比較的まとまった買収地を持つ大極殿・朝堂院地区について5年程度の第1次暫定整備計画をつぎのように作成した。

1．一部発掘成果をえた大極殿・朝堂院およびその回廊など宮の中心的遺構を整備表示することにより，遺跡を理解し易くしその活用を計る。 2．規模・位置など全貌が確認されていない遺構は，推定位置の両側にさらに最低5ｍの幅を保存ブロックとして造成し，砂利敷など将来の発掘に支障のない材料を用いて，位置を表示する。 3．大極殿が遺跡の中心であり，現在の大極殿土壇が大和三山や藤原宮の展望地になっていることや土壇上の森が藤原地域のランドマークにもなっていることから，大極殿を中心に利用動線を計画する。 4．回廊に囲まれる地域は観賞を主体とするような利用を考え，植栽に重点を置き，将来本格的整備に利用すべき樹木の苗圃にもなるよう静的な空間として計画する。 5．買収地内通過用水路や排水路は，回廊両側溝を利用して設け，遺構表示との混乱を避ける。 6．大極殿回廊北西部（発掘済）の遺構の希薄な地区においては利用者のために，便所等の便益施設あるいは自転車，自動車の駐車場を考える。

以上の趣旨にそって本年度は大極殿東北部にあたる旧鴨公小学校跡地約6500㎡について整備を行った。

（渡辺康史）



藤原宮跡整備図

和田廃寺出土鴟尾の復原修理

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

1974年に実施した和田廃寺第1次調査で発見された鴟尾について，復原修理を行った。3型式5個体分の鴟尾片が出土したが，今回はこのうち，残りのよい1号鴟尾を復原した。

1号鴟尾は頭部下端の左右を欠くなど，若干の欠損部分があるとはいえ，全形をうかがうには絶好の資料である。細片を除いて55片にわれて残存し，破片の総重量は136kgであった。

復原に先立って，破片にはバインダー17原液を減圧含浸させ，個々の破片を強化した。接合にあたっては，破片を数個づつ接合してブロックをつくり，これを順次組立てた。接着には強度と粘りのあるエポキシ系接着剤（アラルダイト・ラピッドタイプ）を使用した。

組立てはヒノキの台板(120cm×90cm×5cm)上で行い，台にのせた状態で運搬・展示できるように配慮した。この台に高さ100cm，径10cmの支柱を取付け，これからさらに枝木を張出させた。これは鴟尾の胴部および尾部の荷重を内側から支え，分散させる目的である。ブロック状に接合した破片は，各々で相当の自重をもち，組立途中での歪みを防ぐため，全体を短時間で組上げることが要求された。その際，接合面積の小さい部分では，ステンレス製針金（径2mm）を枘・鎹として用いながら補強した。欠損部の補修には石膏を充塡し，欠損部分が大きいときにはステンレス針金を縦横にわたして心とした。また，胴部前端の下に木心をいれて補強することにした。この過程に要した接着剤は約6kg，石膏は約7kgに達した。

組立がおわったのち，接合部の目地埋めなど細部の仕上げを行い，石膏補修部分に着色を施し，復原修理は約2ヶ月をへて完了した。着色顔料は水彩絵具，砥粉，木灰などである。

つぎに，復原後の計測値を記しておく。

総　高	127.7cm	基底部後端幅	72cm	基底部前端幅	48.5cm
頭部高	46.5cm	基底部長径	74.5cm	重　量	約150kg

復原の完了後，写真測量を行った。遺物の撮影に際しては，投影面をどこに設定するかが問題になる。今回は鴟尾頂部にあるヘラ画き線と底部中心とを結び，これを基準にした。

正面図をみると，中心線がわずかに逆S字形に彎曲しているが，製作時に生じたものかどうかは検討を要する。左側面図において，復原部分では等高線が規則的に表現され，他の部分と明確に区別できるのは注意をひく。撮影および図化の仕様はつぎのとおりである。

カメラ	クローズアップレンズ No	図化縮尺	1：2
乾板	イルフォード　9×12cm	等高線	正面 2.5mm，側面 2mm
写真縮尺	$\frac{1}{20}$	作業機関	写真測図研究所
図化機	ステレオメトログラフ E型		

（西村康・甲斐忠彦・山田猛）

和田廃寺瑪尾

吉備媛王墓猿石の模型製作

飛鳥資料館

飛鳥資料館では屋外展示物として，飛鳥に関連ある石造物の模型の製作を進めている。その最初として，明日香村下平田の吉備媛王墓敷地内にある4体の猿石の模型を製作した。この製作にあたっては，宮内庁書陵部，同畝傍監区事務所及び，地元下平田の好意と配慮をうけたことに感謝したい（口絵8）。

猿石の位置は，これまで度々移動していることが知られている。元禄15年下平田池田の田圃下より出土した，猿・法師・男・女と呼ばれる奇怪な石造物は，『今昔物語』に記載されているように，復原的に欽明陵古墳（梅山塚）前方部南側の濠際に立てられたらしい（幸田幸男氏蔵，梅山塚図　第1図）。その後，吉備媛王墓（金鳥塚）の現在地に移されたものである。

吉備媛王墓の林間から垣間見える奇怪な姿は，いずれも，表情豊かで，両手を腹や胸で合せている。手指は4体とも5本揃い，下半身には陽物を表現した♂である。猿・男・女の3体は二面石で，背面には表面と違った全身の浮彫を施している。とくに両耳のうしろには毛髪を示す羽状の線がみられる。手指は3・4本と表面より少い。うち2体はうずくまった姿をしている。背面像は獣形をしていて，全体の相貌から推して♀であろう。高取城入口道端に運ばれた猿石も背面欠損部に毛髪の一部が残存しており，この3体と一連のものである。法師は背の肋骨を表現した筋肉質の単身像で，最も人間らしく，他の3像とは手法にも違いがある。

模型は乳白色のシリコン系樹脂を何度も塗り，布で厚みを持たせながら固定させ，笵抜きを行った。鋳込みは，無色のエポキシ系樹脂と花崗石を混合して，表皮となし，内側はロービングクロスとガラスクロスを芯に埋込み，裏打の補強をした。模型をつくるに際しては，奇怪な形状だけではなく，石質の差異について，気を配った。そのため，実物の詳細な調書を作成

第1図　梅山塚の猿石

第2図　猿石の模型

し，各部分ごとのサンプルをつくって，照合をくりかえした。4体の猿石は，すべて飛鳥地域特有の花崗石で作られ，黒色砂岩の斑点，縞状の質感や，石材の色調が単一ではなく，微妙な違いがある。この質感に合わせるため，実物の石質に最も近い明日香村細川谷に分布する花崗岩と黒色砂岩を粒状に砕き，樹脂を接着剤として埋込んだ。鋳込みについては，表面に花崗岩が露出するよう，樹脂を拭きとったため，従来のエポキシ系樹脂の着色のみによる仕上げより，質感を一段と近づけることができた。また，退色を防ぐ利点ともなった。実物には，永年にわたる苔が付着しているが，模型にも新たな苔が生えるため，再現しなかった。

今回の模型は花崗岩を多量に使用したため重量が増し，最大の猿石は約100kgになった。そのため，屋外への設置は，安全性を考慮して，内部に鉄骨を組込み，コンクリートで固定した。なお，1976年度から一般に公開している。　（猪熊兼勝・星山晋也）

遺跡判読のための空中写真の撮影条件について

埋蔵文化財センター

地下にある遺跡が，ソイル・マーク，クロップ・マークとして，空中写真上に記録されることがあることは，我国においてもかなりの例が知られている。

それらの例は，地形図作成のための写真撮影によって，いわば偶然に見つかったケースが多く，イギリス・ドイツなどにおけるように，それを目的とした組織的調査は行われていない。したがって，ソイル・マーク，クロップ・マークについての最適撮影条件に関する研究も行われず，何も判らないのがわが国の現状である。この場合の撮影条件としては，使用感光剤・撮影時期が挙げられる。

埼玉県稲荷山古墳を中心とした，「さきたま古墳群」の写真が収集できたのを機会に，東洋航測株式会社の協力を得て，さらに写真の種類を増し，撮影条件の検討をした。検討に使った写真は第1表に掲げたとおりである。

パンクロ写真；1968年1月撮影の写真（第1図）には，極めて鮮明なソイル・マークがみられる。土壌水分の多いところが黒っぽく，水分の少ないところが白っぽく写るのが普通であるが，ここでは，それが逆になっている。即ち，削平された前方部とか，周庭部が黒っぽく，埋められた周溝が白っぽく写っている。この遺跡は今は水田化されているが，ロームに覆われた台地上にあり，同様な地形条件にある茨城県の長者曲輪，栃木県の塚山古墳の場合は，溝の部分は黒っぽいという一般的な色調を呈しているので，削平後水田化されたところに現われた特殊な現象と言えよう。1970年5月撮影の写真では，マークはぼんやり見える程度で，同年10月撮影の写真では全く見えない。

赤外カラー；(1975.8.撮影) 梅塚およびその周辺の雑草地の部分に円墳の周溝がよくでている。しかし，水田中では，円墳も，稲荷山古墳の周溝も写っていない。ちょうど稲が成長し切って最も緑の活力が大きい時期である為，遺構の影響が現われていない。赤外カラーは，新緑の頃か，枯れはじめる頃のように，緑の活力が土壌条件を敏感に反映する時期がよいことが，北海道教育委員会が行った，竪穴住居跡・チャシの分布調査によって明らかにされた。

ナチュラル・カラー；(1975.1.撮影)円墳は明瞭であるし，稲荷山古墳の周溝も一部はっきりと見える。

マルチ・バンド；上記3種の写真は，それぞ

周庭帯についてである。

第1表 「さきたま古墳群」空中写真

れ撮影時が異るので，感光剤による比較検討は厳密に言えばできない。その短所を補うために，マルチ・バンドカメラによる撮影を行った。マルチ・バンドカメラは，1台のカメラに4個のレンズがあって，一度に同一個所を4コマ撮るようになっている。4個のレンズに，ブルー・グリーン・レッド・赤外それぞれの波長帯の光だけを透過させるフィルターをつける。つまり，同一被写体を4つの波長帯に分解して撮影するということになる。合成装置を使って，ブルー・グリーン・レッドを組合せれば，ナチュラルカラーになり，グリーン・レッド・赤外を組合せれば，赤外カラーになる。個々の波長帯でのマークの状態は，表のとおりである。いろいろ組合せを変えてみたところ，2種の組合せでは，ブルーとレッドの組合せのものが，最もよくマークが見えた。

サーマル・マッパー；赤外線よりも長い波長をもつ熱線を検知し，被写体の温度の高低を黒白写真に現わす装置である。遺構のある部分とない部分では，含水量が異り，異れば温度差があるだろう，という仮定のもとに，探査を行った。しかし，太陽光の反射エネルギーが強く，期待した結果は得られなかった。

サーマル・マッパーを有効に活用するには，太陽光の影響のない夜間がよいが，航空界の現状から日没直後とか日の出前に限られてしまう。

サーマル・マッパーが遺跡の分布調査に使えるかどうかのチェックの1例として，千葉県加曽利貝塚において，日の出前にテストを試みた。第2図は，その熱線写真で，地表面の温度差が黒白の濃淡で表わされる。白い部分が最も温度が高く，真黒なところが最も温度が低い。

貝塚の部分は，周辺との色調差はないが，たまたま斜めに撮ったかたちになり，貝塚の形を強調した結果になっている。

以上まとめると，1.ソイル・マークを撮るには，パンクロでよく（カラーのような高価な材料を使う必要はないという意味で），時期は，冬季がよい。2.クロップ・マークは新緑の頃か，秋に緑が黄色に変る頃に，色，特に緑の差をよく表わす赤外カラーか，ナチュラル・カラーで撮るとよい。3.熱線写真については，撮影条件に不明な点が多く，今後，地上用のものでテストすることから始めなければならない。（木全敬蔵）

第1図　稲荷山古墳　　第2図　加曽利貝塚

埋蔵文化財発掘技術者研修の現状

埋蔵文化財センター

遺跡遺物等の調査研究のための技術者研修の実施は，埋蔵文化財センターの主要な業務のひとつになっている。標記の研修は，1966年度に当時の文化財保護委員会が企画し，平城宮跡発掘調査部で開催したものが第1回で，その後毎年継続実施され，1974年度のセンター発足後はさらにその拡大充実がはかられてきた。

第1回研修の実施された1966年当時は，都道府県教育委員会で，文化財の専管課のあるものはわずかに4府県，他は社会教育課内の係にすぎなかったし，埋蔵文化財調査の可能な専門職員をおいたものもごくわずかであった。しかし，すでに名神・東名高速道路や東海道新幹線の建設工事にかかる遺跡の発掘調査も経験されており，1960年頃と比較すれば発掘調査届出件数は倍増し，その後の急激な開発の進行とそれにともなう発掘調査の増加がすでに予感されていた。こういった状況下で，地方公共団体における埋蔵文化財保護体制の充実強化が叫ばれ，その一環として実施されたのがこの研修のはじまりだった。

北海道	10
青森	2
岩手	10
宮城	4
秋田	4
山形	2
福島	9
茨城	5
栃木	3
群馬	13
埼玉	10
千葉	7
東京	3
神奈川	2
新潟	4
富山	3
石川	5
福井	4
山梨	3
長野	6
岐阜	3
静岡	2
愛知	4
三重	8
滋賀	1
京都	12
大阪	1
兵庫	11
奈良	3
和歌山	3
鳥取	8
島根	8
岡山	4
広島	9
山口	9
徳島	9
香川	1
愛媛	3
高知	1
福岡	6
佐賀	7
長崎	4
熊本	4
大分	3
宮崎	1
鹿児島	3
沖縄	8
その他	1
総計	246

研修受講者数（1976.9現在）

今では，全都道府県に文化財と文化の専管課室が設置されており，埋蔵文化財担当の専門職員・嘱託も市町村をあわせると1,000名を突破している。それに対応するかの如く，発掘届出件数も，1966年度の4倍，約2,800件に達している。しかし，急激に増加し，1,000名をこえた専門職員等のうち，考古学の専門課程を履修し，専門家としての教育をうけたものは3分の1程度にとどまっている。新しい技術の習得等を含めたこれら関係職員などの研修の必要性は，1966年当時と比較して，決して低くなっておらず，むしろ高まっているといってよい。

1976年9月現在の研修受講生は246名で，別表のように全都道府県におよんでいる。センター発足後では，都道府県職員が4割，市町村職員が3割，その他は教員等となっている。現在行っている研修課程は大きく一般研修と専門研修にわかれている。一般研修は，発掘調査の比較的経験の多くないものを対象とし，発掘調査に関する一般的な基礎的知識と技術の研修で入門講座風のものであり，約40日，16名を対象としている。これに対して，専門研修は特定の題目についての専門的な知識技術の習得が目的で，一般研修修了程度の経験を有するものを対象としている。1975年度は，遺跡測量（40日12名）と遺物整理（40日16名）の両課程があり，1976年度は，さらに遺跡調査と分布調査の2課程を増設している。これらの専門研修では，例えば遺跡測量課程では，測距・測角・水準の基礎的実習から三角・トラバース測量，さらには天測や選点造標といったものまで，きわめて実戦的な内容で，さらに新しい写真測量の文化財への応用技術も含まれており，この研修によって発掘調査の記録に際しての測量をほぼ完遂できる技能を習得できるようになっている。

幸いにしてこれらの研修はこれまで好評だったが，今後はさらに専門研修の充実と研修課程の多様化をはかり，埋蔵文化財保護の強化充実に役立たせていきたいと念願している。

（田中　琢）

大和条里の計測(続)

昨年度にひきつづき，当研究所は「大和における条里条坊の復原的研究」というテーマで，文部省科学研究費（一般研究A）の助成をうけたので，以下第2年度の成果を簡単に報告する。本研究の参加者は，狩野久（代表），横山浩一，細見啓三，鬼頭清明，伊東太作の5人で，図上計測は木全敬蔵がたすけた。なお本研究により作成した図化範囲は，平城・藤原両京を結ぶ下ツ道沿いに限られているため，大和条里全域の検討には，県内各市町村作成の1/2500地形図を採用した。

1．図上で検出した条里地割をもとに，1坪の長さを4657例について計測した結果，100m未満のものもあるが，大部分は100mから120mの間にはいり，そのなかで，東西辺，南北辺ともに，108m～110mのところに頻度曲線のピークがくる。従来からも1坪の大きさについては，このような数値が指摘されてきたが，計測例の多さと，それが精密地形図上における計測であるという点で，上記の結果は今後の条里研究の基礎数値になろう。

2．条里線の方位の検討は今後充分に行われなければならない課題であるが，路東三里と四里の界線方位が，国土座標方位に対して，0°23′西偏している。昨年の報告で，下ツ道東限線，路西一里の5坪目の方位が，それぞれ0°21′34″，0°21′12″西偏していることをのべたが，これらと同様の傾向をもつものとして注目される。同時にまた，下ツ道から東に遠ざかるにしたがって，偏差値が若干大きくなるという微妙な差異が，大和条里の施行の始点にかかわる重要な問題をはらんでいるようにおもわれ，今後の検討課題としたい。

3．一方東西線の方位は，横大路付近の京南第24条線で計測すると，路西では座標方位にほぼのっているのに対して，路東で0°37′北偏するという結果がえられた。路東と路西のこのような大きな差異がなにを意味するかは明らかでないが，充分注目すべき事柄のようにおもわれる。なお路東の南部での上記のような東西線の方位は，前項の南北線方位の偏差値と相関連したことであることはいうまでもない。

4．平城京南辺のいわゆる特殊条里は，北から第4坪の南限線（東西線）の方位が，0°14′北偏で下ツ道と直交すること，1坪の東西幅の平均は，京南一般条里よりやや短い106.6mであるのに対して，南北辺の長さは，1坪目100.9m，2坪目110.5m，3坪目108.8m，4坪目108.4mと不揃いである。この地域の条里施行時期は，別途に考えるべきであろう。

5．今年度においても大和条里関係遺跡の発掘調査が，二三の地域で行われたが，検出した溝・河道などの条里遺構の方位が，現存の条里線と一致するものと，大きく異なるもののあることが注意された。

最後に，本研究で作成した地形図（1/1000)は，中城・番条・伊豆七条・馬司・中・南八条・二階堂・宮堂・嘉幡・西嘉幡・庵治・溝幡・唐古・石見・鍵・八尾・阪手・田原本・南阪手・秦之庄・笠縫・多・西垣内・新口の24面である。

（狩野　久）

在外研修成果報告

—ドイツと北欧をめぐる—

1975年9月11日から11月10日まで，文部省在外研修生として，ヨーロッパ7カ国をめぐった。ドイツ連邦共和国で1カ月過したほかは数日間づつの短期滞在である。

ドイツ連邦共和国では，ハイデルベルク大学（ミロイチチ教授），ハンブルク大学（フライ教授），ケルン大学（リューニク教授），フランクフルト考古学研究所 ローマ=ゲルマン委員会（シューベルト博士）で，学史，型式学，土器・石斧・石鏃，埋納遺物などについて学び，文献渉猟にはげんだ。また各地の博物館では，展示方法を学ぶ点も多かった。ケルンで開催中の，「古い世界の新しい姿」展は，1950年来の重要発見遺物を網羅すると同時に，現代ドイツ考古学の研究方法を解説し，埋蔵文化財壊滅の危機をうったえることにも意を尽しており，その姿勢に感銘をうけた。フライ教授のすすめで，ビュルツブルクの考古学協会大会におもむくと，出席者名簿に名があがっており，懇親会での委員長挨拶の中でも紹介をうけるなど，予期せぬこともあり，ヘルベルト=キューン博士ほか多数の考古学者と知りあうことができた。

ドイツ民主共和国では，ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー（キッタ博士），ハツレ博物館（マティアス氏），マルチン=ルター大学（シュレッテ教授）で勉強した。中石器時代土器として日本でも知られている灯心草土器（ビンゼン=ケラーミク）が新石器時代後半にぞくすること，青銅器時代のロクロ土器なるものが，じつは粘土帯積み上げ法によっていることを確め，14C年代ほか多くの問題について知識・意見を交換した。

オーストリアでは，ウィーン大学（ピチオニ教授），自然史博物館（メリヒャー博士）をたずね，ハルシュタット遺跡の岩塩坑の壁をなめ，ザルツブルクのモーツアルト生家を訪れて，しばし感慨にふけった。

デンマークでは，1970年に来所した B. クリステンセン博士のお世話になり，国立博物館では，展示方法を記録したほか，トムセンの『北欧古代学入門』をめぐる疑問を解決し，彼の墓に詣でた。またライレの実験考古学農場を訪問した。スェーデンでは，遠東博物館（ヴィルギン博士）の展示方法を記録し，モンテリウスの初期の文献を受贈し，墓参した。オランダでは，グローニンゲンの生物考古学研究所（ウオーターボルク教授）を訪問した。イギリスでは，新石器時代を定義した原典，ラボックの『先史時代』の初版をみることができた。また学史にくわしいダニエル教授（ケンブリッジ大学）にトムセン英訳に訳者の付加が多いことを報告した。

今回の渡欧は，ハンブルクで高価なコーラを飲まされるなど苦い経験もあったが，ヨーロッパの風土・人間に直接せっすることができた喜びは，学問的収穫にも増して大きい。

なお，西ベルリンのドイツ考古学研究所，ハイデルベルク大学，ケルン大学，マインツのローマ=ゲルマン中央博物館，東ベルリンの D.D.R. 科学アカデミー，マルチン=ルター大学，コペンハーゲン大学，ケンブリッジ大学では，持参したスライドによって日本先史時代概説，飛鳥～平城宮概説を行い，欧文による紹介の必要性をうながされることもしばしばであった。

（佐原　眞）

公開講演会要旨

石器づくりの技術　道具をつくることによって他の動物と区別される人類は100万年の歴史のなかで，石どうしを打ち合せて割る技術とともに，石より軟らかい骨角ハンマーを用いる技術，たがねによる技術，押し剥ぐ技術を編みだす。

二上山産サヌカイトを鹿角製ハンマーで打ち缺いて長さ18cm，幅6cm，厚さ1.2cmの薄身な槍を完成できた。軟質ハンマーのねばりが薄く，奥深く剥ぎとってくれるためである。

鹿角をたがねとして石を割る実験を試み，幅4.5cm，長さ18cmの石刃を得た。サヌカイトも石理にしたがえば縦長の剥片を剥ぐことができることを証明できた。横長の剥片を生ずるのがこの石材の特質とみたのは誤りである。押し剥ぐ技術では弥生時代の鏃に優れた製品があるが，硬く，施しにくい石材である。　（松沢亜生）

古代住居再現　近年の発掘で得られた遺構や遺物――特に建築部材――を直接資料として古代の住居の復原を試みた。講演会では，1．胡桃館遺跡（秋田県），2．古照遺跡（愛媛県）3．不動堂遺跡（富山県）を中心にとりあげ，1では地上1m余も残存する部材から平安時代の板校倉住居を，2では堰としての材から建築部材のみをとり出し弥生時代の高床建物を，3では巨大な縄文時代の竪穴住居について，それぞれの復原過程をのべ復原図や復原模型を示した。さらに，今までの同種の復原結果と比較検討し，工法的に鮮明になった部分についても言及した。

なお，個々の成果については，それぞれの発掘報告書で詳述している。　（細見啓三）

海住山寺本堂壁画について　現在海住山寺本堂の須弥壇両側に対面して置かれている十一面観音来迎図と補陀落山浄土図の両板絵は，文明5年絵師加賀守の製作になることがほぼ確認できる。絵師加賀守については若干の問題を提起した。この両板絵は同形同大で，来迎壁か衝立屏風の表裏であったと考えられる。来迎図は聖衆を伴って往生僧のもとへ大海原を渡る対角線構図をなしており，南都系の独尊来迎図と異なり，むしろ阿弥陀廿五菩薩来迎図と近似している。一方浄土図は往生者達が登る山の頂に楼閣浄土を描き，むしろ春日曼荼羅などの垂迹曼荼羅と通ずる。このように複雑な絵画史的系譜から成立した両板絵は室町時代の観音信仰の所産としての特色を備えているといえよう。　（百橋明穂）

韓竈の実用と祭祀　竈形土器は，6世紀代に移入され，はりつけ庇式・一連庇式と仮称する2つの系統をもった。両系統の竈は，製作手法を異にするのみならず，組合せになる釜の形態や甑の有無にも変化がある。一連庇式の竈については，分布が畿内とその周辺に限られ，ミニチュア製品がみとめられない。はりつけ庇式竈の編年的特色は，庇の形態によくあらわされる。竈形土器は，文献にいうところの韓竈にあたり，祭にさいして飯・酒・餅などを調製するのに用い，常食の調理とは別の場所で使用された。その祭は，神祭を主としながらも，奈良時代においてすでに仏教的供養や儒教の祭にまで応用されている。当初における韓竈の日本への定着は，「忌火」の観念とのかかわりによるものらしい。　（稲田孝司）

調査研究彙報

護国寺本諸寺縁起集の研究　美術工芸・建築・歴史・考古の各部門の協力によって，その逐語的かつ総合的な研究をしようとするものである。1975年度は「招提寺建立縁起」より「勝尾寺縁起」の半ばまでの検討を了えた。

美術工芸研究室

薬師寺金堂銅造薬師三尊像調査　薬師三尊像台座模造に先立って現状調査を文化庁の依頼で行った。調査は本体及び台座で，表面の情況，鋳造技法などで多くの新知見をえた。表面では懸裳の左寄りに3ヶ所にわずかに鍍金が認められ，他の金色の部分はいずれも後世の金箔であること。像表面の光沢は毎年12月に行われるお身ぬぐいの際に付着した異物（恐らく澱粉質）のためであることなどである。鋳造技法では，本体の頭頂（肉髻部）に鋳継があり，恐らく鋳造の際の鉄心を通した部分，或は主要な湯口の痕と考えられ，また頸部から胸にかけての部分が大幅に鋳継がれていることも確認された。

仏教説話画の研究　絵因果経・法華経曼荼羅等を中心に資料を収集し，わが国における仏教説話画の変遷について研究を進めた。

奈良県及び周辺の文化財調査　奈良県円成寺，滋賀県桧尾寺等の彫刻の調査，京都府南山城地区の文化財調査等をおこなった。

歴史研究室

東大寺文書調査　文化庁よりの委嘱によるもので，1974年度からの継続調査である。未成巻文書第1部（寺領）第11（櫟庄）より第24—720（雑庄）までの調査を行った。また写真撮影については第1部第1—163より第11—41までを完了した。また寺外流出の東大寺文書についても資料収集をした。

西大寺典籍古文書調査　従来よりの調査の継続で，8函の調査を完了した。また騎獅子文殊像（重文）納入の大般若経等の写真撮影を行った。6月，12月

仁和寺典籍古文書調査　従来よりの調査の継続で，笈収納古文書ならびに塔中蔵階下収納の典籍類（主として版本）を調査した。3月

醍醐寺典籍古文書調査　第417函収納の紙背文書類・江談抄（重文）等の調査ならびに写真撮影を行った。8月

中宮寺典籍古文書調査　中宮寺所蔵の全典籍・古文書を調査して目録を作成し，また主要なものは写真撮影した。2月，3月

その他の調査（依頼によるもの）

石山寺　石山寺一切経・聖教調査　石山寺よりの依頼によるもの（調査責任者：嵯峨美術短期大学学長　佐和隆研氏）。8月，12月

興福寺　春日版板木調査　文化庁美術工芸課の調査に協力。4月，10月

東寺　観智院聖教調査　京都府立綜合資料館が実施の調査に協力（文化庁補助金による古文書等緊急調査の一つ）。9～10月，3月

大覚寺　大覚寺文化財総合調査　文部省科学研究費総合研究「大覚寺文化財の総合調査」（研究代表者：佐和隆研氏）による。8月，12月，3月

高山寺　典籍古文書調査　畠山文化財団研究費による共同研究（代表者：東京大学　築島 裕氏）。7月

建造物研究室

奈良井宿の調査　伝統的建造物群保存対策研究の一環として，前年度にひきつづき1975年度も木曽奈良井宿の町並とその歴史的環境の調査を実施した。成果は学報にまとめて刊行した。

今井町並調査　1968年度から1971年度にかけて今井町の民家調査を行ったが，報告書をまとめるにあたり，各家々および道路の関係を調べ，町全体の平面図を作成する資料をつくった。

（細見・福田）

徳島県美馬郡一宇村民家調査　剣山地の北斜面に位置する一宇村には棟札をもつ古い民家の存在が村史等で知らされていた。享保5年から明治20年にいたる間に建築された13件を11月に調査した。間取は小規模な家は横二間取，中規模な家は中ねま三間取で，時代による間取の変化は少いが，構造形式は変化が著しく，18世紀後半以後，柱の上半部をこきおとして横架材を貫通する構法が発達する。代表的民家として，葛籠家（享保5年），樫地家（安永3年），下木家（安永10年）などがある。　（宮沢）

秋山郷民家移設調査　国立民族学博物館の展示のために，長野県秋山郷から中門造の民家を移設することになり，これに協力して，4月～6月に解体と復原調査を実施した。この民家は19世紀初頭の建築になるもので，改造が少なく保存状況は良好であった。　（宮沢・藤村）

天理市の建築調査　社寺27件，民家90件の調査を行った。主な社寺建築としてつぎのようなものがある。

1　小規模な寺社建築

件名	所在	規模	時代	備考
杵築神社境内薬師堂	南六条町	方一間　宝形造	室町初期	
三十八所神社本殿	合場町	一間社春日造	室町中期	
春日神社本殿	岩屋町	一間社春日造	桃山	
2　規模の大きい浄土系本堂				
念仏寺本堂	中山町	五間堂，入母屋造，瓦葺	享保頃	
迎乗寺本堂	丹波市町	五間堂，入母屋造，瓦葺	寛延2年	
3　山間部の簡素な堂				
下之坊本堂	福住町	三間堂，寄棟造，草葺	室町	

つぎに民家では，四間取でなく，前座敷三間取が農家の間取としてむしろ一般的であったことが知られた。主な民家として，森嶋家（嘉幡町）四間取　宝永３年，久保家（下山田）五間取寛政７年頃，上田家（九条町）前座敷三間取　19世紀，などがある。また，幕末から明治初年にわたる大きい民家が多数残り，大和棟及び瓦葺農家の発展状況が明らかになった。

古い姿をとどめる町並集落として，上街道にそう櫟本・丹波市・柳本，そのほか石上・田部・二階堂菅田町などがある。　（岡田・上野・中村）

春日大社社殿の実測　春日大社の式年造替にあたり，本殿など社殿の修理が行われた。神社建築の代表的な遺構であるので，この機会に奈良県教育委員会に協力して実測を行った。

（岡田・宮本・上野・中村）

玉置神社の調査　奈良県吉野郡十津川村の玉置神社は，玉置山の山頂にある修験道関係の神社である。本殿は江戸時代後期の三間社入母屋造で千鳥破風及び唐破風を付け，内陣は広間で３棟の神殿を置く。社務所は吉野建の上に段をもつ書院造で江戸時代後期の建立であるが，何れも修験関係の遺構として重要なものである。　（岡田）

文化財建造物修理用資材需給の調査　近年，文化財建造物修理に使用する内地産桧，桧皮，茅，などの資材の供給が次第に悪化しているので，文化庁では1975・76年度の予定で，今後の対策をたてるために実態調査を行っている。1975年度は桧・桧皮に関して調査を行い，建造物研究室では，高野及び吉野産桧についての調査に協力した。　（岡田）

桂離宮建築調査　桂離宮御殿の解体修理に伴う事前調査を昨年度に引続き宮内庁に協力して行った。壁土の産地及びその施工職人の現況，御殿使用木材の材種及び産地等，修復に必要な技術面の検討を主として調査した。　（鈴木）

平城宮跡発掘調査部

内裏検討会　調査部では，1974年度から宮内の中心遺構である２つの推定内裏の性格を解明すべく，部員全員および飛鳥藤原宮跡発掘調査部等からの参加のもとに検討集会を行っている。1975年度に行った集会はつぎの２回である。7月　報告「第１次内裏の変遷」黒崎直，「第１次内裏地域出土の木簡」狩野久。１月　報告「第２次内裏地域出土の瓦」森郁夫，「第２次内裏地域出土の土器」吉田恵二。

金属製品の保存処理と修復　金属器の保存と修復について，今年度はつぎのような調査研究を行った。香川県久本古墳出土銅鋺一式，新潟県宮ロ古墳出土鉄刀等５点，石川県辰ノ口茶臼山古墳出土鉄器一括，福井県若狭国分寺出土金銅水煙一括，鳥取県伯耆国々庁出土鋤先５点。

石木遺跡出土木製品の調査　佐賀県石木遺跡から出土した古墳時代の木製品について実測した。農具・工具・鞍などからなる豊富な内容をもつ。３月　（黒崎・菅原・毛利光）

竹ノ下遺跡出土木製品の調査　愛媛県松山市竹ノ下遺跡出土の木器について，実測調査を行っ

た。農具・工具・刳物など豊富な内容をもつ5世紀末の遺物であり，とくに直弧文風の文様を刻した獣形柄頭は貴重な資料である（挿図）。3月　（黒崎・山本）

八代神社所蔵神宝の調査　昨年度にひきつづき，三重県鳥羽市神島に所在する八代神社の神宝について，2回目の調査を行った。今回は古墳時代から平安時代にいたる銅鏡その他金属具，土器，施釉陶器などの実測と写真撮影を実施。10月　（佐藤・金子・吉田・西・井上）

山陰地方出土瓦の調査　鳥取県倉吉市立博物館で開催された「山陰の古瓦展」を契機に，山陰地方出土瓦の調査を行った。畿内寺院の影響をうけた瓦当文様や，山陰地方独特の文様があり，山陰地方における造瓦の様相を知りえた。7月　（森・岡本・須藤・山崎）

美濃国分寺跡環境整備　大垣市の依頼により，発掘調査で明らかになった塔・中門基壇造成工事の基本計画および指導監督を行った。1975年4月～76年3月　（牛川・田中）

萩反射炉の写真測量　今年度は，反射炉修復方法を検討するための予備調査である。反射炉の傾斜・たつみ・沈下・ふくらみ・移動の経年変化をみるためポールを設置し，写真測定を行い，その指導監督をした。1975年4月～76年3月　（牛川）

埋蔵文化財センター

出雲国分尼寺の発掘　国分尼寺の範囲を確認するための第3次調査。主要な堂塔らしい遺構を検出するが，保存がわるく全体をしりえなかった。ただ，尼寺の範囲についてはおよその見当をつける資料をえた。島根県教育委員会。8月　（稲田）

美濃国分寺の発掘　整備事業に先だち，塔・回廊を発掘。塔基壇は一辺19.2m，高さ1.5m，初重平面は3.6m等間の3間4方であった。南面西回廊の一部を掘り，基壇幅5.2mの両側に溝を設けることが判明した。大垣市教育委員会。7月～8月　（八賀・木下・甲斐・千田・北野・井上）

伯耆国庁の発掘　国庁推定地の内郭とみられる東西110m，南北130mの長方形区画の西半部を発掘し，正庁など官衙遺構を検出した。時期は奈良時代から平安時代におよぶ。倉吉市教育委員会。9月～11月　（宮沢・佐藤・岩本圭・須藤）

肥前国府跡推定地の発掘　従来肥前国府については，佐賀県佐賀郡大和町を中心に数ヵ所の推定地があり，その確認のため調査。今回の調査地点では積極的な徴証がえられず，継続して調査を行うことになった。佐賀県教育委員会。10月～1月　（田中琢・松沢・工楽・西村）

志谷奥遺跡の発掘　1974年に島根県鹿島町志谷奥で，一括出土した銅鐸2個・銅剣7本の埋納状況を調べるための発掘調査を実施した。埋納穴の形状を確め，残っていた銅鐸・銅剣の破片を採集した。遺構は急斜面にあり崩壊の危険があるので，埋納穴を樹脂加工してとりあげた。鹿島町教育委員会。12月　（佐原・沢田・秋山）

木戸窯跡群の磁気調査　多賀城創建期の瓦窯群。遺跡保存のためプロトン磁力計による遺構確認を行い，磁気異常の分布から数基の窯跡を新に確認した。宮城県教育委員会。5月（岩本圭）

宮の前廃寺の発掘　国指定の史跡について環境整備を行うため，塔と金堂の位置と規模を確認

する調査を行う。塔跡における奈良時代の塼積基壇の保存は，とりわけ良好であった。福山市教育委員会。1月　（西　村）

伊丹廃寺保存管理計画策定委員会　国指定史跡伊丹廃寺について，保存活用のための保存管理計画策定のため，指導を依頼されたもの。伊丹市教育委員会。1月　（田中琢）

斎王宮跡発掘調査検討会　斎王宮の範囲を確認する発掘調査が1973年度から実施され，今年度も継続している。遺跡は奈良時代から鎌倉時代にかけて存続し，その遺構遺物についての性格を検討した。三重県教育委員会。5月　（横山）

開陽丸遺跡　戊辰の役の際，座礁沈没した徳川幕府の軍艦開陽丸の沈没地点における水中調査。本年度は5ヶ年計画の第1年度で，残存状況等を確認するための予備的な調査を実施した。北海道江差町教育委員会。6月　（田中琢）

大山廃寺発掘打合せ会　史跡指定地が塔跡に限られているため，他の堂宇跡を確認し，追加指定するための調査。塔跡周辺の調査と地形図の作成を行い，今後継続して発掘する予定。小牧市教育委員会。8月　（田中琢）

舟橋遺跡出土遺物の調査　大阪府舟橋遺跡出土の弥生土器を中心とする土器群について実測，写真撮影などを行う。考古学関係の所員が年間を通じて実施。

その他　以上のような調査に対する発掘および助言のほか，つぎのような遺跡についても指導などの協力を行った。平ル林遺跡（鳥取県，4月），十三宝塚遺跡（群馬県，5月～8月），伊場遺跡（静岡県，10月～12月），鳥浜貝塚（福井県，10月），御経塚遺跡（石川県，11月），草戸千軒町遺跡（広島県，12月），長越遺跡（兵庫県，12月），国道9号バイパスに関する埋蔵文化財調査打合せ（京都府，1月），馬形埴輪などの復原に関する助言（島根県，1月），岩橋千塚古墳群整備（和歌山県，2月），楢原廃寺（岡山県，2月）

松山市竹ノ下遺跡出土獣形柄頭実測図

奈良国立文化財研究所要項

Ⅰ　事業概要

1　研究普及事業

公開講演会

(1)　1975年5月17日　第37回公開講演会
「石器づくりの技術
——サヌカイト製石器の製作技術を
中心として——」
松沢　亜生
「古代住居再現」　細見　啓三

(2)　1975年11月15日　第38回公開講演会
「海住山寺本堂壁画について
——十一面観音来迎図の一作例——」
百橋　明穂
「韓竈の実用と祭祀」　稲田　孝司

現地説明会

(1)　1975年7月5日　大官大寺中門跡発掘調査現地説明会　甲斐　忠彦

(2)　1975年8月2日　藤原宮北門跡発掘調査現地説明会　西　弘海

(3)　1975年8月30日　平城宮跡推定第一次内裏東北部発掘調査現地説明会　川越　俊一

(4)　1975年12月6日　平城京左京三条二坊発掘調査現地説明会　田中　哲雄

(5)　1976年3月6日　平城宮跡推定第一次内裏東半部発掘調査現地説明会　中村　雅治

平城宮跡資料館・覆屋公開

(1)　春季特別公開
1975年4月27日～5月5日　見学者 4,815名
秋季特別公開
1975年10月25日～11月9日　見学者12,162名

(2)　見学者数

区　分	資料館	覆　屋	計
1975年	37,279	46,675	83,954
累計*	177,416	379,589	557,005

*資料館は1970年度・覆屋は1968年度以降

2　1975年度文部省科学研究費補助金による研究

種　別	研究課題	研究代表者	交付額
			千円
一般研究(A)	大和における条里条坊の復原的研究	狩野　久	9,100
一般研究(D)	木簡から見た奈良時代古文書の基礎的研究	横田拓実	290
〃	古墳時代木製品の集成的研究	黒崎　直	300
奨励研究(A)	敦煌壁画における仏教説話画の展開	百橋明穂	330
〃	古代の呪術とその遺物	金子裕之	280
海外学術調査	海外学術調査の成果の整理・活用等に関する調査研究（考古・美術関係）	横山浩一	570

3　飛鳥資料館の運営

概　要

1975年3月15日に開館した飛鳥資料館は観覧者年間約10万人を数え，構内も着実に整備されるなど順調な運営を続けた。

開館後1年間のデータでみる限りでは，石舞台への入場者の約30%が資料館に入館しており，まだ知名度の低さを示している反面，学校関係の団体観覧の申し込みは順調に増加しつつある。5月3日（土）と5月4日（日）の両日全入場者に対しアンケート調査を行った。回答者数887，（回収率78.2%）。年令・職業・居住地・飛鳥へ来た回数，資料館を何で知ったかの各項目と感想の記入を求めた。また11月からロビーに希望・感想を記入する設備を設けた。

展　示

第1展示室　常設展示（1974年度と同じ）
第2展示室　特別展示「飛鳥の寺院遺跡
—最近の出土品—」
(1975.9.22～76.3.30)

普　及

玄関正面のインフォメーションルームに，飛鳥関係図書を開架図書として書棚に並べ一般観覧者の参考に供し，学芸室職員が，入館者の質問に応ずるインフォメーションサービスを行った。

展示関係のカタログとして『飛鳥の寺院遺跡Ⅰ—最近の出土品—』を刊行した。

入館者数

（1975.4.1〜1976.3.31　開館日数306日）

	普通観覧	団体観覧	有料計	無料	合計
一　般	47,187	27,064	93,704	4,714	98,418
小・中学生	6,674	12,779			
計	53,861	39,843			

資料の購入等

購入　伝百済大田附近出土単弁蓮華文軒丸瓦，奈良市山村廃寺単弁重弁蓮華文軒丸瓦，扶余弥勒寺蓮華文軒丸瓦，西安寺蓮華文軒丸瓦，各1個

模造製作　重要文化財天人文甎（岡寺所蔵）1枚，重要文化財筑前国戸籍（文化庁保管）1幅，猿石（吉備媛王墓所在）4軀，瓦（岡寺軒平瓦・慈光寺軒丸瓦）2個

4　埋蔵文化財センターの研修・指導

研　　修

地方公共団体において埋蔵文化財保護行政を担当する者に対して，埋蔵文化財の発掘調査及び保存についての専門的知識と技術について研修を行い，埋蔵文化財の保護に資することを目的として，次の研修を実施した。

(1)　昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者一般研修
1975年7月21日〜8月30日（参加者15名）

(2)　昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺跡測量課程）
1975年10月20日〜11月29日（参加者12名）

(3)　昭和50年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修（遺物整理課程）
1976年1月19日〜2月28日（参加者16名）

(4)　研修員受入
阿部　　恵（宮城県教委文化財保護課）
1975年5月1日〜7月22日
前井　一二（富山県立富山南高校教諭）
1975年8月1日〜9月5日
田辺　勝美（東京大学東洋文化研究所助手）
古山　　学（　〃　　〃　　技官）
千代延恵正（　〃　　〃　　〃　）
1976年1月19日〜1月31日
村山　斌夫（東北歴史資料館技師）
1976年1月12日〜2月10日

調査指導

（北海道）開陽丸遺跡，（岩手）見分森自然公園内遺跡，（宮城）木戸窯跡群，多賀城跡，（群馬）十三宝塚遺跡，（石川）御経塚遺跡，（福井）鳥浜貝塚，（岐阜）美濃国分寺跡，（静岡）伊場遺跡，（愛知）大山廃寺跡，（三重）斎王宮跡，（和歌山）岩橋千塚古墳群，（兵庫）長越遺跡，伊丹廃寺跡，（鳥取）伯耆国庁跡，（島根）出雲国分尼寺跡，志谷奥遺跡，富田川河床遺跡，（岡山）平ル林遺跡，楢原廃寺跡，（広島）下本谷遺跡，草戸千軒町遺跡，宮の前廃寺跡，（佐賀）肥前国府跡，

その他，埋蔵文化財取扱い研修会（群馬）

埋蔵文化財ニュース刊行

第1号　埋蔵文化財調査報告一覧（1973年度刊行分）8月20日刊

第2号　埋蔵文化財発掘関係統計（1972年度分）12月15日刊

第3号　都道府県における遺跡分布調査の現況　3月1日刊

5　その他

委員会等

平城・飛鳥藤原宮跡調査整備指導委員会

(1)　総会　　1975年5月15日・16日　於平城宮跡資料館

(2)　平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会　1975年9月27日　於平城宮跡資料館

(3)　平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会　1976年1月23日　於平城宮跡資料館

(4)　平城宮跡整備基本計画策定に関する小委員会　1976年3月19日　於平城宮跡資料館

第2回飛鳥資料館運営協議会　1975年5月9日　於飛鳥資料館

第1回木簡研究集会　1976年1月13日・14日　於平城宮跡資料館

外国出張

鈴木嘉吉　大韓民国における考古学的発掘調査の体制と方法の調査研究のため大韓民国へ派遣された。

1975年6月29日～同年7月6日

佐原　真　文部省在外研究員としてドイツ連邦共和国・ドイツ民主共和国・オーストリア・デンマーク・オランダ・連合王国に派遣された。：ヨーロッパにおける出土遺物の分類整理及び分布論・年代論並びに歴史博物館の展示構想方法の研究のため。

1975年9月11日～同年11月10日

所内報の刊行

研究所の規模の増大にともない，所員が研究所の動向や事業の状況を常時把握しうるよう6月から月1回所内報を刊行することとし，年度末までに7号を刊行した。

第3収蔵庫の完成

74年度着工した第3収蔵庫は75年度に入り完成し，7月に遺物整理および保存科学関係の諸室が庫内に移転した。また埋蔵文化財センターも仮にここに移転した。次いで3月，作業員控室が付設された。

協力事業等

(1) 特別史跡高松塚古墳の保存施設設置工事並びに壁画修復に関する調査に，随時文化庁に協力した。なお保存施設竣工式が1976年3月29日に行われた。

(2) 文化庁では1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており，1972年度からは当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当しているが，1975年度の状況は下記の通り。

区　分	面　積	購入額
1975年	31,790.98m²	515,397,354円
国有地合計	83,932.97	1,255,900,100

大蔵省より移管の1,404.92m²を含む。

Ⅱ　図書及び資料

図書　32,766冊

区　分	種　別	購　入	寄　贈	計
1975年	和漢書	900	936	1,836
	洋　書	209	17	226
累計	和漢書	21,656	8,856	30,512
	洋　書	1,950	304	2,254

写真 134,923点　　(1975年度末現在)

Ⅲ　研究成果刊行物

1975年度刊行物

名	称	担　当　者
学報第25冊	平城京左京三条二坊	町田・岩本（圭）・中村・加藤・稲田・金子・山本・佃
学報第26冊	平城宮発掘調査報告Ⅶ	鈴木・佐原・狩野・宮沢・町田・森・小笠原・西・吉田・佃
学報第27冊	飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ	横山・河原・鬼頭・木下・稲田・猪熊・安達・八賀・田辺・宮沢・石丸・水野・前沢
学報第28冊	研究論集Ⅲ	黒崎・猪熊・森・町田・山本
学報第29冊	木曽奈良井町並調査報告	鈴木・岡田・宮沢・細見・宮本・上野・中村・松本・福田
史料第10冊	日本美術院仏像等修理記録	田中義恭・星山・百橋
基準資料第3冊	瓦編3解説	平城宮跡発掘調査部考古第三調査室
概報他	奈良県五条の町並	岡田・宮沢・宮本・上野・中村・松本
	異人館のあるまち神戸	岡田・牛川・宮沢・宮本・上野・中村・松本
	阿波の民家	宮沢・天田・藤村
	西隆寺発掘調査報告	狩野・村上・黒崎・甲斐・岩本（圭）・藤原・菅原・東野・今泉・岡本・西・小笠原・吉田
	平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報	田中（哲）・松本・岡本・川越・毛利光・狩野・綾村・佃
	平城京左京八条三坊発掘調査概報	佐藤・田中・宮本・綾村・須藤・川越・山本・狩野・佃

前年度までの刊行物

奈良国立文化財研究所学報

年度	名　　称
1954	第1冊　仏師運慶の研究
	第2冊　修学院離宮の復原的研究
1955	第3冊　文化史論叢
1956	第4冊　奈良時代僧房の研究
1957	第5冊　飛鳥寺発掘調査報告
1958	第6冊　中世庭園文化史
	第7冊　興福寺食堂発掘調査報告
1959	第8冊　文化史論叢Ⅱ
	第9冊　川原寺発掘調査報告
1960	第10冊　平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告
1961	第11冊　院家建築の研究
1962	第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶
	第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察
	第14冊　レースと金亀舎利塔に関する研究
	第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査
1963	第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査
1965	第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査
	第18冊　小堀遠州の作事
1967	第19冊　藤原氏の氏寺とその院家
1969	第20冊　名物裂の成立
1971	第21冊　研究論集Ⅰ
1973	第22冊　研究論集Ⅱ
1974	第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査
1975	第24冊　高山一町並調査報告一

奈良国立文化財研究所史料

年度	名　　称
1954	第1冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）
1955	第2冊　西大寺叡尊伝記集成
1963	第3冊　仁和寺史料　寺誌編1
1964	第4冊　俊乗坊重源史料集成
1966	第5冊　平城宮木簡　1　図版
1967	第6冊　仁和寺史料　寺誌編2
1969	第5冊　平城宮木簡　1　解説（別冊）
1970	第7冊　唐招提寺史料　1
1974	第8冊　平城宮木簡　2　図版・解説
1975	第9冊　日本美術院仏像等修理記録　Ⅰ

奈良国立文化財研究所基準資料

年度	名　　称
1973	第1冊　瓦編1　解説
1974	第2冊　瓦編2　解説

Ⅳ　機構・定員

機構の改正

1975年4月2日省令改正に伴い埋蔵文化財センターに研究指導部設置。同部に遺物処理研究室新設。

定　員

	指定職	行政一	行政二	研究職	計
1974年度	1	22	7	62	92
1975年度	1	23	7	65	96

（増員内訳）庶務部　1　埋蔵文化財センター　3
（減員内訳）平城宮跡発掘調査部　1

Ⅴ　予　算（1974年度）

歳　　出	910,376.633円
人件費	279,444,633円
運営費	405,558,000
事業管理	4,185,000
一般研究	35,098,000
特別研究	2,223,000
発掘調査	263,301,000
宮跡整備管理	30,377,000
飛鳥資料館運営	41,457,000
埋蔵文化財センター運営	28,917,000
施設費	225,374,000

Ⅵ　施　設

土地　23,371㎡（当所所管）

春日野地区　5,126㎡　　飛鳥資料館　16,902㎡
資料館地区　1,343㎡

1,026,117.97㎡（文化庁所管）

平城宮跡地区　942,195㎡
（他に奈良県先行取得地71,190.066㎡がある）
藤原宮跡地区　83,932.97㎡

建　物

建　物	春日野	平城	藤原	飛鳥資料館	計
事務所	797	1,820	155	152	2,924
倉庫・収蔵庫	191	3,777	963	—	4,931
車庫	20	130	104	94	348
会議室	40	192	—	42	274
講堂	109	—	—	89	198
写真室	86	192	32	49	359
展示室	—	360	—	648	1,008
覆屋・展示棟	—	1,518	—	—	1,518
その他	200	1,427	135	1,520	3,282
計	1,443	9,416	1,389	2,594	14,842
重要文化財旧米谷家住宅					198
合計					15,040

主要工事

(1) 施設整備

飛鳥資料館宿舎給排水工	2,125千円
第3収蔵庫改修工	15,500
飛鳥資料館宿舎周辺整備工	1,244
平城宮跡プレハブ内装工	1,600
平城宮跡プレハブ棟クーラー取設工	1,051
覆屋周辺電気整備工	1,850
飛鳥資料館宿舎囲障外取付工	1,323
藤原宮跡整理棟軀体工	2,000
〃　遺物整理棟内装工	2,120
〃　キューピクル取設工	2,100

(2) 平城宮跡地等整備

平城宮跡灌水施設工	11,000千円
〃　水銀灯取設工	1,800
〃　水路整備工	1,700
平城宮跡環境整備昭和50年度第1期工	38,000
藤原宮跡地整備第1期工	2,200
〃　第2期工	18,900

(3) 建設省近畿建設局委任工事

平城宮跡第3収蔵庫	181,420千円
飛鳥資料館植栽工	22,363

Ⅶ　人事異動

（1975年4月1日～1976年3月31日）

4月1日　文化庁文化財保護部文化財鑑査官に転任　坪井　清足
東京国立博物館総務部施設課長に転任　根本　栄夫
会計課長に昇任　杉本　光司
飛鳥藤原宮跡発掘調査部長に転任　工藤　圭章
国立国語研究所庶務部会計課長補佐に転任　広瀬　二朗
文部事務官採用　西　徹
文部技官採用　毛利光俊彦
土肥　孝・松本修自
光谷拓実・木全敬蔵
事務補佐員採用　東田道代・宍戸雅子
研究補佐員採用
森　庸子・泉谷聖子
赤阪さよ子・福原まり花
坂野和信・宮川伴子
栗山伸司
会計課長補佐に昇任　日高　参夫
飛鳥藤原宮跡発掘調査部第二調査室長に昇任　鬼頭　清明
建造物研究室長に配置換　岡田　英男
平城宮跡発掘調査部遺構調査室長に配置換　宮沢　智士
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換　細見　啓三
埋蔵文化財センター長に配置換　横山　浩一
会計課専門職員に転任　森口　節之
文部省に出向（筑波大学助教授に就任）　長谷川　誠

4月2日　埋蔵文化財センター研究指導部長に昇任　田中　琢
飛鳥藤原宮跡発掘調査部第一調査室長に昇任　猪熊　兼勝
埋蔵文化財センター研究指導部考古計画研究室長に昇任　松沢　亜生
平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任　横田　拓実
埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官に昇任　伊東　太作
埋蔵文化財センター研究指導部遺物処理研究室長に配置換　工楽　善通
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長に配置換　八賀　晋

4月3日　文部技官採用　秋山　隆保
文部技官に転任　安田龍太郎

4月15日　飛鳥資料館庶務室長に昇任　五十嵐春雄

4月17日　事務補佐員採用　岡本ひろみ

5月1日　文部省に出向（京都工芸繊維大学学生課課長補佐に就任）　前田　和夫

6月1日　美術工芸研究室長に昇任　田中　義恭

6月28日　辞職　金井　しん

6月30日　辞職　岡本ひろみ

7月15日　事務補佐員採用　島田　郁子

7月30日　辞職　中川　友子

8月30日　辞職　藤村　礼子

9月1日　埋蔵文化財センター研究指導部測量研

	究室に転任	亀井　伸雄
	文化庁に出向（文化財保護部建造物課）	藤村　　泉
9月30日	辞職	西　　一典
10月1日	事務補佐員採用	中西千枝子
	会計課課長補佐に昇任	森口　節之
10月27日	事務補佐員採用	石田賀代子
12月20日	事務補佐員採用	石谷　幸子
12月27日	辞職	寺田千鶴子
3月30日	辞職	北野　保・栗山伸司

Ⅷ　組織規定

文部省設置法　抜萃

昭和24年法律第146号
昭和43年6月15日一部改正

第36条　第43条に規定するもののほか，文化庁に次の機関を置く。

国立文化財研究所（前後略）

第41条　国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

2　国立文化財研究所の名称及び位置は，次のとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東　京　都
奈良国立文化財研究所	奈　良　市

3　国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

4　国立文化財研究所及びその支所の内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則　抜萃

昭和28年1月13日文部省令第2号，追加昭和43年6月15日文部省令第20号，
昭和45年4月17日文部省令第11号，昭和48年4月12日文部省令第6号，
昭和49年4月11日文部省令第10号，
昭和50年4月2日文部省令第13号，

第5章　文化庁の附属機関

第4節　国立文化財研究所

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に，所長を置く。

2　所長は所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に，庶務部，美術工芸研究室，建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか，奈良国立文化財研究所に，飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に，次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては，次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し，連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか，他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては，次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経費及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持，管理に関する事務を処理すること。

五　庁舎の取締りに関すること。

（美術工芸研究室等の事務）

第127条　美術工芸研究室においては，絵画，彫刻，工芸品，書跡その他建造物以外の有形文化財及び工芸技術に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

2　建造物研究室においては，建造物に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

3　歴史研究室においては，考古及び史跡に関する調査研究を行ない，並びにその結果の公表を行なう。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に，考古第一調査室，考古第二調査室，考古第三調査室，遺構調査室，計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては，平城宮跡に関し，次項から第六項までに定める事務を処理するほかその発掘を行なう。

3　考古第一調査室，考古第二調査室及び考古第三調査室においては，別に定めるところにより分担して，遺物（木簡を除く）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

4　遺構調査室においては，遺構の保存整理及び調査研究並びにそれらの結果の公表を行なう。

5　計測修景調査室においては，遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

6　史料調査室においては，木簡の保存整理及び調査研究，史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行なう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の二室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に，第一調査室及び第二調査室を置く。

2　第一調査室及び第二調査室においては，それぞれ藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡（藤原宮跡を除く）に関し，次の各号に掲げる事務を処理するほか，その発掘調査を行なう。

一　遺構及び遺物の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表

二　遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表

三　史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては，飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し，国民の理解を深めるため，この地域に関する考古資料，歴史資料その他の資料を収集し，保管して公衆の観覧に供し，あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行なう。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に，館長を置く。

2　館長は，館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に，庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては，飛鳥資料館の庶務，会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては，次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料，建造物，絵画，彫刻，典籍，古文書その他の資料の収集，保管，展示，模写，模造，写真の作成，調査研究及び解説を行なうこと。

二　飛鳥地域に関する図書，写真その他の資料の収集，整理，保管，展示，閲覧及び調査研究を行なうこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行なうこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては，次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し調査研究及びその結果の公表を行なうこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して，専門的，技術的な研修を行なうこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し，地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ，専門的，技術的な指導及び助言を行なうこと。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は，埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センター内に，教務室及び研究指導部を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては，研修の実施に関する事務を処理するほか，埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の三室及び事務）

第137条　研究指導部に，考古計画研究室，遺物処理研究室及び測量研究室を置く。

2　考古計画研究室においては，第133条各号に掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。をつかさどる。

3　遺物処理研究室においては遺物の処理に関し，第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

4　測量研究室においては，埋蔵文化財の測量に関し，第133条各号に掲げる事務をつかさどる。

職　員　（1976年8月1日現在）

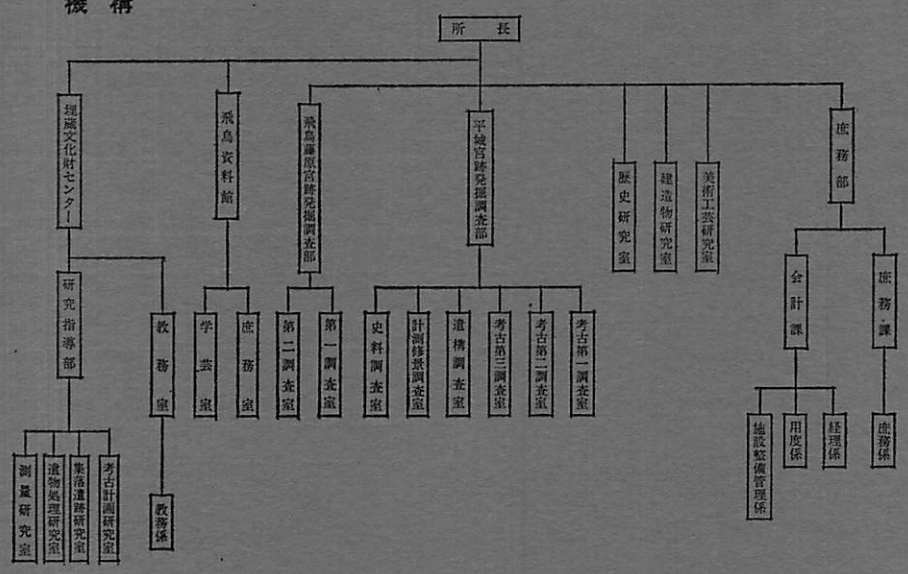
所属		氏名	官職		担当
		小川　修三	文部事務官	所長	
庶務部	庶務課	服部　栄次	文部事務官	部長	
		音川啓太郎	文部事務官	課長	
		岩本　次郎	文部事務官	課長補佐	
		井上　政和	文部事務官	係長	
		西　徹	文部事務官		人事
		忠　利二	文部事務官		庶務
		木寅　忠雄	文部事務官	警務員長	平城警備
		森田　光治	文部事務官	警務員	平城警備
		岡田　博旡	文部事務官	警務員	警備
		栢本　安臣	文部事務官	専門職員	平城事務
		八幡　扶桑	文部技官	専門職員(併任)	写真
		宮本　宣代	事務補佐員		所長室付
		港　悦子	事務補佐員		庶務
		中川かよ子	事務補佐員		図書資料
	会計課	杉本　光司	文部事務官	課長	
		吉田　博次	文部事務官	課長補佐	
		日高　参夫	文部事務官	課長補佐	
		加藤　建夫	文部事務官	経理係長	
		冬野　徹	文部事務官		経理
		前川　重子	事務補佐員		経理
		刀谷　純子	事務補佐員		経理
		吉田　和子	事務補佐員		経理
		西田　健三	文部事務官	用度係長	
		小林　雅文	文部事務官		用度
		沖村　重則	文部事務官	(併任)	用度
		中西　建夫	文部技官		自動車運転
		飯田　信男	文部技官		自動車運転
		東田　道代	事務補佐員		用度
		石田賀代子	事務補佐員		用度
		日高　参夫	文部事務官	施設整備管理係長(併任)	
		渡辺　康史	文部技官		整備管理
		奥村　末儀	文部技官	(併任)	施設
		沖村　和子	事務補佐員		施設
美術工芸研究室		田中　義恭	文部技官	室長	彫刻
		百橋　明穂	文部技官		絵画
		星山　晋也	文部技官	(併任)	彫刻
		守田　公夫	調査員	(非常勤)	工芸
		森　庸子	研究補佐員		資料整理
建造物研究室		岡田　英男	文部技官	室長	建築
		細見　啓三	文部技官	(併任)	建築
		宮本長二郎	文部技官	(併任)	建築
		上野　邦一	文部技官	(併任)	建築
		牛川　喜幸	文部技官	(併任)	遺跡庭園
		田中　哲雄	文部技官	(併任)	遺跡庭園
		福山　敏男	調査員	(非常勤)	建築
		福田　幸子	研究補佐員		資料整理
歴史研究室		田中　稔	文部技官	室長	歴史
		東野　治之	文部技官	(併任)	歴史
		綾村　宏	文部技官	(併任)	歴史
		菅原　正明	文部技官	(併任)	考古
		田辺　征夫	文部技官	(併任)	考古
		金子　裕之	文部技官	(併任)	考古
		堀池　春峰	調査員	(非常勤)	歴史

所属		氏名	官職		担当
平城宮跡発掘調査部		鈴木　嘉吉	文部技官	部長	
	考古第一調査室	町田　章	文部技官	室長	考古
		沢田　正昭	文部技官		保存科学
		菅原　正明	文部技官		考古
		山本　忠尚	文部技官		考古
		毛利光俊彦	文部技官		考古
		小林　謙一	文部技官		考古
		八幡　扶桑	文部技官	専門職員	写真
		佃　幹雄	文部技官	専門職員	写真
	考古第二調査室	佐藤　興治	文部技官	室長	考古
		吉田　恵二	文部技官		考古
		須藤　隆	文部技官		考古
		土肥　孝	文部技官		考古
		井上　和人	文部技官		考古
	考古第三調査室	森　郁夫	文部技官	室長	考古
		岡本　東三	文部技官		考古
		安田龍太郎	文部技官		考古
		巽　淳一郎	文部技官		考古
	遺構調査室	宮沢　智士	文部技官	室長	建築
		宮本長二郎	文部技官		建築
		中村　雅治	文部技官		建築
		清水　真一	文部技官		建築
	計測修景調査室	牛川　喜幸	文部技官	室長	遺跡庭園
		田中　哲雄	文部技官		遺跡庭園
		高瀬　要一	文部技官		遺跡庭園
		光谷　拓実	文部技官		遺跡庭園
		森　蘊	調査員	(非常勤)	遺跡庭園
	史料調査室	狩野　久	文部技官	室長	歴史
		加藤　優	文部技官		歴史
		今泉　隆雄	文部技官		歴史
		綾村　宏	文部技官		歴史
		細見　啓三	文部技官	主任研究官	建築
		横田　拓実	文部技官	主任研究官	歴史
		栢本　安臣	文部事務官	事務総括(併任)	事務
		木寅　忠雄	文部事務官	(併任)	警備
		森田　光治	文部事務官	(併任)	警備
		飯田　信男	文部技官	(併任)	自動車運転
		宍戸　雅子	事務補佐員		事務
		中村美千代	事務補佐員		事務
		橋本　伴子	事務補佐員		事務
		中西千枝子	事務補佐員		事務
		石田　信子	事務補佐員		図書資料
		池田千賀枝	事務補佐員		写真
		吉村　司朗	技能補佐員		整備管理
		城本きよの	業務補佐員		庁務
		石川千恵子	研究補佐員		公開
		泉谷　聖子	研究補佐員		資料整理
		赤阪さよ子	研究補佐員		資料整理
		福原まり花	研究補佐員		資料整理

所属		氏名	官職	担当
飛鳥藤原宮跡発掘調査部		工藤 圭章	文部技官 部長	
	第一調査室	猪熊 兼勝	文部技官 室長	考古
		甲斐 忠彦	文部技官	考古
		上野 邦一	文部技官	建築
		大脇 潔	文部技官	考古
		川越 俊一	文部技官	考古
		岩本 正二	文部技官	考古
		沖村 重則	文部事務官	事務
		刀谷 敏博	文部技官 (併任)	自動車運転
	第二調査室	鬼頭 清明	文部技官 室長	歴史
		木下 正史	文部技官	考古
		黒崎 直	文部技官	考古
		西 弘海	文部技官	考古
		金子 裕之	文部技官	考古
		千田 剛道	文部技官	考古
		山崎 信二	文部技官	考古
		松本 修自	文部技官	建築
		小笠原好彦	文部技官 主任研究官	考古
		石谷 幸子	事務補佐員	事務
		井上 直夫	技術補佐員	写真
		山田 猛	研究補佐員	考古
		坂野 和信	研究補佐員	考古
		丸川 義広	研究補佐員	考古
		新田 洋	研究補佐員	考古
		宮川 伴子	研究補佐員	資料整理
飛鳥資料館		小川 修三	文部事務官 館長(取扱)	
	庶務室	森口 節之	文部事務官 室長心得	
		大西 肇	文部事務官	事務
		奥村 末儀	文部技官	施設
		刀谷 敏博	文部技官	自動車運転
		米田一二三	文部事務官	警備

所属		氏名	官職	担当
飛鳥資料館	庶務室	中垣 睦美	事務補佐員	事務
		福田 洋子	事務補佐員	事務
		島田 郁子	事務補佐員	事務
		稲垣 耕正	技能補佐員	自動車運転
		乾 春雄	技能補佐員	保安
		福井 敏子	業務補佐員	庁務
	学芸室	田中 義恭	文部技官 室長(併任)	彫刻
		星山 晋也	文部技官	美術
		東野 治之	文部技官	歴史
		西口 寿生	文部技官	考古
		津村 広志	文部事務官	図書普及
		藤沢 一夫	調査員 (非常勤)	考古
埋蔵文化財センター		横山 浩一	文部技官 センター長	
	教務室	藤田 修	文部事務官 室長	
		山崎 一博	文部事務官 教務係長	
		藤本 節子	事務補佐員	事務
	研究指導部	田中 琢	文部技官 部長	
	考古研究室 遺物処理研究室	松沢 亜生	文部技官 室長	考古
		岩本 圭輔	文部技官	考古
	遺構遺跡研究室	佐原 真	文部技官 室長	考古
		田辺 征夫	文部技官	考古
		山中 敏史	文部技官	考古
	測量研究室	工楽 善通	文部技官 室長	考古
		秋山 隆保	文部技官	保存科学
		木全 敬蔵	文部技官 室長	測量
		伊東 太作	文部技官 (併任)	測量
		西村 康	文部技官	考古測量
		亀井 伸雄	文部技官	建築測量
		伊東 太作	文部技官 主任研究官	測量

機構



ANNUAL BULLETIN
OF
NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE
1 9 7 6

CONTENTS

Page

Preface 1

Research

General Investigation of the Shin-yakushiji Temple 2

Investigation of Groups of Historic Buildings in Kōbe and Gojō 12

Reconstruction of the Kometani House of the Edo Period 16

Excavation of the Nara Palace Site and the Ancient Metropolis of Nara 18

Excavation of Wooden Materials Used in the Construction of an Eighth Century Model of a Nara Palace Building 36

On the Physical Layout of the Nara Palace Site (6) 38

Excavation of the Asuka and Fujiwara Palace Sites 42

Wooden Tablets Excavated at the Fujiwara Palace Site 51

On of the Physical Layout of the Fujiwara Palace Site (1) 53

Appropriate Exposure Conditions for Aerial Photography of Site Interpretation 58

Measurement of the *Jōri* Land System in Yamato Province 61

Symposia and Lectures

Symposium for Research of Wooden Tablets 11

Open Lectures Held by the Institute during 1975 63

Reports and News

Construction of the Third Storehouse for the Objects Excavated from the Nara Palace Site 40

Restoration of the Ridge-end Tile Excavated from the Wada Ruined Temple Site 54

The *Saruishi* Replica 56

Present Situation of the Institute's Training Program for Archaeological Excavation 60

Research Abroad by Affiliate of the Institute 62

Other Specific Researches and Surveys 64

Organization and Activities of the Institute 69

Published by
Nara National Cultural Properties Research Institute
Nara, 1976